
傭兵と決闘者の協奏曲

デボエンペラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傭兵と決闘者の協奏曲

【NZコード】

N3100X

【作者名】

デボエンペラー

【あらすじ】

SEED事変から3年後のグラール太陽系、そこでは亜空間研究のほかにあるカードゲームが流行していた。だがそのカードゲームは旧文明から伝わる決闘の儀式もあり、それを知っていた異能者の集団があった。一人の異能者が依頼で海底レリクスの調査を行つていた際、あるカードを手にした時物語は始まつた。（転生者の募集を始めました。こいつはムカつく、と言つような奴を頼みます

11月9日現在）

傭兵と少女の邂逅

それは遙か遠いところのお話
母なる太陽と三つの惑星を持つグラール太陽系
そこに住む『ヒューマン』と彼らから生まれた『キャスト』『ニ
ューマン』『ビースト』は、外宇宙から飛来した『ＳＥＥＤ』によ
る襲来を受け、滅亡の危機を迎えた。
しかし、四つの種族は心を一つにして戦い、激しい攻防の末、こ
れを封印した。

それから二年後。

近年グラールで流行しているカードゲーム『デュエルモンスター
ズ』や今まで自粛されていたスポーツや芸能関係の番組の再開等の
影響もあり、グラールに活気が戻つてきつつあった。
しかしその影ではＳＥＥＤとの攻防の傷跡が未だに深く刻まれ、
資源枯渇が深刻な問題になっていた。

外宇宙への移動を可能とする『亜空間航行理論』が提唱され、再
興の道を外宇宙への大規模な移民計画に求めた。

政府・軍・三惑星中の企業は結束し、『亜空間航行』への実現化
へ向けて動き出していた。

グラールの新しい未来を願つて……

「……分かりました。ではしばらくお待ちください」

パルムに存在する高層ビルに訪れた私は受付嬢にそう言われてロビーのソファーに座ると、手の甲に装着させていたナノトランサーを起動させて旧文明について書かれた書物を手にしてページをなぞるよつにして読み始めた。

「……」

旧文明の遺跡『レリクス』にそこに存在する機動兵器『スタリティア』、そしてSEED事変最終決戦の地となつたSEEDに汚染されたレリクス『リュクロス』……リュクロスは完全な『合の時』に消滅したものの、それでもレリクスは未だに数多く存在している。

「……やはり興味深いな」

今の子供たちがイーサン＝ウエーバーの英雄譚に憧れるように、私は現在のグラールで再現できない旧文明の技術の数々に心惹かれている。

グラールに住むヒトの素となつたヒューマンが他の三種族を作り上げたと言うのに、レリクスが持つ封印装置などの技術は今の技術を持つとしても再現できていないのだ。

近年流行しているカードゲームも、流行した切欠は旧文明が持つ技術の再現に成功したからと言つ理由であり、『それ』が無かつた時代は単なる知る人ぞ知る物にしか過ぎなかつたのだ。

閑話休題。

「近年旧文明の技術も少しづつ解説されて来ている……出来るなら全て解説されるまで生きていきたいがな……それに最近新たに」「お待たせしました。社長がお会いになられるようです」

感嘆の声を上げる中で先程の受付嬢が声を上げると、私は読んでいた本を閉じて腰を上げた。

「ありがとうございます」

そう言つて私は足を進め、転送装置に乗ると係の者が装置を操作すると私の周りの景色が消滅すると、次の瞬間には別の景色に変わつていた。その先には赤いラインが特徴的な扉があり、私は迷わず

声を上げた。

「私です。入ります」

その声に反応したのか扉のラインが緑色に変わつて音を立てて開かれる。その最奥に高価なスーツを着た黒髪の男があり、彼は窓からパルムの町並みを見下ろしていた。

「来たか」

彼の言葉を合図に私は礼をして頷く。その一方で彼は私に向かって声を上げた。

「海底レリクスが新たに発見されたのは知ってるな？」

その言葉を聞き私は頷く。その一方で彼は目つきを鋭くさせて私に向かい声を上げた。

「……一番新しいウォザーブルグ動乱とウォザーブルグ・リクスの件は覚えているな？」

その件を聞き、私も思考を海底レリクスからウォザーブルグ・リクスに変える。あそこではSEED事変を生き抜いた戦友が2人行方不明となつてしまつたからだ。

「ウォザーブルグ・リクスで発見された『星屑の竜』と『無限獄の民』……それと似た様な“モノ”が存在する可能性はあると思うか？」

彼の問い合わせに対して私は考える。確かに“無い”とは言い切れない

が、『在る』のならば既にＳＥＥＤ事変で見つかっているはずだ。だがしかし、万が一同じものが『在る』のならば

「……無いとは言い切れませんが、在るとも限りません。ですが在った場合、即座に行動に移さなければなりません」

私が言つ曖昧な言葉に対して彼は溜息をついたが、予想していたのか落胆も大声を張り上げもしなかつた。

「そう、だろうな……」

彼自身私と同じ事を思つっていたのだろう。探せば在るのかかもしれないが、態々彼自身が熱を上げる必要は無いのだ。

それに彼自身、グラールを代表する三大メーカーに今や亞空間研究で有名なインヘルト社には劣るがこの『ＭＡＷ社』の代表であり、今や自分達の所属する一族の長でもある。

私や彼は直接関わっていないが、一番新しいウォザーブルグ動乱は『舞台となつた場所に偶然居合わせていただけ』の今までのものと違い、完全に『自分達の諍いが元凶』なのだ。結果2人の戦友がそこに封印されていた“モノ”を使い殺しあつてお互い行方不明になつてしまつた。

その結果として当時の長は責任を取つて隠居して一族の長は彼になり、物のついでに一族が経営していたＭＡＷ社の株価は一時期悲惨なものになつてしまつた。

まあ、私たちにとって会社の経営がまずくなつたと言うのが一番重要だった。私たちのスポンサーでもあつた組織もスキヤンダルやら組織の代表の交代（代表が2人のうち一方の師匠だつた）でゴタゴタしていたのだ。

今までえまざい状況だと言うのにもしココで新たに問題を起こしたらどうなるか？ そうなれば今度こそ一族崩壊、彼は名実共に先

代以上の無能の烙印を押される事だろう。

閑話休題。

「……まあ、今回の調査には私が向かいます。私個人レリクスに興味がありますし、調査ついでに在れば回収します」

その言葉に嘘は無い。今回の件にしたつて“アレ”の事が無かつたとしても私自身が立候補して向かうつもりだったのだ。

「……すまないな」

「気にしないでください兄上。私は荷物を纏め上げ、現地へ向かいます」

そう言つて私は彼の部屋を出てこの場を去つた。扉を閉じた時、あの2人の顔が過ぎつたが首を大きく横にふるつてこの場を後にした。

そんな会話があつたのがつい2～3日前。

私は今、新たに発見された海底レリクスに足を踏み入れていた。集められた傭兵の多くが単独行動を好むのか纏まろうともせずに広間にいる同業者を踏みみ寄っているように見えた。

『これだけの人数と質のいい傭兵が集まっているって事は大手のスポンサーがついているようだな』

自分の隣にいたフルフェイスメットを被った男が周囲を見渡しながら声を上げる。だがその声は機械質で、合成音声に近いものを持つ。恐らく彼は『キャスト』と呼ばれる種族なのだろう。

私自身が話題を欲していたのか、見ず知らずのキャストに向かって声を上げた。

「大手のスポンサーがついているって事は儲けられそうだ、と言つところか？」

『ハハハ。どうやら台詞を取られてしまったようだな』

田の前のキャストはそんな声を上げると周囲を見渡して言った。

『周囲の傭兵の輪に加わるうとしない事からフリーなんだろ？ 大したものだな』

『昔チームを組んだ事があつたがリーダーが死んだ上、残った仲間たちが行方不明になつたりして自然消滅だ』

私は声を上げると、田の前のキャストは申し訳なさそうに声を上げた。

『……すまない。軽率だつた』

流石に今回は嫌味に聞こえてしまつたのだろうか、若干気まずい雰囲気が流れてしまう。だが、そんな気休めの言葉など私には煩わしいだけだ。

「気にしないでくれ、よくあつた話だ」

SEED事変ではガーディアンズだろうが傭兵だろうが。メンバーが死んだりチームが解散したりするなどは吐いて捨てるほど良くあつた話だ。

私たちの場合もウォザーブルグ事変は終わった後だが、リーダーが死んだのはガーディアンズコロニーが落下した時の事だったから嘘ではない。

「それに私たちが悔やんだところで死んだ者が蘇えるわけでも在るまい……」

『君は仲間の死を簡単に受け止めているのか……？』

「そうしなければ、やつてられなかつただけだ」

私はそう言つと他のヒトを見渡す。キャストの男も気が滅入つたのか話題を変えてきた。

『まあ、海底レリクスの調査もあつて腕利きを集めているのかもな』

「もしくは人海戦術を選んだか、だな」

私はそう言つと手にしていた本を開いて呟いた。

「ま、私は興味があつて海底レリクスの調査に来たんだ。スポンサーの考えなんかどうでもいいさ」

『ほう、傭兵を辞めて学者になつたのか？ だったら口は宝の山だぞ』

「別に辞めた訳でも学者になつた訳でもないが……あと『宝の山』とはどういう意味だ？」

彼の台詞に食指が動いたのか私は彼に向かつて声を上げた。

『「この海底レリクスはつい最近発見されたものだ。調査はまだ、殆どされていない……この意味は分かるか?』

「システムはまだ動いているからソフト面の解析が出来るし、お宝もまだ残っているから旧文明の技術の粹を集めたモノも手に入る……といったところかな?』

『ああ。あとこれは極秘情報なんだが……』

キャストの男は私に向かつて耳打ちする。

『どうやらこの海底レリクスには何か異常なものが存在するらしい。何でも『デュエルモンスター』のモンスターが突然現れた』と言つ話が数件出ているらしいんだ』

その言葉を聞き、私の表情が強張ったのが自分でも分かった。自分がココに来た『本命』らしきものの情報が出てしまった以上、ココに留まる必要もない。

「興味深い情報をありがとう。では私はそろそろ奥に向かつよ」「どうか。気をつけろよ、この辺りはまだ安全なようだが奥は正に『未開の地』って訳だからな」

「気をつけていくぞ。お互い運があつたら、また会えるかもしけないな」

さて、一応渡された地図を見ながら進むか。

そう思つて奥へ進み始めた矢先

「帰るついで帰るついで……！」

めんどくせそうにしていた短髪の男ビーストに向かって声を上げたヒューマンらしき金髪の少女 恐らくハーフか養子か何かだろう の静いが眼に映った。

『……何だ、あの子供は？ 腕利きの傭兵や学者のよつこはどても見えないが……』

先程まで一緒にいたキャストの男が怪訝そうな声を上げた。だが私にしてみたら興味が無い事だったので気にせず奥へと進む。

「……？」

だが何歩か進もうとした矢先

「！」

突然心臓が強く鼓動し、私の足を止めた。

(バカな……在り得ない……－－)

真っ先に思い浮かんだのは自分達の一族に伝わる、行方不明になつた片割れが言うには『呪い』と呼べる代物だつた。だがそれは一族の極僅かな“女性”にしか発現しないはずのものだ。

私は男であるから在り得ない。もちろん同一性障害ではない。押さえつけた心臓が熱い、まるで強い熱が心臓を焼き尽くさんばかりだ。

その熱さに耐え切れず膝を折つて蹲つた瞬間、突然視界が揺れた。だが今は心臓の熱を鎮めるのが先決だがどうすればいいのか検討がつかない。

「う……ぐ……」

視界の揺れが治まるとようやく心臓を燃やすとしていた熱は矛を收めた。触れてみても先程の熱さが嘘のように静まつていたのだ。

「何だつたんだ……今のは……」

周囲を見渡すと、そこは先程まで人がいたのが嘘だつたかのように誰も存在しなかつた。先程の心臓の熱さに負けそうになつていたので気付かなかつたが相当な揺れだつたのだろう。

(……体の調子は異常が無い……私は男だから一族の呪いと話ではない……)

私は拳を握つては離したりを繰り返し、身体機能に異常が無い事を確認する。かすかにだが耳に奥の方から誰かが何かを叩く様な音が響き渡る。

(私がやるべき事は海底リクスの調査……そして本命は海底リクスに在る“モノ”の搜索……)

眼を瞑つて自分のやるべき事を再確認する。その時に耳に誰かが叫ぶ声が聞こえた。

(最大の懸念は先程の一件だ……これが万が一原生生物やスタリティアとの戦闘中に出でてしまったら不味いな……単独行動は控えるべきか……)

先程の件を考え、ここは救助を待つしかいかと考へた矢先

「……ちょっと」

(だが救助が来るかどうかも怪しくなつてきた状況だ、どうしたものか……)

「ちよつと……無視しないであたしに声かけてよーーー！」

甲高い怒り声が私の耳を貫き思考を吹き飛ばす。声のした方を振り向くと、そこには羽のついたヘッドフォンが特徴的な金髪の十代前半近くの少女がいた。

「……それは私に言つてるのか？」

「アンタ以外の誰に声をかけられるつて言つのよーー！　か弱い女の子が泣いてるんだよ？　そこは優しく声をかけるものでしょ！？」

だが今の彼女を見ても泣いていた様には見えなかつた。むしろ口づちに怒りを向けてきたようにも見えたのだが……

「その割には元気そうだな」

「う……」

その言葉に対しても彼女は氣まずそうに顔をそらした。氣のせいから冷や汗も流れているように見える。

「だ、だつて『困つた時の女の子の武器は涙だよ』ってチエルシ一が言つてたから……」

「やはり嘘泣きだつたか」

「せつまではホントに泣いてたんですね……ってこんな話をしている場合じゃないよね」

顔を若干動かすと彼女の奥のほうに在る扉の色は赤。つまり閉じられた状態だ。更に言えばその扉は私が「ココ」に来る際に入つてきた扉でもある。

「ああ、どうやら私たちは閉じ込められたようだな」

「うん。同じ境遇の人人がいてもどうにかなるつて訳じゃないし……といひで、何が起きたか分かる?」

彼女の問いに対しても私は首を横に振る。自分自身心臓が熱くなつてそれどころではなかつたし、視界が揺れた事と何か関係が在るのか?

「そうよね。あたしもいきなりで、それどころじやなかつたし……気がついたら皆になくなつてるし……どうしたらいいんだろ?」

彼女の問いに対しても私は淡々と答えた。

「「」のまま救助が来るまでおとなしくするか、奥に進んで脱出す
るかの一者择一だな」

「やっぱそれしかないよね……大人しくするのって苦手なんだけ
どな……」「

彼女が納得したかのような表情を見せるが私は奥に進む。その姿
を見たのか慌てたかのよつた声を上げた。

「……つて、まさか奥に進む気！？」

「そうだ……まあ、慎重に進むしかない。待っていても救助が来
ないかも知れないしな」

先程起きた心臓の熱の件もあって奥に進むにしても慎重に事を
進めなければならない。本当ならば彼女の力を借りたいところだが、
その様子では借りられそうに無い。

「無理無理……やだやだ……危ないって……」口は未開の
レリクスなんだよ？ すつごい危ないんだよー？」

「……嫌なら来なくてもいいぞ。口は安全のようだからな」

私がそう言うと奥へと進む。しばらくすると彼女が声を張り上げ
ながらこつちへ向かつて走つてくる音が響いた。

「行くから……あたしも一緒に行く……」

その言葉を聞いて私は小さく笑みを浮かべた。これで心臓が熱を
持つてしまつた時の保険は出来た。

「そりゃ……すまないが名前は何と書つんだ？」

一応同行する事になるので、名前だけは聞いておいたかと思つて
問い合わせた。

「ふえ？ あたし？ あたしはHミコア。Hミリア＝パーシヴァ
ル」

Hミリアはきょとんとした表情で自分の名前を答えたが、即座に
表情をえて問いただした。

「それでアンタはなんて名前なの？ あたしに名乗らせてアンタ
は名乗らないんじゃ話にならないわよ」

彼女の問いは尤もだ。私は心臓の熱を気にしながら声を上げた。

「そうだな……私の名前はギュスター・ギュスター＝ウイン
斯顿だ」

私が自分の名前を名乗ると、Hミリアが再び声を上げる。

「それじゃギュスター・ギュスター＝ウイン斯顿と一緒に
暮らすよ、みんなくわね」

彼女がそう声を上げると私も声を上げた。

「了解した」

そう言つてしまはう先へ進んだ矢先、先程の広場より小さい部屋
に行き着く。するとそこには一足歩行の鮫の様な原生生物が腕を振

り上げながら歩いていた。

「ああー、やっぱり原生生物がわんさかいる……見逃したりは

「してくれるんだつたら傭兵など必要ない」

「だよねえ……」

ヒミリアの言葉を私は一刀両断する一方で、ナノトランサーを起動してツインハンドガンと自作のシャドウーブを取り出す。それは悪魔をデフォルメ化させ、右手に首叉を持たせたマスクコットの様なものだった。

「あれ？ ドゥーブとハンドガンを使い分けるの？ 近距離主体の人かなって思つたんだけど……」

「……そうだ。私の都合ですまないが今回は遠距離主体で行く」

あの発作が元凶で今回は遠距離主体の攻撃方法を取る事にした。だが私の様子を見てヒミリアの様子がおかしくなる。確かにツインハンドガンとシャドウーブを同時に使つのは珍しいとは思うが、別に法律で禁じられているわけではない。

「あの……その……」

「何だ？」

「あのね……えつと、えつとね……直前で言つのもなんだけど……」

「……」

しどろもどろと言ひ出すヒミリアだったが、意を決したのか声を上げた。

「あたし、武器は持つても実は戦闘経験なんて殆ど無いの

その言葉に対しても私は一瞬だけ眼を見張った。自信なさ気だった彼女は先程の言葉の影響か、活力に満ち溢れていた。

「……だから、頑張つて！ あたしは応援してあげるから…！」

その言葉に対して私は大きく溜息を吐いた。

その時私は気が付いていなかった。その溜息がＳＥＥＤ事変の時、仲間たちの喧騒や見当はずれな発言に呆れていた時の物と同じだった事を。

傭兵と少女の邂逅（後書き）

さて皆さん、最低なチート系転生者が嫌いなことが判明してしまった久々の『テボエンペラー』です。

リア友や皆様からの意見を元に執筆しなおしました。まぶ鍊などは気が向いたらリメイクしようと考えていますゆえご容赦を。

ところで皆さん、質問があります。

再修業していた際、私は瞬様のなのは小説を見て転生者のオリ主について深く考えさせられました。

そして『Psycho』は実質オリ主様の物語でもあります。更に『オリ主』の大半は『転生者』を指す事が多いです。

その中には「腐った運命を変えてやる……」「ハーレム作るぜフハハハハ……」「なんでチートオリ主の僕様の方が優れてるのに、何のとりえも無い原作主人公が勝ち組なんだ！！ 許せないお！！」「はなんて傲慢な悪なんだ！！」とほざく最低系転生者なんざ吐いて捨てるほどあります。

本題になりますが、そう言つた「最低系オリ主」を敵に出していくのかと言う考えになつてしまい、出した場合もラスボス変更の可能性（特にエピソード1）まで出てきてしまいまして……それにPsychoの原作なぞるだけつて言つのもなんだし……

と詰つわけで転生者をどうするかと詰つアンケートをとります。

- 1・転生者お断り（大まかなストーリー やラスボスは原作どおりに行きます）

2・転生者上等-（ストーリーやラスボスが変更される可能性あり）

どちらかに入れてください。

……まあ、遊戯王入れた時点で原作崩壊上等ですけど……あれマジ
で劇薬だわ

異能者（前書き）

「」でやく遊戯王と本格的にクロスします。
何かいろいろととんでもない事になつてますが、遊戯王じや特に珍
しくないよね！！

異能者

Hミリアのカミングアウトから數十分後……

「行け！！ リゾネーター！！」

悪魔を模したシャドウーグが地面を射抜いて原生生物を転ばせ、私がその隙をついて左手の銃でその頭部を射抜く。続けて右手の銃で突進してきた浮遊型のスタリティアを撃ち落した。

「Hミリア、1体そっちに行つたぞ！！」

私の声を合図にHミリアが手にした長柄の棒から炎を灯す。流石に応援するだけだと呟うのは私も反感を覚えたので何が出来るかと問いただしたところ、炎と雷に回復系のテクニックが使えるし接近戦や射撃戦も基礎だけは出来るとの返事が返ってきたので、私が撃ち漏らしたのは彼女が担当すると呟う事で決着がついた。

「ほいっと……」

彼女が放った炎……炎系テクニックの初歩・フォイエがスタリティアを焦がしつくし、地面に落下したと同時に碎け散る。

「さて、次は……」

扉を開き細い通路が伸びているのを見ると、ナノトランサーを調整してバイザーを取り出すとそれを装備してから眼前を見た。

「やはりか……」

直後に右手のハンドガンで通路に向けて何度も発砲する。エミリアが驚いた表情を見せるが次の瞬間には私の行動を理解した。

「え……爆発した？ なんで罠があるって分かったの？」

「このバイザーはガーディアンズなどで支給されているゴーグルの改造品で、コイツを使って爆弾を見つけたと言う訳だ。ちなみにサーチした爆弾の数も教えてくれるぞ」

そう言いながらも撃ち続ける私だったが、「ゴーグルのカウントが0になつたのを合図に撃つのを止めた。

「ゴーグルって……重い、嵩張る、邪魔の三拍子が揃つた不良在庫じゃなかつたっけ？」

「昔の話だ。私のバイザーはMAW社の商品だし、今ではGRM社から性能がいいゴーグルがガーディアンズや同盟軍に支給されているって話だからな」

今もガーディアンズにいる仲間の一人が手紙で愚痴つていたのを思い出して言う。私の言葉に対してもミリアが感嘆の声を上げる。

「行くぞ……とは言えまだまだ続くか……いつになつたら外に出られる事やり……」

徐々に奥に進んでいく私たち。再び広い空間に出て、周囲に危険が無い事を判断した時エミリアのほうからなにやら音が響いた。

「何があつた？」

私がそう言って振り向いた時、彼女は腹部に手を当てて、ただ一

言いつただけだった。

「お腹空いた……」

彼女の赤くした表情と腹部を押さえた様子を見て私は溜息をつく。仕方ない、リゾネーターを警戒モードにセットしなおして私も腰を下ろした。

「さて、と……」

私は黄色い箱を取り出すとその中からカロリーメイトを取り出し、一本エミリアに渡した。

「食うか？ あとサバイバル用の缶詰もあるが……」

「……いただきます……」

彼女がそう言つて勢いでカロリーメイトと缶詰にあつた物を食べると声を上げた。

「技術や知識、事前の用意まで隙がない……さすが傭兵つて感じ

……」

彼女がそう言つとよつやく安心の声を上げた。満腹になつたのか表情も明るい。

「……なんか、ちょっとホッとしたよ。あんたがいれば、安心ぽいつしや」

「そうか」

私は黙々と缶詰や箱を仕舞う。レリクスの調査団が後でこれを発見した時、何を言われるか分かったものではないからだ。

「あたしは軍事会社に登録されてるだけで、戦う気とかこれっぽっちも無かったのに……だって言つてたのに、あのおっさん。あたしが働かないからって、無理やり連れ出してこんな危険なレリクスにほつぱりって……」

徐々にHミリアの話は「おっさん」なる人物に対する愚痴にシフトされていった。と云つより先程どんなでもない発言が出た気がするのだが……

「あー、なんかだんだんハラが立つてきた！……」しなか弱い女の子を、一人にするなんてひどいと思わない！？」

「Hミリア、お前は少し働いた方がいい」

先程のとんでもない発言に対しても私が水を飲みながら意見を言つと、Hミリアは更にふて腐れたような声を上げる。

「ふーー！……なによギュスター、アーヴ！……アンタもおっさんの味方！？」

「少なくとも働かない奴に拒否権は無いだけだ。何も過労死するまで働けというわけでもない」

「いいよいよ。けつきよく皆そうなんだから。あたしの言つ事なんて誰も本気で聞いてなんかくれないんだ……まあ、とにかくあんたがいれば無事に帰れるような気もするし、おっさんには後で文句言いまくつてやる……」

Hミリアの言葉に私は相槌をつつだけで済ませる。よくよく考えれば仲間の一人の愚痴も良くこうやって聞き手に回っていたなと思いました。

「『『SEEDはもう存在しないからレリクスは安全だ』とか言い張つてあたしの言つ事信じてくれないし。……』」

「それが一般的な解釈だからな。そもそも原因が完全消滅したのではレリクスも起動しなくなる」

私は一般的な解釈を述べてHミリアに反論する。だが私の言葉が切欠になつたのか彼女の表情は真剣なものになる。

「そりや、今まで発見されたレリクスはSEED襲来があつたときばかりに機能を覚醒させていたよ。でも、全部が全部そうだったかつて言つとそう言つわけじゃなかつたんだよね」

突然真剣な表情になつた彼女の言葉に私は息を呑んだ。今までの自堕落な彼女とは打つて変わつたかのような雰囲気に私は圧されました。

「一説によるとSEEDの散布する素粒子に反応して起動しているみたい。だけど同時に磁場の乱れも観測できるから、どうもそれだけじゃないんだよね」

「だが、何故お前はレリクスは危険だと言えるんだ？ 磁場の乱れとか素粒子云々は関係ないのでは？」

「うん、でもSEEDは3年前に一掃されているはずなのに、こうしてレリクスは起動しているわけでしょ？ それにSEEDが居たにも拘らず起動しなかつたレリクスも存在しているのよね」

その言葉に私は息を呑んだ。レリクスやスタリティアの存在意義はSEEDの消滅と共に全て意味が無いものになつているはずだ。それに私は起動しなかつたレリクスについて1つ思い当る節が在る。そう、ウォザーブルグ・レリクスだ。

それにこの海底レリクスではSEEDが存在しないにも拘らずス

タリティアは今もなお起動している。それに対してウォザーブルグ・レリクスはSEED事変の際には微塵も反応しなかつたが、今回のウォザーブルグ動乱に関しては起動していた。

「レリクスがプログラム管理である以上、トリガーになるものもそれに準じたものになるのよ。それにウォザーブルグ・レリクスはSEED以外のものが原因となつて起動しているわけだし……」

しかしそこでエミリアの説明が止まって表情も元のエミリアに戻る。その表情はまるで赤点のテストを隠そうとする子供のように見えた。

「……あ、え……ええ～と……」
「……やけに詳しいな……」

彼女の話は非常に興味深かつた。私もレリクスに関しては思い当る節があつたが、推論だけの机上の空論どまりだつたのだ。しかし彼女の話は何らかの条件を組み込んだ非常に興味深い話になつている。

「あ、いや……こ、このぐらい常識でしょ？」

「私もレリクスには興味を持っていたからその話を仲間たちにした事はあつたが分かつていなかつたぞ」

昔こいつた話を生き残つた仲間たち（ウォザーブルグ動乱の主役とガーディアンズに居るキャスト、後は逃亡・行方不明・死亡が1人ずつ）にしてみたが、あの2人は曖昧な表情を浮かべて残つた1体は完全にわかつていなかつた。

「だつたらその仲間たちに問題があつたんじゃないの！？ 常識

「……常識だつて……傭兵なら誰だつて知つてて当然なの……！」

あまりに真剣な表情で彼女は私に向かつて声を荒げた。

「いい、今の説明は流して……アンタは結構知つてゐみたいだけど、どうせあたしが言ったところで誰も信じてくれないんだし！」

「！」

「少なくとも私は興味を持つたぞ。後で詳しく話してくれ」

純粹に彼女の解釈に私は興味を持った。何故今もレリクスが起動しているのか、ウォザーブルグ・レリクスは何故SEED事変の時に起動せずに問題が起きた時ばかりに起動していたのか、その謎が解けるかも知れないのだ。

「詳しく述べ……当ても無い推論なんだけど……もしかして、信じてくれるの？」

「私のほうも当ても無い推論だつたからな。推論も2つ同じ結論が出たら確信に変わるかも知れないからな」

「確かにそうだけど……」

次の瞬間には彼女は立ち上がって手にロッドを持って先へ進み始めた。

「何処へ行く、エミリア……！」

「出口探すんでしょう……！　休憩もいいから先に進もう……！」

彼女が先へと進み、私も立ち上がる。先程までと立場が逆転してると苦笑しつつ、彼女の後を追つた。

奥に進むと先程の鮫の様な原生生物が従来の緑色の奴と紫色の奴の2種類が姿を現し、その奥には四足歩行型のスタリティアが鎮座していたりしたので、私たちはそれを排除しながら奥へ進む。

「うえええ……夢に見そつ……なんなのよ、あの気持ち悪いスタリティアは……」

「そうか？ 私としてはヒトがSEEEDフォームになる姿を見せられる方がひどいと思うが……」

アレはトラウマものだった。ヒトの体が変質していつたり爆ぜたりしてSEEEDフォームに変貌していく光景を間近で見た事も在るのだ。

「……流石にそれと比べちゃまずこと思つけどな……」

彼女の言葉も尤もだと思いつつも私たちは足を進める。センサーを飛び越えたり分岐路を右に行ったり無数の原生生物を撃ち貫いたりしているうちに、一際大きな扉の前に出た。

「ずいぶん奥まつたところまで来たけど、まだ出口見つかんないの？」

「それは私が知りたいぐらいだ……」

いつ発作が起るか分からぬせいか、今すぐ外に出たい気持ちが強い。扉には翼や心臓を握った手に足および尾を持つた赤い蛇……いや、頭部が龍に似た形をしていたから龍なのだろう、その形をした刻印が刻まれていた。

「ふむ……」

周りに彫られた文字や絵も興味深い。何かを挙げるヒトの絵を見るからに口は何かを祭る施設だったのだろうか、後で兄に依頼して調査団を結成して調べてもいいとしたよう。

「あ、扉も開くみたい。入ってみよ」

エミリアがそう言つと同時に刻印が鈍く輝き、扉が開く。先に入つて周囲を見渡したエミリアは何かに怯える様な声で私に向かつて言った。

「うわ……ここにあるのって全部、大型の自律機動兵器だよ」

彼女の言つとおり周りは何かを護るかのように彼女の言つ大型の兵器……キャストが居なかつた頃の名残だらう一 手一 足の直立歩行型のスタリティアで囲まれている。そして、その周りに囲まれて在るものを見据えた時、私は心臓が高鳴るのを感じた。

「ん？ あそこにあるのを見てるの……？」

エミリアが私の視線に気付いたのか目線をそむけた向ける。それを見た彼女は怪訝そうな表情をした。

「ううん……他のと比べて黒くて紅い装飾が施されてるみたい。

それがどうかしたの？」

「あ、ああ……あれが気になつてな……」

高鳴る鼓動を抑えながらHIIコアが言つ『紅い装飾が施された黒のスタリティア』を見据える。恐らく自分が求めているものは、あれをどうにかしない限り手に入らないだろう。

「ふーん……ま、この部屋で行き止まりみたいだし別の道に行きましょ。確かにさつきの通路を右に曲がったから左の方に行つてみよ？」

私はHIIコアの言葉に我に返る。もつ既にマッシュピングは済ませてあるから、後は兄の下へ戻るだけだ。

(あわよくばほっこりで回収と行きたかったが……)

どうせまた来る事になるのだから慌てる必要も無いだろう。何せこの所在を知つてるのは私と彼女のみだ。

問題は彼女の言つ『おっさん』と言つ人物に言つて彼女らの組織と争奪戦になる可能性があるかもしれないと言つ事だが、そうなつたら仕方が無い。正直にウォザーブルグ動乱の件を話すか金で解決するかのどちらかだ。

“それ”的見た目は無害そのので『“それ”は危険だ』などと言つ言い訳は通用せず、強硬手段に出るのはこれ以上問題を起こしあくないので論外。それにこぢら側の話を信用してくれなかつたらおしまいだが、金で解決できるならそれに越した事はない。

彼女と行動しているのは緊急事態であるためなので、彼女の属している組織との接点も無いので今後の事についての相談も出来ない。今回は諦めるしかない。

「そう、だな……」

「ギュスター・ヴ……今のアンタ、ウルスラさんに禁酒令が出されて田の前にお酒があるのに飲む事が出来ないおっさんの雰囲気に似てたけど?」「

その例えはどうかと思つが、ある意味的を得ているので反論できない。

「アンタが何を欲しがってるのか知らないけど……ただでさえこっちを見て怖いのに、もし動き出したらって思うと……ねえ、早く戻りつよ」

彼女の言葉に頷きつつ、引き返さうとする。欲に田が眩んでスタリティアを起動させてしまったのでは話にならない。そう考えた矢先のことだった。

「――」

一瞬だけ、最初の広間の時以上の発作が自分の身を襲い

『……我ガ眠リヲ……妨ゲタノハ主ラカ……』
その刹那、黒と紅のスタリティアが起動した。

「ちよ！？　スタリティアが喋つた！？　今までこんな事つて無かつたのに……！　大体、言つた側から動き出さないでよーー！」

エミリアが驚愕の表情を浮かべたが、私は2つの事を考えていた。スタリティアが喋つた原因は“あれ”が原因だと言つ事だと言つ事と、“あれ”入手するためには目の前のスタリティアを倒さなければならぬということだ。

(恐らく戦うしかないか……だがこれで“あれ”を堂々と手に入れることが出来るーー)

動いた事による驚愕よりも、“あれ”を手に入れることが出来るといつ歓喜に支配されながらも私はエミリアに向かつて叫んだ。

「Hミリア…… 脱出できるか！？」

「……だめ…… ロックが掛かつて出られない……」

彼女がそう叫ぶと私もGRM製のAグレードの中でも最高峰のツインハンドガンを取り出し、今にも襲い掛かりそうなスタリティアを目前にして彼女に向かつて言つ。

「戦うしかないな。Hミリア、私の援護を頼む…… 無理に戦わなくともいい」

歓喜に包まれながらも、私はエミリアを庇う事を忘れない。もし“あれ”にかまけて彼女を死なせてしまったら、報告書の解釈次第で彼女の属している組織と全面抗争だ。兄も躊躇い無く私を切り捨てるだらう。

「や、やっぱそうだよね……」

「部屋から出られない、隠れる場所も無い、周りのスタリティアも動かないとは限らない…… 生きて出るには、目の前の敵を何とかしなければならないぞ」

私の目的のためにもな、と心で呴いてからシャドウーグを取り出す。後はGRM製のシールドが一つにとMAW製のセイバー2本が私が持つてきた全装備だ。

『汝ヲ…… 炎魔ノ竜ヲ担ウニ相應シイカ…… 確力メサセテモラオ

ウ』

「……向こいつもやる気満々だし…… うー、うひーつー！」

スタリティアの台詞に対してもエミリアも覚悟を決めたのかロックを取り出し振るい、私の目線の先、…… スタリティアに向けた。

「……わかつたよ、あたしも覚悟決める!! あなたの実力……信じてるからね!!」

「……任せられた。それでは……」

その言葉を合図に私は銃口を頭部に向けて放ち、声を上げて叫んだ。

「戦闘、開始!!」

それを合図にヒミリアも私から遠ざかりフォイエや雷系テクニッカ・ゾンテを放つ。彼女のマドウーグもそれに続いた。

『ホウ……一|手|一分カレタカ……』

私が銃を相手の間接や頭部に向けて放ち続ける。あの手のタイプは頭部が間接を破壊する事で無力化するタイプだ。まずはそこを狙う。

『小癪ナ!!』

だが相手も狙いが分かっているのか手にした武器を振るつて銃弾を防ぐ。しかしこれで

「ほいっと……」

ヒミリアの叫びに呼応してロッドから炎、彼女の側に浮いていたマドウーグから雷がスタリティアの背後に直撃する。

『ナツ!!』

「はあっ！…」

動きが止まつた隙に再び銃撃、シャドウーグの援護も忘れない。敵に遠距離攻撃は無いが武器を振り上げ、じつに向かつて跳んできた。

「くつーー？」

咄嗟に跳んで避けたが、シャドウーグが攻撃に巻き込まれて粉々になつてしまふ。何とか立ち上がって斧状の武器を射抜く。斧は柄が二つに分かれ、刃がついてない方の柄が地面に転がつた。

「やつたーー！これであの斧の攻撃は無くなつたーー」と言つわけで景気付けにもう一発！…

エミリアが喜ぶと再びフォイエを放つて頭部に直撃させる。すると頭部が直撃した影響でぐらつき、地面に転がつた。

「……倒せたの？」

流石のエミリアも怪訝そうだが、私は息を呑んだ。スタリティアが徐々に鱗割れていき、中から炎の渦が吹き溢れて来たのだ！！

『……フン、所詮1万年近クノ骨董品力……ホンノ少シノ攻撃テ首ガ落チルトハナ……』

鱗割れた身体からまず悪魔の様な翼が生え、腕の装甲が砕け散ると一部が紅く染まつた黒竜の腕が現れる。脚も同様で腰部からは黒き尾が姿を現し、頭部があつた場所からは悪魔の角を持つた竜の首が生える。

「己が解放された歓喜の咆哮を上げ、スタリティアの装甲を完全に吹き飛ばす。脚を一步前へと進めて転がった頭部を踏み砕き、炎を伴い姿を現したその姿は正に

「炎魔竜……レッド・モンズ・ドラゴン……」

禍々しさとある種の神々しさを兼ね備えた炎魔竜が姿を現す。私はかつて星屑の竜を報告書で見た事はあったが、それとは別の……否、私にとって星屑の竜以上の美しさを持ち合わせていた。

嗚呼認めよう。私はその存在に心を奪われ魅了された。豊富な資産を全て投げ打つてまで手に入れたいと思ったのは生まれて初めてだった。

「あなたの顔……滅茶苦茶す”いんですけど！？」

エミリアも私の顔を見て引いていた。それを聞き、私は現実に戻つて氣を引き締めた。とは言え、やはり興奮は隠せない。

「炎魔竜の力……貰い受けたー！」

私はそう叫ぶと同時に銃を炎魔竜に向けて放つが、竜が腕を振るうとフォトンの弾丸を消し飛ばしてしまつ。生半可な攻撃では攻撃は通らないという事が。

『次ハ我ノ攻撃ダ！…』

腕に炎を灯す炎魔竜だったが、すかさず鋭い爪と共に腕を私に向けて振り下ろす。

『アブソリュート・パワーフォース！…』

その叫びと共に私はツインハンドガンを爪が触れる直前に交差させて防ぐ。しかしシールドではないとは言え攻撃の余波が私を襲い吹き飛ばす。

「！…」

壁に叩きつけられ、握っていたものを見ると驚愕した。ツインハンドガンの砲身が曲がっていたり装甲が鱗割れていたりしていたのだ。フォトンを溜め込むフォトンリアクターも損傷しジャンクパーツにも使えなくなつたそれを放り捨てた代わりにセイバーを2本取り出す。セイバーは青い2枚刃の刀身を持つM A W製の試作武器『イグザム』の二刀流……言うなれば『イグニス』だ。

「炎は効きそうにないし、今度は氷！…」

背後でHミリアが氷系テクニックの初步・バーダを発動させて竜を襲うが、その竜の炎に阻まれて瞬く間に蒸発してしまつ。

「やはり生半可な攻撃では通用しないか…… その上守備も通用しない……」

「笑いながら言ひつな——！」

Hミリアの叫びに耳を貸さずに私は己の考えに没頭する。彼女のように氷属性で戦うというのも悪くないが、それも強くないと炎によつて溶けてしまつというおまけつきだ。

「だが……」

それでも口元に笑みが浮かぶ。最初からこの程度で倒れるはずがないと確信していたからだ、それを乗り越えずにして炎魔竜の力を得ようなど甘いを通り越して愚かとしか言いようが無いからだ。

相手は1体であり街に押し寄せてきたSEEDの大群の様な数の暴力はない。相手はディ・ラガンと同様の竜型原生生物のような形をしており落下してくるGコロニーの様な人間ではどうしようもない理不尽な存在でもない。

まだ勝機は十分にある。

「それが分かつただけで、十分だ」

イグニスを振るつて炎魔竜に襲い掛かる。まずは左のセイバーで縦に竜の右腕を斬りつけ、続けて右で同じようにして斬る。

止めはセイバーを交差させて突進、右腕を斬りつける。小型の敵には滅多に当たらないが、これだけ巨大な敵ならば当てる場所は好きなだけある。

『ホウ……少シハヤルヨウダナ』

だがこれでも不十分。炎魔竜の身体は硬く、十文字の傷をつけるだけに留まった。これでも今の自分の武器の中でも最強の武器なのが炎魔竜に通用しない事が分かつてしまつた。

シャドウーグやツインハンドガンは壊され、シールドはツインハンドガンの例を見て役をなさない。手持ちの武器では倒す事は出来ないだろ？。

ならば考えられる手は一つ。自分の持つ異能を解放せらるのみだ。

「使うしかない、か……」

私はそう決意すると懐から“ある物”をハンドガンやセイバーの時以上に慣れた手つきで取り出す。“それ”を見た炎魔竜は二タリと笑い攻撃を一時中断した。

「え？ なに？ なんで攻撃を止めてるの……？」

Hミリアは呆然としながらもテクニックを放ち続けたが、2～3発放つた後に攻撃をやめて私の方へ向かつた。

「何をしようって言うの……？」

「Hミリア。私はこれから自分の異能を使わせてもらひつ

Hミリアが首をかしげる中、私は“あるもの”……カードの束から2枚取り出すと、まずは一枚目を振るつ。

「いでよ、ビッグ・ピース・ゴーレム……！」

私の声を合図にカードが輝くと、地面から巨大な手足を持つた岩石兵が姿を現した。そう、これこそが我が一族に伝わる“異能”。カードに纏われた意思や歴史を読み取り、それを具現化させる能力だ。それを使いる力を持つた集団こそが我が一族である。

「え？ ええ！？ でゅ、デュエルモンスターのカードが実体化したあ！？」

ハミリアも呆然とするが、私は続けてもう一枚のカードを振るつ。

「続けてフレア・リゾネーターを召喚する！－！」

そう言つて姿を現したのは先程破壊されたシャドウーグのモチーフとなつた悪魔の背に炎を宿したモンスターだ。そして私は一族が持つ異能の中でも最強の術を発動させる。

「レベル5のビッグ・ピース・ゴーレムにレベル3のフレア・リゾネーターをチューニング！－！」

その声を合図にフレア・リゾネーターが3つの輪に、ビッグ・ピース・ゴーレムが5つの星となる。輪が私を飲み込み星が身体に入り込み、星と自分の意識を同調させた。

「王者の決断、今赤く滾る炎を宿す真紅の刃となる！ 热き波濤
を超え、現れよー！」

同調を高めるため、私は祝詞のように声を紡ぐ。その刹那、炎が
身体を飲み込み自分を新たな姿に作り変える。

「我が身に纏え炎の鬼神、クリムゾン・ブレーダーーー！」

一瞬だけ炎が紅い鎧を纏い双振りの刃を持った騎士の姿が映し出され、私は鎧に纏われ剣は私の腕に握られる。

「な、なに!? 何が起こったって言うのよ!? デュエルモンスターZの実体化に、それを用いた融合! ? 何が何だかわからないわよ! ?」

エミリアが驚愕の声を上げるが、私達の耳にはそれは届かない。

互いの姿しか見えない、互いの声しか届かない。

クリムゾン・フレーダ・チームズ・ドラゴン

紅騎士と炎魔竜。今この場に2つの赤の名を持つ存在が姿を現した。

『ホウ……同調力……ソレガ貴様ノカト言ウワケカ……懐カシイナ……ダガ容赦シナイゾ……』

炎魔竜（彼）は笑うと口に炎を溜め込む。それは正に地獄の業火ヘルフレアを思わせる炎の弾丸だった。

「ああ、これで決着をつけよつか。お前を倒し、その力を貰い受ける! !」

紅騎士（私）もつられて笑うと剣に炎を宿す。炎を宿した剣、何度も炎属性のツインセイバーを振るった事はあつたが、これに勝るものはない無かった。

「……」

エミリアは呆然としながらも既に私の後ろに居る。後は敵の攻撃を防ぎ、相手を切り伏せるのみだ。

『行クゾ……クリムゾン・ヘル・フレア……』

炎魔竜の口から炎が濁流のよつに吹き荒れ、私と背後に居たエミリアを襲う。私は背後に居るエミリアが巻き添えを食らわないよう剣を炎にかざし、それを受け止める。

「ぐぐぐ……」

だが徐々に炎が私の腕を侵食していく。鮮やかだった鎧が赤黒く染まつっていく中で、私は剣に込める力を強くする。

「ここで終わるわけには行かない！－」

そう、私はかつて一族が誇ったチームの最後のメンバーとしてのプライドがある。プライドを無くした傭兵や政治家は、己の生業を淡々とこなす始末屋と政治屋に成り下がる。故に私は一回もプライドを捨てた事は無い。

だからこそ、ここで終わるわけにはいかない。私の名に……私の矜持に賭けて、全てを断ち切るわけには行かない！－ ここで終わつたら、私は彼らの名を汚す事になるからだ！－

故に炎の奔流ごときで屈するわけには行かない…… そう思つた刹那、心臓が強く脈打つ。だがその鼓動は今までのものと違つて自分に力を貸すような鼓動だった。

「はあああつ！－」

その鼓動に乗つて腕を振るつ。剣に纏わりついた炎は縦に両断さ

れ、両側の壁に吊きつけられた。

『……』

「止めて止めだ……！」

私は手にした双剣で炎魔竜を縦に切り裂き、続けざまに剣を交差させて突進する。先程のアーツと同じ構え……だが今回は剣に宿した炎で相手を切り裂く……！

「燃え滾れ、レッドマーダー……！」

私の叫びを合図に交差させた剣を振り、十文字の傷を胴体に斬りつける。それと同時に私の身体に宿っていた紅騎士の鎧と剣も消滅した。

『……見事ダ……』

炎魔竜はただそれだけを言つと十文字の傷跡からあるものが姿を現す。その直後、炎が炎魔竜を飲み込み、それが消えたときには炎魔竜も姿を消していた。

「……え？」

エミリアは呆然とする。恐らく彼女は信じられないものを見る様な眼で目の前のものを見ているのだろう。

無理も無い、彼女を怯えさせた存在の正体らしき物は……一枚のカードなのだから。

『汝、我ガ力ヲ振ルウニ値スル。我ガ力、存分ニ振ルエ』

消えたはずの炎魔竜の声が響き、私は姿を現したカードに近づくと王から剣を受け取る騎士のようにそれを手に取った。

「分かつた。炎魔竜……レッド・デーモンズ・ドラゴンの力、しかと受け取った」

異能者（後書き）

さて、ようやくレモンを手に入れたギュスター・ヴですが本来のプロットではここで「ギュス死亡」ミカ登場となつたわけですが、まだ転生者についてまだ悩んでいます。

そもそも現時点でアンケートに協力してくれたのが一人と言つ有様なのです……と言つわけで延長します。

後なんでレリクスにカードが在るんだよ、と思つた方に言います。

遺跡にカードなんて遊戯王じゃ珍しくないんです。

謎の襲撃者（前書き）

投票者一名でしたが、彼の意見の元小説を書いていたのでもう出来てしましました。

よつてこれからはこの方針で行く事にします。

先程の部屋を出て、分岐路の所に戻った私達。そこを左に曲がったところで私達が見たものは……

「……」

「……階段？」

どう見ても下に向う階段だった。それを見たエミリアが盛大に溜息を吐いた。

「……これ以上奥へ行つたら遭難するわよ。出口も見当たらないみたいだし、そろそろ戻らない？」

エミリアの言葉に私は頷く。望みの品は既に手に入っている以上、ここに居る理由はもう存在しないし、後は調査団の護衛などで再び来る事になるだろう。

「そうだな」

「それじゃ戻りましょ。一応マッピングはしてたんでしょ？」

私は携帯型マップを参考にして戻る事にする。幸い罫とかは既に解除ないし排除していたので行きと比べてスムーズに進行した。

「フーン、アンタの一族つてそう書いつ族なのね……」

その道中、私たちは話しながら進んでいた。エミリアに見せた以上隠す必要は無いため、私は素直に自分の力について話した。

「デュエルモンスターZに描かれたモンスター や 魔法を実体化させる事の出来る一族か……遊戯皇とかでよくある能力だけど、まさか実在してたなんてね……」

「ああ、確かサイコ決闘者だったな?」

遊戯皇とはグラールで大人気のデュエルモンスターZ販促アニメであり、様々なシリーズで放映されている。サイコ決闘者と言うのはその中でもカードを実体化させて自分の手足のように操る事の出来る我々異能者に似た設定の事だ。

「そうそれ。後はカードの精霊云々ね。まあ、眉唾だと思つてたけどそれもあるかもしれないわね……」

「ああ、存在するが? 少なくとも私の一族では何人か見る事が出来たからな」

私の言葉に驚くエミリア。続けて私はあることを話す。

「一応話しておぐが、私の本来の目的はレリクスに存在しているカードの入手もしくは確認だ。あるかないかまでは分からぬからな」

「あー、そうでしたか……今更驚く事じゃ無いですけどねー」

ウォザーブルグ動乱の件については追々話すとして、これだけは言つておきたかった。

「あと我々は異能者であることはなるべく隠していきたい。デュエルモンスターZがこのグラールを生きる人々の支えになっている以上、表に出て脅かすわけには行かないんだ。すまないが……」

「あんた達の事は内緒にして欲しいって事でしょ? 分かってるわよ」

Hミリアの顔には『義理』と並び『付き合ひきれない』と言った感情の方が強かつたが、むしろ後者の反応の方がうれしい位だ。義理感情で巻き込んでしまつたらどうしようもない。

「ま、アンタが普通の武器使つてゐる時点で、内緒にしたかつたつてのもあるんでしょう？」

「すまないな……」

私が礼を言つとHミリアも笑いながら言つ。

「ま、あんたが居なきゃあたしも無事じゃなかつたんだいいわよ。これで貸し借りはなしつて事で」

ここやかに笑つHミリアに私も口元で笑みを浮かべる。そして腹ごしらえをしていた広間に差し掛かったとき、私は眉間に皺を寄せた。

「……！？」

眼前に殺氣が吹き荒れていふのだ。しかも明らかに私だけに向けられているのにHミリアの身体も硬直する程の物だ。

『……コノ感覚……マサカ奴ラカ！？ 気ヲツケロー！』

「奴らだと？ 一体どつこつことだ……？」

炎魔竜の声が響き、私は奥の方に目を向けると同時に1人の男が姿を現す。耳の長さから言ってヒューマンだろう。SEEDフォームでもない以上、警戒する様子は無いと思うのだが……

「ようやく見つけたぜ……ロリショタキャストがいたし地震も起きたからテメエらを探していたんだが迷つてしまつてなあ……あのクソキャスト、懲々残るうとしてたオレの邪魔しやがつてよお……しつかし『原作』と道も違つてるしどうなつてんだよ……？」

美の女神にわがまま言つたのではないかと思わせるほどの整つた顔立ちに紫色の髪、黒い鎧の様なものを纏つた上には赤いコートの様なものを羽織つた青年がそこに居た。だがその眼は今も私を見据え、射殺す様な雰囲気を持つている。

「お前は何者だ？ 何故私をそのような眼で睨む？ 私とお前は初対面のはずだが？」

「ああ初対面だぜ。でもよ、よりもよつてテメエファンタシースターポータブル2系の主人公の座にちやつかり收まつてるんじやねえか。ポータブル1とかユニバースとかだったら百歩譲つて許してやつたけど、よりもよつてポータブル2だろ？ 温厚なオレでも力チンと来ましたよお、テメエがそこに居たんじやオレの目的が果たせないじやねえか」

『ファンタシースターポータブル2系』？ 『ポータブル1』？
『ユニバース』？ 私が居たら彼の目的が果たせなくなる？ 先程言つていた『原作』と言う言葉といい、さっぱり訳が分からぬ。

「で、あたし達になんかよう？ 出口教えてくれるの？」

「教えたいのは山々だがなあ、俺が知つてゐる海底レリクスと道が違つてるんだからこつちが知りてえよ、ツーかここで鉢合わせだし。ミカからテティの花の匂いがしたからそれを追つてきたから良かつたけどよ……」

また知らない単語が出てきた。『ミカ』はヒートの名前だと思われる名称だからいいとしても、『テティ』と言ひ花の名前は聞いた事が無い。私が考え事をしていると、ヒリアが眼を鋭くさせながら声を上げた。

「ミカ？ 誰の事言つてるの？」

ヒリアの疑問も尤もだが、目の前の男はヒリアの答えに対し子供でもわかる様な問題に答えられないモノを見る様な顔つきで呆然としている。何がおかしいのだろうか？

「はあ？ 何を言つてるんだ、自分の事なのに……ああ悪い悪い、今はまだ見えてなかつたんだよな……見えてないものを認めろつて言いすぎたわオレ……」

すると男は勝手に自己完結して答えをばぐらかす。すると彼は話をするのにも飽きたのか私に向かつて声を上げた。

「ああ、ヒリアは俺が責任を持つて連れて帰る。だからテメエは口でのた打ち回つてろ、安心しな殺しはしねえって」

私を物でも見るかのような眼で腕を上げると無数の武器が姿を現す。武器を見ただけでも分かる、あれは強大な武器だという事に……

「わあて、このチート宝具『王の財宝』の力を見せてやるよ……」

男が指を弾く音が響くと同時に武器が弾丸となつて私に襲い掛かってきた。私は手にしたイグニスでそれを捌くが、しばらくするとイグニスの方にも限界が訪れたのか刃を形成しているフォトンが消えうせてしまつ。

「イグニスのリアクターまで…？ よりによってこんなところで！？」

「ヒヤッハア…！ 武器が积迦になつちまつたよつだな…！ オレの宝具はまだまだ弾切れにゃ程遠いぜ…！」

男がそのよつなことを言つて私に向かつて武器の弾丸を投げつけ
て私を壁の方へ吹き飛ばし、ついでに剣が弾丸となつて私の両腕を
縫い付ける。

「ぐつ…！」

「ギュスター・ヴー？」

エミリアがパニックになるが男は私に近づき、左腕に刺さつた剣
で私の傷口を抉つてくる。

「…！」

「はいおしまいと、テメ工殺したらあのスタリティアと同じ田
に遭つちまうからこの辺で勘弁してやるよ。良かつたな、オレが優
しそぎる奴ですよ。」

今もなお傷口を抉るお前が優しいだと、これで優しかつたら『
優しい』と言つ概念自体が疑われるのがオチだ。

「ま、これでオレがこの物語の主人公になるつて訳だ。エミリア
もナギサも女連中はオレが幸せにしてやるから、ここで一生過ごし
てな。運がよければ誰か来るつて、多分な」

もう興味を失つたのか、奴は私に後ろを向ける。私が武器を失つ
たからといって後ろを向くとはなんて愚かな行動を取つたのだろう。
私は即座に右腕のナノトランサーからカードを一枚取り出す。そ

のカードを見た私は小さく声を紡ぐだけにとどめた。

「出る、ダーク・リゾネーター」

そう言つて姿を現したのは私が子供の頃から愛用しているカードであり、私が使用していたシャドウーグのモチーフとなつたモンスターだつた。暇な時には周囲の日が無い時にこのカードを実体化させ、実体化や同調の練習にも付き合わせた程だ。

私が右腕を見てからリゾネーターに目を向けると、即座にリゾネーターは頷いて右腕に刺さつた剣を引き抜こうと躍起になつて汗を出しながら行動した。

剣が抜け落ちて右腕が自由になると、即座に右腕で左腕に刺さつた剣を引き抜く。抉られた痛みからか激痛が走るが音が響いたのか男はこちらを見て驚いていた。

「テメエ！！ どうやつて剣を抜いたんだ！？」

「勝手に抜け落ちたんだろう？ 私のせいにするな！！」

リゾネーターは剣に押しつぶされていたが抜けた時点で消しているため、姿は見えていないだろう。私は抜いた剣を握り締め、男に襲い掛かつた。

「おい！！ 勝手に人の宝具を使つてんじゃねえぞ卑怯者！！！」

「だつたら人を突き刺す道具にしなければいいだけだろ？ 私のせいにするな！！」

片手で持てる細剣の様な剣だつたのが幸いしたが、もしこれが両手剣だつたらまずかつた。今私の左腕は傷口を抉られていてまともに動かしたり握つたりできる状態ではない。

「くそつ！！ なんだつて言つんだよ！？ エミリアには一コポもナデポも通用しねえし、なのはやネギまゼロ魔は転生できないつ

て言われて、しゃあねえから口にきたら既に主人公の座は埋まってるし！！「口で負けたら転生した意味なんかねえじゃねえか！」

喚きながら剣や槍の弾丸を放つ男。しかしエミリアが横からフォイエを男に放つと、それを避けられずバランスを崩す。

「なつ……テメ……なんでオレを攻撃したんだよ……！？」

「いきなりあたしを口説こうとしたアンタより、ギュスター・ヴの方が信用できただけよ！…そもそもあんな状況でにこやかに笑つてくる奴なんか信用できるか！！」

エミリアが作ったチャンスを無駄にはしない。私はすかさず男に接近し、突き刺そうとした。

「甘いんだよ…！」

だが男は両手剣を取り出すと私に向かつて振り下ろすが私はそれを横に避ける。そうなれば後は互いに細剣を振るうだけの間合いだつた。

「はつ…！ たあつ…！」

私は一族の中でも本家に近い出身だったため、嗜みとしてのフヨンシングに心得はある。異能がメインであるため基礎しかやらなかつたため、あれほどの武器を雨のように放った人間には叶わないだろ？とも思つていた。

「くつ…！ くそつ…！」

だが蓋を開けてみれば男は力もあって動く速度も速いが、細剣を持つ構えや残心が素人のそれに近い。まるで強い武器があれば達人に勝てると思っている節もあつたし、気のせいいかこちらを見下しているという雰囲氣にも思える。私は相手の剣先をいなし、起動を逸らして

「これで止めだ！！」

更に一步踏み込んで剣先で心臓を貫く。男が仰向けになつて倒れる、私は男が手にしていた剣と男が撒き散らした武器の山を拾つてナノトランサーに収納する。当然自分が使つていた細剣も収容しそうとしたが既に許容量を超えてしまつたので溜息をついた。

「い、いいの？」

追いはぎもしくは火事場泥棒同然の私の行動にエミリアが責める様な声で言い出す。とは言え最近はフォトンの量も減少傾向だし、従来のフォトンを溜め込むカートリッジの製造が禁じられたため、このような実剣の需要は高まっているのだ。闇市で売つてもよし、自分で使つてもよし、多くて困る事は今の様な歪曲空間に収容できる限界量だけだ。

「資源枯渇の影響で、武器とかも無駄遣いできないんだ。イグニスが壊されたのは痛かつたぞ」

炎魔竜との攻防で破壊されたツインハンドガンやシャドウーグは必要経費だと割り切るが、目の前の男に破壊されたイグニスは予想外の出費になる。幸いデータは無事だから後でMAW社に提出しておこう。

「や、やつらの……？ まさかSEEDの事変とかでもやってたんじゃ……」

「やつてたが？」

そもそも死人に金銭や武具は必要あるまい。それが大金や強い武器なら尚更だ。事後処理などで提出するものはともかく、それ以外のものは物々交換で交渉する道具にもなる。

「……本当にアンタつて傭兵なんだね……」

「生きていくためだからな……」

私たちはスponサーが居たからまだマシだったが……と心の中で呟く。ここに居ても意味は無いので脱出させでもらおう。だがそう思った矢先の事、私は信じられないものを見た。エミリアも私の雰囲気に気付いたのか、私が見ている方を見ると同じ様な表情を浮かべる。

「え……つそ？」

彼女の言葉も頷ける、何せあの男が立ち上がりしているのだから。私はあの時確かに心臓を貫いたのだから生きているはずは無い。だが目の前の男は怒りを露にした表情でこちらを見据えていた。

「あークソツッ！！ テメエ、オレの宝具何勝手にかっぽらつてんだよ！！」

「何故だ!? SEEDフォームですら致命傷を負わせたら消滅した！！ なのに何故お前は生きているんだ！？」

男の怒りも聞こえず私は狼狽していた。当然だ、心臓を貫かれて生きている生命体は存在しないし、キャストですら中枢部を射抜か

れたらそこでおしまいだ。なのに田の前の男は生きている、どうしたことだ！？

「バツカジヤねえの！？ 誰がなんこと教えるか！！ オレから主人公の座だけじゃなく宝具まで奪おうたあい一度胸してんじやねえか！！ オレを本気にさせたこと、後悔するんだな！！」

そう言つて男は再び武器の弾丸を放つ。私はエミリアを投げ飛ばしたもの、今度は腕を縫い付けるだけに留まらず武器の弾丸は私を飲み込んだ。

「――」

不意に地面に倒れこむ。左腕と両足の感覚が無い。視界が紅く染まる。上手く呼吸が出来ない。誰が何を言つてているのか聞こえない。

（私は……死ぬのか……）

意識が朦朧とする中、私はそんな事を思つていた。せっかく炎魔竜のカードを手に入れたというのに、ここから出る事も叶わず終わりを迎える事になるのか？ 一度も炎魔竜の使わずに私はここで朽ちる事になるのか？

（ふざ、けるな……）

そう思つた瞬間、心臓が激しく脈打つ。自然と私の腕は何枚かのカードを探り当てていた。幸い奴は私に興味を失ったのか、エミリアの方に近づきなにやら話し込んでいるが、当の彼女は怯えたままだ。

奴の目線が私から離れている以上、好機は今しかない。

(……バイス・ドラゴンを特殊召喚し……ダーク・リゾネーター
を召喚する……)

私は探し当てたカードに描かれた魔物を召喚し、千切れかけた右腕を高く掲げる。

（レベル5のバイス・ドラゴンにレベル3・ダーク・リゾネーターをチューニング……）

それは先程私が紅騎士を宿すのに用いた異能の中でも最強の術でもある同調。だが今から召喚するのはそれではない。その証拠にあの時は緑色の星と輪だったものが、今回は赤い火の玉と火の輪となつていて。火の気配を感じ取ったのか男が驚いた表情でこちらを見据えるがもう遅い。

『王者ノ鼓動、今ココニ列ヲ成ス……天地鳴動ノ力ヲ見ルガイイ

』

私以外の存在の声が唯一感じ取る事が出来る魂に響く。恐らく炎魔竜のものだらう声と同時に炎の玉と輪が私の身体を飲み込む。

『我、今ココニ復活セリ！－ 炎魔竜レッド・デーモンズ・ドラゴン－』

炎が吹き荒れると同時に私の身体も変質していく。肉体が炎魔竜

の身体となり、爪も鋭く伸びる。米神から角が生え、背中から悪魔の様な翼も生える。エミリアの驚愕する顔と男の癪癩を起こした顔が見える。特に男はありえないものを見ているかのような表情となつている。

「な、何で250円竜が、遊戯王のカードがファンタシースターの世界にあるんだよ！？ しかもなんで融合してんだよ！？ あれか！？ 遊戯王じゃよくある事だつて言いたいのか！？ だつたら融合なんかしねえでハーレム要員のドラマジガールや靈使いをだしやいいじゃねえか！！」

人間サイズに縮小された炎魔竜と化した『私』はかつて炎魔竜が行つた様な腕に力を込める動作をする。男の背後から武器が再び姿を現す。

だが遅い。

『アブソリュート・パワーフォース！』

武器が出される前に私は腕を振るい、男を掴み上げる。そして男を放り投げて柱に叩きつけると、歪曲していた空間も消滅して武器は地面に落ちる。

(エミリアは……ああ、無事か。それに眠くなってきた……兄上には悪いが私はここまでか……それでも、あいつのせいで死ぬよりかは、いい結末だな……)

自分の近くで驚愕の表情を浮かべるエミリアを見据え、彼女の無事を確認したところで安堵した時、私の中の“ナニカ”が切れ

あたしは先程の戦いを呆然と見据えていた。自分を庇つたギュスター・ヴに致命傷を与えた男が、何事も無かつたかのように笑顔を浮かべながら自分の頭をなでようとした時、ギュスター・ヴの身体が炎に包まれると以前戦つた炎魔竜の姿となつて男を襲う。

男は武器の弾丸を放とうとしたがそれよりも早くギュスター・ヴ……いや、炎魔竜が男の顔を掴み上げ柱に向けて投げつける。それで戦いは終わり。ギュスター・ヴは元の姿に戻つて地面に倒れこんだ。両足は無く、左腕は肩から千切れている。右腕も倒れた衝撃で肘から先が完全に千切れ、身体から離れている。

貴族の様な服も黒地に赤いのか赤地が黒いのか分からぬくらい変色しており、金髪も紅く染まつたりしている。明らかにギュスター・ヴは息絶えていた。

「ねえ、起きて……起きてつてば……」

声をかけているが身動きも言葉も出さず、声が虚しく響くだけ。いや、後ろの方で誰かが立つた様な音がした。

「なんで……？ 何で皆あたしをおいてっちゃうの……？ あたしを一人にしないでよ……」

しかしそんな事よりギュスター・ヴの惨状のせいであたしは涙で滲んで目の前が見えない。後ろから無数の武器の弾丸が迫る音が響く。

「誰か…… 誰でもいいから……」

武器の弾丸があたし達を飲み込まんとした時

「助けてよおおおーーー！」

そしてあたしは目の前が真っ暗になった。

太陽の様な黄金の輝きが武器を包み、構成を分解していく。発生源となつたエミリアから幾何学模様のような癌が浮かび上がり、背には太陽の様な光輪が姿を現す。

その光輪から放たれた光は周囲を飲み込み、自分達の周囲にいた存在を消滅させる。そしてエミリアは……否、エミリアの姿をした『ナニカ』は彼女の口を借りて囁いた。

『あなたを……死なせはしません……！』

その言葉と同時に“彼女”は腕をかざし、ギュスター・ヴを黄金の光に包ませた

「……クソッ！ どうなつてやがる……」

俺は脇腹を手で押さえながら通路に座り込んでいた。俺の傍らには緊急チームのメンバーになつたバスケットとか言ひキャストの治療を受けながら吠える。

『この治療が終わり次第、俺は奴の後を追う。アイツは危険だからな』

バスケットも無事じやすまねえ状態だがな。とは言え奴の狙いはあるバカ……いや、家の会社の乗つ取りだつて事は知つてゐる。本音を言つてしまえば今こつしていゝ時間も惜しいぐらいだ。

『……すまない、一刻も早く追いたいのはお前の方だつたな』

「んな面すんじやねえよ……」

奴のせいで俺の過去を知つちまつたバスケットがすまなさそつに顔を逸らして言つと、溜息を吐くしかなかつた。

事の始まりは俺が……いや、タダ飯喰らいのバカを含めた俺たち

が海底レリクスの調査の依頼を受けてランク別の依頼を調達しに依頼者の元へ向かつて いた時からだ。

俺は奥深くにある“レリクスの遺物”的回収、あのバカには初心者にも出来るレリクスの生態系の調査を受けさせようとした時に地震が起こった。意外と大きく、俺も思わずバランスを崩しちまったもんだ。

昨日の酒が残つてたのかと考えていたんだが、今はそんなことはどうでもいい。今は依頼の調達が優先だ……そう思った矢先、後ろの方からドタバタと走る音が響いて振り向いたら逃げるヒトの群れがあつた。俺を押しのけて一斉に喋りだすから五月蠅いの何の。

で、要約すると地震があつてレリクスが起動、扉が閉まりそうになつたから一斉に走り出した……と言つわけだそうだ。その結果、何人かがキャンセルだなんだとかで騒ぎ出してココから離れちまた。

そん時は『ギヤラが増えるゼラッキー』程度だったが、傭兵の数が少くなるに連れて俺はあのバカがないことに気付いた。近くにいたキャストの男……バスケットにあのバカの特徴を話した上で聞くと、そいつもパニクつたような声を上げた。

更に聞いてみれば取り残されたのはあのバカだけじゃないって事だ。依頼者にその事を話すと、急遽救助チームが組まれる事になった。つつても残つてるのはバスケットもう1人……ヒトを見下した様な面をする紫色の髪に古臭いゲームに出てくる様な黒い鎧と赤いマントを着たブチギレそうな野郎とチームを組む事になつた。

どうやらあのバカどもは何故か奥に進みやがつたみたいで、俺ら

も奥へ向かつて行つた。奥に行つても奥に行つても追いつく気配がまるで無い。

「あのバカ、何処ほつき歩いてやがる…… 勝手にウロチョロしゃがつて！！」

俺はそう叫ぶと同時に死骸を蹴りつける。スタリティアの残骸や原生生物の死骸、罠が破壊された跡を頼りに行動しても追いつきやしねえ。

『だが2人の実力は高いようだな。ここまで奥に進めるとは並大抵の傭兵では出来ない事だ』

俺は……何故か隣にいた奴もバスクの言葉を聞くと笑つちました。何せあのバカは碌に働きやしねえロクデナシだ、となるとこの惨状を作つたのはもう一方の方になる。

『そつか……では奥に進むとしよう。ハハド休んでいる暇は無い……』

バスクがそう言つと奥に進む。ああ、その矢先だったんだよ。

「あーもう！……ほんとに使えねえのんだくれのおっさんに口リショタキヤストだなあ！！だからオレの事放つておけつて言つたのによ……」

指を弾くと同時に俺とバスクは奴に攻撃されちまつたつて訳だ。そいつはナノトランサーを複数使ってんのかつて叫びたくなるほど武器の雨を降らせやがつた。

しかもアイツは俺の思い出したくもねえ過去を知つていやがつた。

その事を話しながら奴は俺に攻撃しやがったし、Hミリアたちを自分の物にするつてほざきやがったから、ナノブلا스트を暴走させてまでして奴と戦つたが、あいつは武器をとつかえひつかえしまくるわ、頭を碎いてもすぐに復活するわでキリがねえ。最後にや俺らをぶつた切つてから奥の方へ逃げやがつたつてわけだ。

「うつつひもよ……奴は何者なんだ？」

俺はそんな事を言いながら立ち上がる。傷は痛むがそんな事なんざどうでもいい。それ以上に俺はいやな事を思い出させやがつた奴が気に入らなかつた。

『その事を誰かに話したことは?』

「あるわきやねえだろ!! ウルスラとチヨルシーにしか言つてねえし、言ふらす様な奴じゃねえ!!」

声を荒げる。一刻も早く追わなきやならねえつて言つのに、アイツが最後に使いやがつた黄色の槍のせいで傷が治りやしねえ。

「行くぜ……」

一步ずつ足を進めていく。傷口が疼き、回復薬を飲みながら前に

進む。そんなことの繰り返しだった。別の広間で蹲つて最後の薬を飲んだ時、俺は目を瞬かせた。

「……は？」

全くもって信じられなかつた。傷口が徐々にふさがり、痛みが引いてきたのだ。しかも手足の感覚も元に戻つてゐる。

『どうした？』

「……傷が治つてやがる……どうなつてんだ？」

俺自身何が起きたかなんてどうでもいい。今は一刻も早く追うだけだ。即座に走るがあのバカたちの行動が幸いして障害は何もなかつた。俺らが別の広間にたどり着くと、そこにはぶつ倒れているあのバカ……エミリアとその近くで倒れている金髪の男、そして

『どうなつているんだ？ 何故奴が倒れている？』

俺らを口ケにしやがつた野郎が白目を剥いてぶつ倒れていやがつた。何が起きたのかわからやしねえがざまあみやがれつて言うのが本音だ。一発殴つてやりたかったが、こうなりや後は知つたことじやねえ。奴が起きあがらねえ内に俺はエミリアを、バスクは金髪の男を抱いで逃げ出した。

謎の襲撃者（後書き）

本文のようにこれから敵としてチート転生者が跳梁跋扈します。後転生者さんがブツちゃけてくれたせいでクラウチの過去をバスケット先生が知ってしまいます。

前回登場できなかつたミカさんを登場させました。次はよひやくリトルウイングにご招待です。

リトルウイングへ（前書き）

リトルウイングに「招待」なお話です。
後主人公の過去らしきものも載せておきました。

よつこセリトルウイングへ

懐かしい光景を見ていた……

それはまだＳＥＥＤ事変が起ころる前日の事……

「ガーディアンズだと？　お前がか？」

私を含めた3人と1体が食事をしている中、私は青色がかつたボディを持つキャストに向かつて声を上げた。その一方では黒髪と白髪、2人のヒューマンが一族の異能に必要不可欠な知る人ぞ知るライドゲームを行つていたが。

『ああ。ま、家つて結構協会の上層部と関係深いつて話じやん？　で、協会とガーディアンズとの技術交換がてら俺と姉御が行くつてさ』

目の前のキャストがキャスト用の栄養ドリンクを飲みながら声を上げる。

「カードを1枚伏せてターンエンド……つと。姉御つて……あの人が……エンドフェイズ時にリビングデッドの呼び声！？　しかも対象はメカニカル・ハウンド！？」

黒髪のあどけない表情の青年が小さく苦笑いして相手の一手に驚愕する中、残つた白髪の青年が声を上げた。

「カードを1枚セット、ハンドレス状態のメカニカル・ハウンドでロード・ランナーに攻撃……レオン、テメエ大丈夫なのか？　組

織に入るつて事は命令に従えつて事だぜ？今までの様な自由行動は出来ねえぞ……ガード・ブロックか……しきじつたな……』

『テメエに比べりや俺はまだマシな方だつての！！当主には反抗的、協会のお偉いさんとも折り合いが悪い、周囲とも溶け込もうとしない三拍子揃つた誰かさんに比べたらよー！』

私も彼が放つた白髪のヒューマンに対する酷評に納得がいったので浅く頷いた。確かに彼の行動は目にするからだ。それを見たのかレオンと呼ばれたキャストは身体を乗り出して声を上げる。

『だろお？ ギュスは話分かるじゃん！！』

「僕のターーん、ドローーーんさん、ギュスターーヴさん、飛鳥だつて悪気があつたわけじゃないし……カードを一枚伏せてターーンエンドつと」

「カール、レオンとアスカの問題だし言い出したのはアスカの方だぞ」

カールと呼ばれた黒髪の青年を嗜める私だが、ある事を思い出してレオンと呼ばれたキャストに向かつて声を上げた。

「とは言えお前、キャストなのに計算苦手だつたではないか。アスカの台詞ではないが大丈夫か？」

『あー。まあ、人には向き不向きがあるつて事で』

レオンが顔をそらすとカールが突然頭を抱えて頸垂れる、どうやらアスカに軍配が上がつたようだ。そんな時、別の方から声がした。

「あ、ココにいたんだ。皆」

その声を聞いた途端、私とカールは姿勢を正すがアスカとレオンは正そともしなかつた。

「飛鳥！？ レオンさん！？」

カールがそんな2人を嗜める一方で奥から3人の人間が姿を現した。淡い紫色の髪を靡かせる女性ビーストに、ポケットに手を突っ込んでこちらへ向かう男性ヒューマン、そして茶色の長髪を靡かせた柔軟な笑みを持ったヒューマンが姿を現した。

「今更だよカール。ボクは気にしてないし、じつじつ反応見せてくれるヒトが欲しかったからさ」

『ですがボス！！ 話分かつてゐるーー』

「確かにそうですね。レオっちやアーチャンはそれが持ち味ですから」

レオンヒューマンの男がそう言つて、女性ビーストが声を上げた。

「少なくともレオンは少し氣を引き締めないとダメだらう。あとしつレオンはガーディアンズに行くんだからね」

そう言つて目つきを鋭くさせた彼女に対して『ボス』と呼ばれた男は優しく言つ。

「ま、そうだね。君の言いたい事もわかるよ!! サキ

彼がいつ言つてもサキが顔を赤らめる中、私は皆を代表して声を上げる。

「それで用件はなんでしょうか？」

「あ、そうそう。一週間後に同盟締結100周年記念式典が行われるから口ロニーに行く支度してね。仕事とかは開けておくよ」

「ああ、お偉いさんとのパーティーか。俺はいつもどおりバスするぜ、そんなもんに出てる暇なんかねえよ」

アスカがそう言つ中、ニューマンの男が眠たげに声を上げた。

「ダメですよアーチャン。今回は全員強制召集されてるんです」

「そそ、ゾディアの言つとおりや。あの子もその話聞いてす」「く張り切つてるんだからさ、君が彼女のために遊ぶ時間も眠る時間も惜しんでる事は知ってるけど……」

「イツ先程までカールとカードゲームで遊んでました、レオンはそう言いたげだつたが私の視線を受けて口を閉ざした。基本的に飛鳥がデュエルモンスターZを行つのは誰かに挑まれた時のみなのだ。

「ま、パーティーは美味しいものがたくさんだ！！ 日頃のタチの悪い異能者狩りも今日はお休み！！ それじゃ既、口ロニーに行く準備ヨロシク！！」

それでこの場の会話は終わり、私たちは各自口ロニーへ向かう準備を始めた……

懐かしい記憶も徐々に色あせ、暗闇に慣れた私の目にとって眩い光が差し込んでくる。

「ぐ……む……」

私は思わず右腕で目元を押さえ、上半身を起こそうとする……だがそこで一つ疑問点が起き上がってきた。私の服はM A W社製のスース・『エスフレンドスカラー』だつたはずだ。それが質素なインナースーツになつていて。

とは言え上半身を起こした時に見た両足と左腕の存在によつて全て吹き飛んでしまつたが。あの時私は明らかにその3つの感覚を失つていたはず。特に左腕にいたつては千切れ飛ぶ光景が目に映つていたのだ。

思わず右腕に目を向けるが武器で射抜かれた傷も存在しない。ただただ倦怠感だけが体に残つてゐるだけだ。これは一体……

『オウ、気がついたネー！』

耳に響く甲高い合成音。キャストのものだろうが、ニュアンスから女性のものであることが分かる。

『始めるまシテお客サン。ワタシ、チヨルシー。ヨロシクネ』

「…………」

周囲を見回すとそこは医務室が何かなのかベッドが周りにいくつか存在し、私は声の主であるチヨルシーと名乗ったキャストの方を見据える。

黄緑色の髪をした水商売系の服を模したパーティを着込んでいたが、

私の視線に気付いたのかわざとらしく両腕で胸元を隠して身体を捻りながら声を上げた。

『お客サン……見てもいいケド、がつついテ見るのは感心しないヨー?』

「……すまない……ところでココは何処なんだ?」

私の声に対しても彼女は優しく説明するかのように声を上げた。

『リラックスしててイイノヨ~、ココはボッタクリの店じゃないからネ~』

そう言つ意味で聞いたのではないのだが……

『お客サンがレリクスで着てた服、ボロボロだつたカラ脱がせちやつたノヨ。見かけによらずいい身体つきだつたカラお姉さんビックリヨ~』

「少し待つてくれ……服がボロボロだつただけか? 腕とか千切れていなかつたのか?」

左腕と両足が千切れ飛んだと言つのに、服だけがボロボロになつたのかと言う疑問に対して彼女はやんわりと答えるのみ。

『五体満足大丈夫だつたネ。一応CUBIC STAR製の最新ジャケットを用意したケドサイズは大丈夫? コレはお姉さんからの特別サービスヨ、気にしないで受け取つてネ』

ホラそこと指を指された先には青みがかつたジャケットが置まつてあつた。インナーで歩き回る趣味はないし私はそれを手にしてカーテンで彼女の視界を遮つてからズボンを履き、シャツとジャケツ

トに袖を通す。

着替え終わつてからカーテンを開けると、チャエルシーは商売用のスマイルらしきものを浮かべて声を上げた。

『似合つてゐわよお密サン、ワタシ少しクラクラ～つときたヨー。それじゃシャツチョサンガ呼んでるネ。歩ケルカシラ?』

ベッドから足を下ろして腰を上げるが、まだ新たに生えただろう両足に慣れていなかつたのか思わず膝を震わせてしまい、思わず尻餅をついてしまう。

『ホントに大丈夫?』コックリでイイノヨ、お姉さんが教えてア・ゲ・ル』

「……そこまで……心配してもらひ必要は……無い……」

男として歩くくらいで甘えるわけには行かないでの、無理矢理にでも腰を上げる。そして生まれたての小鹿の様な足取りで私は医務室から出て行った。

何度も転びかけてチャエルシーに心配されながらようやくオフィスらしき扉にたどり着くと、1人の男性の声が聞こえた。

「おう、俺だ俺。今すぐ俺んトコまで来い……ああ? イヤだあ

? 甘えてんじやねえぞ！――

どうやら彼の通信相手は機嫌が悪いのか来たがらないようだ。その様子にチエルシーは苦笑いし、私は少し溜息をつく。

近づくにつれて酒の臭いが漂つてくる。酒場にはよく出向いていたがこの臭いにはいまだに慣れないなと心の中で愚痴る。更に水着の女性がモニターに映し出されており、仕事をしていたのかとさえ感じられるほどだ。

「……つと、来たか。その顔だと口が何処だか分かつてゐるようだな？」

髪と髭で顔の大半を隠したビーストが声を上げると私は頷く。チエルシーからある程度の説明……MAW社のライバル会社の一つである『スカイクラッド社』が持つリゾート型ロロニー『クラッド6』……私はあの海底レリクスからココまで運ばれてきたと言つのだ。まさかライバル会社の人間に命を救われる事になるとは……私は溜息を吐くしかなかつた。

「んなしけた顔してんじやねえ。テメエの素性は聞いてるよギュスター・ヴ、MAW社代表取締役グラディウス＝ワインストンの弟さんだろ？」

『Hエ～！？ 家のノウハウを盗むタメニやつてきたスパイだつて言つノ～～～！？ 大胆な手で潜入するなんて信じられナ～イ』

彼の言葉に私は息を呑む。一方でチエルシーは驚いた表情で的外れな言葉を出すがそれを彼が制した。

「……お前は知ってるはずだろ。MAW社トップの弟の看護を頼むつてウルスラからも言われたわけだしな」

『お約束ネシャツチヨサン』

「……ああそつかい」

2人の漫才に思わず咳を出して話を促す。態々コレを見せるために連れて来られたのならばここにいる意味は無い。

「クレームが来ちまつたな。俺はクラウチ＝ミュラー、軍事会社『リトルウイング』を取り仕切つてるモンだ」

「リトルウイング……来るもの拒まず経歴問わずで有名な傭兵集団……ですか」

異能者の集団といえども表の情報はある程度仕入れている。以前行方不明になつた仲間の情報を求め、こいついた集団まで調べた事があつたのだが結果は不発に終わった出来事を思い出していた。クラウチはそんな私の考えなどどうでもいいかのように言葉を紡ぐ。

「無理して敬語使わなくともいいぜ。それとお前さんの知つてゐるリトルウイングで間違いねえぜ。ま、軍事会社といつても肩書きだけでな……やってる事はそこらの便利屋と対して変わらねえよ。要人警護に廃棄プラントの調査とかショボいもんばっかりさ」

基本的に大規模な軍事会社や同盟軍、そしてガーディアンズ等と言つた有名所に大規模な仕事を持つて行かれてしまつてゐるのが現状だ。それにGコロニーが落下してから、私とウォザーブルグ動乱で行方不明になつた2人で自警団の様なものを結成してゐた時期もあつたから、それを大きくした様なものかと自己完結してゐた。

「で、この前あつた海底レリクスの調査にも偶々参加してたつて訳だ……」

そこでクラウチの表情が見る見るうちに不機嫌そうになつていき、
チャエルシーは慌てて声を上げる。

『テモ、そこでトラブルがあつたのよねー突然地震が起つてレ
リクスの中に閉じ込められたうつかりサンがいたの兀。『テ、任務
もうつかりサン救出作戦に変更つて訳ネ』

「ああ、そのレリクス内に閉じ込められたバカなうつかりさんが
お前さんつて訳だ……」

やはり不機嫌そうな表情を隠さない中、彼が声を上げて瓶を手に
して一気に中の液体を飲み込んだ。

「とは言え地震のせいで逃げやがつた連中が出るわ、その上急遽
組まれたチームの中にクソ野郎が一匹混じつていやがつたわ、その
クソ野郎のせいで俺ともう1人が大怪我までしたわで大変な苦労を
したんだがなあ……拳句の果てによつやく帰つて来たらスポンサー
までトンズラと來たモンだ！！」

酒瓶を叩きつけ砕け散つた破片が宙を舞う中で怒鳴るクラウチ。
どうやら実入り無しの状態で自分を救助してくれたわけだ。

『無理しちゃダメよシャツチョさん。またボスに怒られるわ兀…

…』

優しくクラウチを嗜めるチャエルシーだったが、私は嫌な予感しか
しなかつた。

「……さて、話を戻すが……お前、俺たちが『お金なんて要らない、君たちの笑顔があればそれで満足さ』とか言う正義の味方に見
えるか？」

「いや全く見えないが……」

私は見た感じ正直に言つが、クラウチは若干顔を引きつらせた顔を近づける。正直言つが子供が泣きそつなくらいに迫力があつてやはり酒臭い。

「いい度胸してんじゃねえか、正直な感想をありがとよ……予想通り俺らは常日頃から金がいる傭兵集団だ。スポンサーがいなくなつちまつた以上、誰が俺らに報酬払えばいいのかねえ……？」

クラウチの目は私を見据えている以上、矛先は私しかあるまい。まあ、私が集めた武器を売り払えればいいか……

「口口までの運搬代金に目覚めるまでの護衛代金……しかもチルシーの看護まで含めるとなると100万メセタ……おつと忘れてた、俺らの治療費や奴らが俺ら以外の傭兵の報酬にスポンサーがトンズラした違約金を含めて500億メセタになつちまつた……おお怖い怖い」

その報酬と言つには天文学的な値段に私は眩暈を覚えた。武器を売つてどうにかなる金額でもないからだ。ウォザーブルグ動乱以来、不要なカードや調度品をいくらか売つて漸く一族が慎ましく暮らせる様になつたのだ。もしココで私が断つたらどうなる事か……

「ま、俺らも鬼じやない。こんなバカ高い金をお前が払えない事は分かつてる……だからコイツをM A W社に請求するぞ」

「ま、待ってくれ!!　流石にそれは不味い!!」

思わず身を乗り出して大声を上げるが、周りにいた面々はただ笑うだけで誰もクラウチを窘めようとはしない。確かに自分は金で解

決できれば御の字だといつ考えを持つが、それでも限度がある！！
明らかにM A W社は……自分たちが運営している異能者集団は経
営難に陥ってしまう…

「ほひ……じゃどうあるんだ？　お前さんが家で働いて借金払つ
つて言うのか？」

『田舎のお兄さんも苦労するわコ～、ココは素直に頷いた方が身
の為ネ～』

以前カールがテレビで見ていた、古代ニユーデイズをモチーフに
した時代劇に出てくる悪代官よろしくの表情を浮かべるクラウチと、
彼に寄りかかって負けず劣らずのあくどい表情を浮かべるチエルシ
ー。その顔を見て怒りを覚えたが答えは一つしかない

「……そうするしか、ないだろ……クラウチ……」
「よつしゃ決まりだな！！　言質取つたぜ～！」

諦め半分捨て鉢半分で声を振り絞つて答えるとクラウチはあくど
い雰囲気を消し去つて拍手を打つ。それを合図に他の面々も笑うの
を止めて元の位置に戻つて行つた。

「実はお前の兄貴との交渉は既に済ませてんだ、流石に俺たちも
M A W社と全面戦争する気はねえよ。報酬の方はM A W社がスポン
サーになつたつて事で貰つてある。元スポンサー様にはキチンとお
礼参りするつもりだがそれは俺の仕事じゃねえ……後、コレを渡し
てくれつて頼まれてんだ」

その言葉に私は思わず脱力するが、兄の書状を受け取りそれを見
据える。それにはこう書いてあった。

「……しばらくお前に仕事を言い渡せないからリトルワインディングで世話になるよ。」一応クラウチ氏には仲介屋を通して仕事を依頼するので、仲介屋経由だつたらMAW社からの依頼だと思つてくれ。

グラディウス＝ウインストンくく

恐らく異能を悪用する連中や以前属していた“協会”が残した不始末の処理で忙しくなるのだろう。そこで私を救助したリトルワインディングに白羽の矢が立つた……そう思う事にして自分自身を納得させた。

「ま、本当は入社試験があるんだが、そこはMAW社から推薦状代わりにお前の経歴を見させてもらつたぜ。Gコロニー落下事件までMAW社の私兵集団に所属、その事件でリーダーが死んでから残つた仲間と一緒に自警団を結成……戦闘要員僅か3名の超少数精銳でチーム名ともなつた『二騎士』^{トライロッタ}とか言う経歴があるんだ……テメエら一応グラールの一部じや都市伝説みたいな事んなつてんだぜ？」

一応試験はあるのか……そう思つた矢先、クラウチが言葉を進めた。

「当然試験なんぞ必要ねえ即戦力だ、更に今ならいいよりマシ程度の自分色に染められるパートナーつき……いい条件だろ？」

彼がそう言つた矢先、扉が開く音がする。開いた扉から入つてきたのは、あの海底レリクスで行動した少女・エミリアだつた。

「……あのさ、おっさん。今日ぐらーカンベンしてよ……あたしがどういう状況だつたか知つてるでしょ？」

そんな彼女もやる氣も無い仕草でこちらに向かつてくる。表情は

暗い田の下には隠が出来ていた。

「知らねえし興味もねえからカンベンしねえよ。んな事よりお前、客の前でそんなシラするんじゃねえ」

クラウチの声に対してエミリアは私の方を向く。最初こそ始めてと言つた彼女だったが、しばらくして私の顔に見覚えがあつたのか驚愕の表情を浮かべ

「え……ええ！？　えええええ！？」

正に幽霊でも見たかの様な声を張り上げた。まあ、私自身も驚いているわけだが……

「い……生れ……てる……？　……なんで、生きつ……生きてるの！？　何で？　どうこう事！？　ギュスター、おっさん！？」

「私にも分からん」

「勝手に人を殺してんじやねえよ……お前、ホント適当な事しか言わねえな。お前、へマしたらとんでもねえ事んなってたぞ」

私達からの攻撃に思わず沈むエミリアだったが、彼女はとんでもない事を言つ。

「生きてたこと教えてくれなかつたおっさんには頭にきたけど……でもよかつた……よかつたあ……あたしも氣を失つて、気がついたら『』の医務室にいたしね……」

彼女は私が“生きていた”事に安堵したのか、とんでもない事を口走り始めた。

「あそこで起きた事つて、全部夢だつたんだ…… そうだよね、心臓刺されても死ななかつたり、モンスターが実体化したり人と融合したりするなんて夢に決まってるよね…… 最近遊戯皇見てないんだけどな……」

その言葉を聞き私とクラウチは思わずエミリアをにらみ付けた。彼女の中では『夢の中の出来事』だと自己完結しているが、それでも私達の秘密を堂々と話されてはたまつた物ではない。

「夢の話は後にしてくれ！！ それはともかく、お前らやつぱり知り合いだつたか…… よーしょーし、思った通りエミリアも懷いているみたいだし好都合だな」

「思つた通り？ 好都合？」

「……まさか！！」

エミリアは首を傾げていたが、私は思い当る節があつたのを思い出す。あの時彼は試験も無し、パートナーつきだと言つていた筈だ。恐らくクラウチが言うパートナーの正体は……

「ああエミリア。一応紹介しておくがこいつはギュスター・ヴ、うちの会社の理念に共感して喜んで社員になつてくれたぜ」

「……またいつも悪代勧誘？ まあ、コイツが有能だつて事はあたしも知つてるけど……」

彼女は私の方を見てから胡散臭げな表情でクラウチに向かつて言う。

「骨折ったもんだ。試験免除にいよいよはマシ程度のパートナーをつけるつて条件を出す事んなつちまつたからな……」

本当は身内にとんでもない請求書を送りつけないと脅されたからなんだがな。しかもそれは実質騙まし討ちに等しいものだったが……

「へえ～めずらしく太っ腹だね～」

エミリアの発言に対してクラウチが呆れ返ったかのように腕を組んで声を上げた。

「何他人事みたいな顔してんだ。お前の事に決まってんだろ」

やはり彼の言うパートナーとは私の思ったとおりの人間だった様だ。一方でパートナー認定を受けたエミリアが驚愕の声を上げる。

「ええつ！？ おっさん！！ 勝手にパートナーとか決めるな！
！ 少しはあたしの意見を……」

「……ほお、お前それはつまり一人で働きたいって事か？」

その問いかけにエミリアは思わず口を閉ざしてしまつ。更に彼は私たちに向かつて声を上げた。

「さてギュスター、実はお前さん用の部屋を既に用意してある。エミリア、ぼさつとしてないでコイツを案内してやれ。パートナーなんだから仲良くな」

彼の有無を言わせない言動にエミリアも遂に折れたのか、頃垂れて声を上げた。

「はあ……分かったよ。それじゃ、あたしは先に居住区の入り口に行つてるから……」

そう言つて彼女は諦めてとぼとぼオフィスを後にした。クラウチが慌てて声を上げるがもう遅い。

「あのバカ……案内する奴ほっぽつてどうするつもりなんだよ……それに返事ひとつマトモにできねえのか、アイツは『ほんまに』

そう言わるとバツが悪い。だがそこでチャルシーが声を上げた。

『シャツチャーン、怖い顔するからネ。もつと優しくしてあげるといい三一』

彼女の言葉を持つてしても、クラウチには届かない。

「何で口クに働きもしねえ社員に優しくしてやんなきゃいけねえんだよ。な、ギュスター、ヴ……お前もやつ連つだろ?」

私にいきなり話を振らないでくれ。とは言え海底レリクスではありますに耳を疑う言動を発していたのも事実な訳だ。

「まあ……確かに働いてくれと言うのが本音だな……」

「そうだろ。やっぱお前さんは分かつてやがる。あんぐらーのガキは甘やかすとつけあがるから厳しそぎぐれえが丁度いい」

「それでも言わせて貰うが……流石に仕事中に酒を飲んだりグラビア写真を見たりするのも、子供からしてみれば『お前が言つたとしか言えないが……』

彼女曰く『悪代勧誘』に対する嫌がらせ代わりに言つてやる。だがそこでクラウチが不機嫌そうに声を上げた。

「あ？ まさかテメエ俺とエミリアが親子関係だと思つてるのか？ 勘違いしてるようだから予め言つておくぞ。俺とエミリアは、家族でもなんでもねえ……ただの上司と部下の関係だ」

上司と部下を強調するかのように言つたが、チャルシーはそんな彼をたしなめるように言い放つ。

『そんな、ツレナイネ。シャツチョサンは、あの子の保護者でもあるのに……』

「……ツケの代わりに、お前共々押し付けられただけじゃねえか。泣く真似止め、またクレームつけられるぞ」

ハンカチ片手に泣く真似をするチャルシーにクラウチは呆れながら頭を抱えた。

『資源枯渇のせいでお店がつぶれる直前まで来てくれたの、シャツチョサンだけよ。私とエミリア、引き取つてくれて感謝感謝ネ。もし引き取つてくれなかつたら私たち悪いオジサンたちに身売りしてたヨ……』

「……それで？ いい加減こっちも暇ではないんだが……」

流石にこれ以上三文芝居を続けられると呆れより怒りが強くなつてくる。私の怒りに感じたのかクラウチが大きな声を上げた。

「ど・も・か・く！ 俺とエミリアは家族なんかじゃねえ！！ 書類上俺はエミリアの保護者になつちまつてるつてだけだ！！ そうじやなかつたら、働かねえ五月蠅いだけのガキなんざとつくて放り出してんだ！！」

『仕方ないヨー。最初は誰でもわからない事だらけヨ……皆が皆、最初から強いわけじゃないもんネ。あの英雄イーサンだつて始め

てテクニック見た時はビックリ仰天驚いたの『一』

確かにそうだが、キャストはカタログスペックではないか？

「まあ、アイツの過去とかはどうでもいい。正直そんな事に興味は微塵もねえしな」

そのことに関しては異議を覚えた。人の過去はある程度は知つておいた方がいいと思うのがウォザーブルグ動乱の顛末を聞かされた時に思ったことだ。確かに地雷を踏む可能性はあるが、知らずの内にとんでもないものを踏まされるよりかは遙かにマシだ。

「まずお前さんがやる事はHミリアのお守りだ。タダ飯喰らいじやなくなる程度に鍛えてやつてくれ。それでいい、後はお前の好きにしな」

話は終わりだと言わんばかりに席に座るクラウチ。それを見たチエルシーが私に向かつて声を優しく上げた。

『シャツチョサンはああ言つけゼHミリアはいい子』

まあ、あれで悪党だつたら私も即座に人間不信に陥るから彼女の言葉には首を縦に振る。それを見た彼女は顔を明るくさせた声を上げた。

『仲良くしてもらえると、ワタシもウレシイ、あの子もウレシイ、皆ウレシイ。お密サン、エミリアは居住区の入り口でお待ちP……レディを待たせちゃいけないネ』

彼女の言葉に後押しされて退出しようとした時、突然クラウチが

私を呼び止めた。

「ああそうだ。アイツは夢だと思つてたから渡せなかつたんだよ、
『お前さんのだろ?』」

そう言つて彼は3種類の物を私に手渡す。まず一つ目は私達の本来の武器である『ユエルモンスターZのカード』で私が入手した『レッド・デーモンズ・ドラゴン』、続けて赤と黒で彩られた私のナノトランサー、そして……

「『』の細剣は……」

最後は私が収容しようとして結局出来なかつた細剣だつた。クラウチはそれを見据えて声を上げる。

「お前さんの近くに転がつていたんだ」

私は首を横に振る。元々この細剣はあの男が使用していた武器であり私のものではない。しかしクラウチは無理矢理私に押し付けようとした。

「違うのか? ゴイツは俺やバスクのモンじゃねえし、『デザインだつてHミコアの趣味でもねえ。となるとお前さんのモンだつて言うのが俺の推理だ』

どうやら彼はこの武器を無理矢理にでも私の物にしようとしている。イグニスを筆頭とした武器が破損ないし破壊されてしまった以上、私の武器はシールドしか存在しない事になつている。

「仮に違つとしてもだ。持ち主がここにいない以上誰のものでも

ないが俺らはいらねえし、Hミニアジヤ使えそうにねえ。つう訳で

コレは今日からお前のもんだ」「

この細剣は軽いし貫通力もある。捨てるには惜しいし、何故か手に馴染んでいる。炎魔竜とは比べ物にならないが私がコレを欲してしまっている以上、断る理由は無い、か……

「……まあいい。くれると言うのならば貰つておく

あのよしやな悪質な勧誘を受けたのだ、敬語を使う氣など礼を言つためであろうと失せている。クラウチの方は厄介払いが出来たと思つているのか嬉しそうな表情をしていた。
私は細剣を腰に備え付けるとこの場から立ち去つていった。

「さて、居住区だつたな……」

だが腑に落ちないことも在る。炎魔竜も腰に据えた細剣も現実に存在するが、不思議な事にナノトランサーの中にあつた武器は全て幻だつたかのように消えさせていたのだ。しかしこの細剣だけは消えずに今も残つているのだ。

(……そうなると夢ではないのか……？ それにしても両足や左

腕が生えている事は……いや、そもそも今いつしている事すら……（

『む、お前は……』

私が考え事をしている中、聞き覚えの在る男性キャストの声が響いた。細身のパーツにフルフェイスメット……海底レリクスに訪れた際に会話をしていた傭兵だった。

「確かに……私と海底レリクスであつたな……」

『覚えていたか。俺の名はバスクだ。クラウチから名前は聞いているぞギュスター・ヴ、ここにいるということはお前もリトルワイングに入ったのか？』

入ったと言うか入らされたと言うか……答えるに戸惑つていると、バスクの名に聞き覚えがあつたので問いかけた。

「すまないが私達を海底レリクスから救助した『バスク』とはお前か？」

『……ああ、俺の事だ。レリクスでの救助活動と突然攻撃してきたヒューマンとの戦いが縁でクラウチにスカウトされてな』

やはりあの男と戦つた事は夢ではないか。そう考えているとバスクが周りを見て声を上げた。

『入社するまでの経緯は問わずと聞いていたから、どんな奴らがいるのかと思っていたが……それほどひどい状態つてワケでもなさそうだな』

確かに言われてみれば周りを見ても、周囲にいるのは荒くれ者だと思われるが一日中喧嘩をしているような奴らばかりではないとい

う」とか。

「確かにそうだな……問題は取り仕切つている筈のクラウチの行動ぐらいか……」

昼間から酒は飲むわグラビアは見放題だわ問題しかない。特にあの勧誘を思い出すだけで怒りが込みあがつてくる位だ。

『……』

だが私の怒りとは他所にバスクは何か別のことを考えていた様に見えたが、声をかけると直ぐに嗜める様な声を上げる。

『そこまでだギュスター・ヴ。俺たちは雇われの傭兵よろしく仕事に精を出せばいいし、タダの酔っ払いならとっくの昔に解雇されいる筈だろ? クラウチだつてここの以上実力はある方だぞ?』

そう言えばこの男はクラウチと共に行動していたはずだから実力は知つてゐる訳か。確かに言いすぎだったかも知れないな。

『まあ一緒に仕事をする機会もあるかも知れんが、そのときはよろしく頼む』

「いっちもだ。ではな」

バスクと別れてしばらくすると今度は横から女性に声をかけられた。赤い扇情的なコートを着ていてる青い髪を靡かせた右目を隠している女性ヒューマンだ。

「見ない顔だな……と言つ事は久々の新入社員か……しかもその

顔から見ると、クラウチとチャルシーが悪代勧誘をやつたようだな

その事を聞きげんなりとする。田ぼしい人間には毎回コレをやつているのかとも思えた位だ。

「あれはなんなんだ？訴えられても文句は言えないと思うが……」

「あれは既に引き抜きの契約を済ませてある傭兵に対する冗談みたいなものだ、気にする必要は無い」

「言つてもいい冗談と悪い冗談があるのは当然の事だと思つのだが……あれが冗談だとは初耳だつたぞ。

「おつと自己紹介が遅れたな。私の名はクノー、リトルウイング所属だから君達の先輩に当たる」

「……ギュスター・ヴ＝ウインストンです。若輩者の身ですが、これからよろしくお願ひします」

そう言つて互いに握手する。握手が終わつたところでクノーと呼ばれた女性は目つきを鋭くさせて声を上げた。

「ココは入社までの経歴が問われない反面、入社後の実績で全てを評価される完全な実力主義の会社だ……」

なるほど、それで性根の腐つた連中は軒並み排除されていると言うわけか。私は一応推薦状代わりに経歴を問われたわけだが即戦力だからいいと言つ事になつたのだらう。

「ああ、腕に自信が無いのなら早々に去つた方がいい。そして自信があるのなら好きにすればいい」

「……一応コレでも少精銳の自警団のメンバーを務めていましたので自信はある方です。私が逃げれば残った2人の名を汚す事になるので……はい分かりました等とほざいて逃げはしない……」

最後の方は地を出して声を上げる。それを知ったのか彼女も小さく笑つた。

「ふふ、今のは軽い齧しだつたんだが、全く動じていないどころか反論までするか……流石は伝説の『三騎士』といったところか？まあ君が私と敵対しない限り、私は君の味方だ。いつでも話しかけてくれ」

互いに会話を終えると私は漸く居住区の方へ差し掛かる。入り口を潜り抜けるとマンションの入り口フロアのような空間が広がっており、エミリアはソファーの背もたれに背を預けて眠っていた。

「エミリア。遅れてすまなかつた」

「……あ、やっと来たの……んじゃさうかと終わらせるわよ……」

エミリアが目を擦りながら言つと、ソファーから立ち上がりて移動を始めた。私も後に続き転送装置にたどり着く。

「ホイホイッと……」

エミリアが装置を操作すると、私達の身体は扉が並び立てる廊下へ移動してその中の1つを開けて私たちは入る。質素だが落ち着ける部屋だ……まあ、家具がベッドとビジフォンを置いてある机しかないのは今まで誰もいなかつた部屋だからだらう。

「……あ、一応会社から支給されてるパートナーマシンナーもり

クエストあるなら今日中に言つておいてね。ルームグッズとかもスタイルショップとか生活用品店に行けばあるから……シャワー浴びたかつたらドレッシングルームに備え付けられてるのがあるから」

「了解した」

「んじゃ後はテキトーにやつてね……その間あたし休んでるから……ふあ～～～あ……」

そう言つて彼女はベッドの上で眠り込む。掛け布団を彼女に被せると私はダレッシングルームへ向かい、鍵をかけた後で服を脱いだ。

(……)

備え付けられているシャワーを使い冷水を嫌と言つほど浴びながら私は考え方をしていた。

今日の……いや、昨日かも知れないし一昨日かもしれない海底レリクスの調査を思い出す。

彼女は夢だと言つていたが炎魔竜が封じられたカードもあの細剣も実在している。クラウチの表情から察するに恐らく彼もバスクと共にあの男と戦っていたのだろう。よつてあの男も実在している。

(どうこうことだ……)

HIIRIAは夢だと思っていたようだが証拠物件と証言がある以上

現実だと確信している。だが彼女の言葉に對して納得している自分もいるのだ。

何しろ彼女の言葉を裏付けているのは……他の誰でもない私自身なのだから。流石に冷たくなったからシャワーを止めて置かれてあつたバスタオルで身体を拭く。

(左腕はある……両足もある……)

拳を強く握ると痛みが走る。

(痛みがある以上、夢ではない……)

チエルシーから渡された服に着替え、私は今も眠っているエミリアを横田で見据える。

(彼女は私と面識がある……彼女にとって何処までが夢なんだ……?)

彼女にとつて全てが夢ならば私の事を『夢の中の人間』と言つ可能性があった。だが私は現実の人間だ、フィクションの存在ではない。

考えれば考えるほど分からなくなってしまった。出口の無い迷宮に迷い込んでしまったようだ。

(……考えるのは止めよう……バスケットの言葉を借りるわけではないが、私は雇われの傭兵だ……命のあつての物種……それで十分だ……)

血口満足だといわれるだろうが、そう考えるしか突破口はなさそうなのだ。さて、そう結論付けたら後はMAW社にイグニスのデーター

夕を届けなければならぬ。

私がそつ思つて部屋から出よつとした瞬間

『待つてください……』

そんな声が耳に届くと、私は思わず声がした方向に振り向く。しかしそこには誰もいない。この部屋には私とエミリアしかいない事は、彼女が鍵を開けたことで確認されている。

更に言えば声と口調はエミリアの物ではないし、当然だが私のものでもない。パートナーマシンナーはまだ支給されていないから動かないし、私がMAW社で使っていたのは遠距離主体の戦いを補うG H 4 9 4型だ。

鼻を擦ったのはあまりにも心地よい匂いを持つ花の香り……この

花の匂いを嗅いでしまえば、今までの花が意味も無いモノになってしまってはいかとも思えるものだった。

そしてもう一つ……

「エミリア……？」

先程まで眠っていたエミリアが宙に浮かび上がつており、彼女の顔に幾何学的な文様が浮かび上がつていたのだ。そして彼女から金色のような輝きが放たれると、それが一箇所に集まつて1人の女性の形となつた。

流れるような金髪。

露出度が高い服に豊満な肉体。

背に太陽のような光輪を背負い、そこからも溢れる輝き。

そして何よりも……全てを慈しむ様な優しげな表情。

正に『理想の女性』とも言つべき存在がエミリアの体から姿を現していた……

アーティストコントローラーへ（後編）

クラウチがやつたよ「うな冗談は止めておきましょ。」話が通じなかつたら洒落じやすみません。後バスケットの会話を原作から変えてみました。

ギュスター、P.M.……先にも書いたようにアレドのwww
そう言えば皆さんが思つ浮かべるチートって他にどんなものがあるのでしあうか？

真実と新しいパートナー（前書き）

11月2日に車に轢かれかけたテボエンペラーです。
漸くミカさん正式に初登場です。

2話ではボツられ、3と4話じゃチョイ役…

第1章最終話、ぜひじらんください。

真実と新しいパートナー

ユミリアの身体から姿を現した女性を前にした私は警戒心を抱き、身構えるように対峙する。ユミリアを媒介として現界している以上、私の行動次第で彼女に危害を加えてしまう結果に繋がるからだ。

『……貴方が警戒するのは分かります。ユミリアを人質にするつもりは私にはありませんので安心してください』

彼女が沈んだ表情で私に向かつて敵意は無い言つ。しかし完全に信用する事は出来ないため、警戒だけは解かない。

「……何者だ」

端的にしか言わないが、いつでも細剣を抜く事が出来るように柄に手をかける。一方で彼女は私を宥めるように声を上げた。

『私はミカ。訳あって、この子に宿る意識のみの存在です』

「ミカ……だと？」

私は彼女の名に聞き覚えがあつた。海底レリクスで私たちを襲つた男がその名と花の名らしきものを口走っていたからだ。故に私はある名詞を彼女に向かつて呴いた。

「テティの花」

『！？ 何故貴方がその花の名を知ってるのですか！？ 既に存在しなくなつてから久しいのに……』

やはり彼女があの男が言つていた『ミカ』なのだと確信した私は

右手に込める力を強くした。

「海底レリクスで私達を襲つた男がお前とその花の名を言つていた」

『そり……ですか……』

彼女が何処か納得したような沈んだような表情で俯いていたが、直ぐに顔を上げて声を出す。

『ですが……それでもお願ひがあります、……今は私の話をどうか聞いてくれませんか?』

彼女にその気は無いとは言え、実質エミリアを人質に取られる以上どうする事も出来ない。私はただ話を続けると言つ事しか出来なかつた。

『ありがとうございます。今私の姿も状態も、既に失われた古の技術のもの……失われた技術を旧文明のものと言つのなら、私たちは「旧文明人」となりますね』

「旧文明……だと?」

流石に旧文明の話になると、私も興味はそちらに向いてしまう。少しは彼女の話に耳を傾けようと言つ氣にはなつた。

『はい……途方もない過去に、この星を生きていた原初の文明を持ちうる人類……それが私たちでした』

「……成る程……レリクスもそこに存在していたこの炎魔竜も旧文明の遺産と言つ事か……」

そう言つて私は一枚のカードを手にする。それは私を魅了した存

在が描かれていた。

『はい、それだけではありますん……貴方が持つ本当の力も……かつては旧文明の者達が持つ力でした』

我々の持つ力が旧文明の遺産……それは異能者なら誰もが最初に教わる常識中の常識。彼らの存在があつたからこそ、私たちは彼らの力を使う事が出来るのだ。

それを自分達が最初から持つ力だと勘違いしている奴らは外部から流れ込んできた者たちか、異能者が国を支配していた時代を取り戻そうとしていた存在位しかいない。

『この時代では“デュエルモンスター”と呼ばれ人々の間で親しまれ流行していますが、元を糺せば決闘の儀と言う悪しき存在を封じたり神々を祭り上げる王族が執り行う神聖な儀式……私たちも研究の合間に縫つて祭りに参加したものです』

そう言つて彼女は過去を懐かしむような声で言つ一方で、私は決闘の儀で封じられたり祭り上げられた存在に興味を持つた。旧文明の神……どういった存在だったのだろうか？

『……では本題に入つてもよろしいでしょつか？ この時代の背景はエミリアの記憶から把握させてもらいました』

彼女の言葉に私は息を呑む。彼女の表情も本気のものだ。

『3年前、グラール太陽系を襲つた危機……覚えてますか？』
「忘れるはずもない……SEEDの襲来だな？」

その言葉に彼女は頷き、その事を思い出すかのように顔を背けた。

『はい……それは、私達の時代でも起こったことなのです』

そこからは新事実とも言える証言が出てきて私は息を呑んだ。
旧文明を襲つたSEED……そこまではいい。レリクスやスタリ
ティアが対SEED兵器もある以上、分かっていた事だった。
だが旧文明を統べる王に対する反乱が起こっていたことには驚いた。当時の王……旧王を引き摺り下ろせば、今度は新王を名乗つた者が旧王時代以上に酷い独裁が始まつてからSEED事変が起きた。決闘の儀で封じられた存在はSEEDに汚染されたり封印が解かれたりして人々を襲い、更には旧王を指導者とした旧王軍が新王軍と戦争に入るわで、旧文明は疲弊していったというのだ。

私は自然の内にビジフォンを起動してメモにとつていった。何しろ最大の情報提供者が私の目の前にいるのだ、既に彼女に対する警戒心など私には無かつたとも言えた。

『それでも、私達はSEEDの元凶であるダーク・ファルスの封印に成功しました』

ダーク・ファルス……レオンがかの英雄・イーサン＝ウェーバーと、幻視の巫女・ミレイ＝ミクナ……もといその姉であるカレン＝エラと共に倒した存在か……

『新王軍も旧王軍も互いに指導者を失つてしまい、これ以上戦争を続けることも出来なくなりました……しかし、その頃には既に三惑星の大地は戦争の傷跡が深く、更にSEEDに汚染されており回復は不可能な状態でした……』

「……旧文明人の肉体も同様に、か……」

そこまでならただの旧文明人がどうして滅んだかの真相を聞いて

それきりなのだが……

「続きが、あるのか……？」

恐らく続きがあるのだろう。だつたら態々エミリアの身体を借りて話す必要はないし、私達の前に姿を現すことすらない。

『……はい。このままでは人も星も滅亡するのは時間の問題でした……そこでの内乱で私たちに敵対した側の旧文明人達は賭けに出たのです』

「賭け、だと？」

『そう……その賭けの名は復活計画……大いなる時を超える自分達が蘇えるための計画です……』

復活計画。

その言葉に対しても私は息を呑んだ。復活するだけの計画には無い不快なおぞましさを本能で感じ取ったかのように。

『コレから貴方にイメージを流します。私を含めた旧文明人はS EEDに対する強力な浄化をこのグーラー全てに対して行い、三惑星を復活させ……』

彼女の言葉と同時に私の視界は闇に包まれ、まず真っ先に浄化され輝きを取り戻す三惑星が目に映る。

『次に、新たな「ヒト」の素体を造り上げ、それを大地に放ちました』

続けて荒廃した大地に三組の男女がそれぞれの惑星に降り立つ光景が浮かぶ。

『……そして……汚染された自らの肉体を棄て、精神だけの存在となつて永い眠りに突いたのです』

ミ力……いや、ミ力を模した者から自分自身の精神体が抜けていく光景が浮かび上がつた。まるでエミリアから姿を現す彼女のように。

『そつ……新たに造り上げた「ヒト」が高度な文明を築き上げた時……』

そして最後に今のグラール……パルムの町並みの中を歩く人々の姿が映し出され

『その身体を奪い、復活する時まで』

その身体に黄金の光が吸い込まれ、かつてその肉体の主だった者の精神体が弾き出されて瞬く間に霧散した。

その光景を見せられた時、私の視界は瞬く間にマイルームに戻る。私はその光景に呑まれ、我に返ったときは額に手を当てて呼吸を荒くしていた。

『……恥まわしいイメージを見せてしまって申し訳ありません。ですが現に計画は実行に移され、作り出された「ヒト」達は、高度な発展を遂げていきました。決闘の儀と我らの力を復活させ、旧文明人達の精神が眠る場所への繋げてはならない道を開く事が出来てしまつほどに……』

未だに驚愕している私を他所にミカは話を続ける。

『……もうお分かりだと思います。旧文明人達によって生み出されたヒトとはヒューマンの事です。私達の文明が持っていた技術とは雲泥の差ですが、それで十分だとみなされたのでしょうか』

彼らが創りだしたヒューマンがヒューマン・キャスト・ビーストを生み出し文明を発達させ、『決闘の儀』を『デュエルモンスターズ』として復活させ、SEEDを退け亞空間研究を推進させて……

「要するに……私たちが築いたものを横から奪い取るというわけか……？ 自分たちは何一つ生み出していないというのに……？」

『……お恥ずかしい話ですが、その通りです……今、このグラルは一部とは言え旧文明人達の生み出した罠に狙われているのです』

あくまで事を起こしたのは一部の旧文明人だと主張するミカ。そ

の表情から彼女の言う事は真実だろうとは言え信頼する理由が無い。何故なら彼女もまた旧文明人なのだから。

「この際眞実かどうかはどうでもいいが一つだけ聞かせてくれ。何故旧文明人の貴女がそれを私に話す？しかもその様な言い方は計画を阻止してくれと依頼しているようにしか聞こえないのだが……」

『はい、私は彼らの忌まわしい計画を阻止したいのです……』

私の問いに迷わず答えるミカ。その理由を問いただす前に彼女が口を開いた。

『確かに私は旧文明人ですが、現代への回帰は望んでいません……』

更に彼女は今まで以上に真剣な表情で、私に向かつて答えを紡いだ。
『私達は滅ぶべくして滅んだ。世界は次の世代に任せるべきなのです』

他のヒト達ならともかく、その言葉は私達異能者にとつて信じるに値するものだった。我々異能者も影で生きる者、いずれ消え行く存在なのだから。

「……分かった、『世界は次の世代に任せる』と言つた言葉を信じよう

『本当ですか！！　ありがとうございますー！』

ミカはそう言って感謝の言葉を言った。とは言えまだ私には分か

らない事が在る。

「とは言え……まあエミリアに話せばよかつたのに何故私から話し掛けたのだ?」

そう、最後にして最大の疑問だ。私に話さずとも、エミリアに話せば信じてもらえるかどうかは別問題だとして真っ先に話してもよきやうだったのだが……

『ええ……ですがJのナは心を覗かしあつていて、私の声を認識してくれないので』

「なるほど……確かに認識していれば、あの男の言葉に反応したはずだ……」

『Jのようにして彼が私の姿と声を認識していたのかは分かりません……それとあなたから話し掛けた理由ですが……』

彼女が沈みきつた表情でその言葉を紡ぐと、私は思わず息を呑んだ。

『それは……貴方が一番わかるはずだと思います、……』

炎魔竜 レッド・デーモンズ・ドラゴン
腰に据えた細剣とナノトランサーから姿を消した武具
あの男と戦つたというクラウチとバスクの言葉
エミリアが言う『夢』と『現実』の境界線の矛盾
千切れた筈の左腕と両足が今こうして繋がっている事
そして

「……夢ではなく……私は……死んだ……」

その残酷なまでの真実

よつやく全ての点が線となつて繋がり、一つの答えを導く。答えは至つて簡単、全てが夢などではなく眞実だったといつわけだ。

『…………はい』

ミカもその答えに對して真剣な表情となつて答えた。既に答えを出したとは言え、眞実だと突きつけられると氣が滅入る。

『…………貴方は一度……炎魔竜を瀕死の身に宿し魂を込めた一撃を放つて、その命を燃やし尽くし完全なる死を迎えた…………』

彼女も言葉を選んだのか間を置きながら眞実を告げる。私があの男によつて死にかけたと言われるよりは幾分かましだ。

『その時、エミリアの強い願いによつて発言した私のプログラムが貴方の身体を再構築しているのです…………』

つまり彼女のプログラムが途絶えた時、私は再び死を迎えるという事なのでは無いのだろうか。

「…………せう、か…………」

だが口に出したのは考え方ではなく先の自分は死んでいたと言う事實に対しての溜息のみ……確かにエミリアが『夢』の一言で片付けようとするわけだ。

「…………ふあ…………」

そんな気の抜けた欠伸声がエミリアの方からすると、ミカの身体が一瞬消えかかる。どうやらエミリアが起きている時はミカの身体は維持できない造りなのだろう。

『……そろそろこの子が目を覚します。詳しくはまたいずれ……』

そう言つた直後にエミリアがのつそりと起き上がり、ミカの身体は瞬く間に消える。エミリアが腕を高く伸ばし盛大な欠伸声を上げた。

「……ん～～～……ちょっと寝けやつたかな？」

だが彼女は私の方を見ると驚いたような表情をして声を荒げた。

「……ちょっと大丈夫！？ 頬色がすゞしく悪いよ！？ マイシップの説明は明日にするけどいいよね！？」

「……分かった……でももう一回シャワーを浴びてから寝るぞ……』

117

そんなに酷い顔をしていたのか……そう思いよろめきながらドレッジングルームへ向かい扉を閉める。そこで私は服を脱ぎ、限界まで冷やしきつた冷水を頭から気が済むまで被り始めたのだった。

暗いマイルームのベッドの上に転がつて私はただあの海底レリックスでの出来事を思い出していた。

（突然心臓が熱を持つて蹲つている間に取り残され、エミリアと出会つてレリクスを進んで、炎魔竜を手に入れて得体の知れない男と戦い……そして……死んだ）

単純にその言葉が突き刺さる。SEED事変が終わって、ウォザーブルグ事変で協会の幹部や一族の当主たちが拳つて失脚して、仲間たちがまたそこで行方不明になつて、MAW社の再建に右往左往して土台を造り上げて今に至る、か……

（まさかこの様な形で死に、復活するか……それに旧文明の復活計画……）

話を聞いただけでは荒唐無稽だが、旧文明人本人からの証言とかつて協会の一部が自分達が復権すると言つ野望を持っていた事を思い浮かべると、そのような計画があつても不思議ではない。

尤も、そのような暴挙は全て防がれ首謀者やその一味は全員肅清され、残つた人員も単純な傭兵や訳ありの存在は拳つて条件付無罪。そして全員が条件を満たし晴れて完全無罪だ。

（……それに……死んだ、か……）

思い浮かべるのはあの日……Gロロニーが突然落下してきた時、私たちは拳つて街のシェルターに逃げる羽目になり、自分達のリーダーが殿を務め……死んだ。

今でも仲間たちに彼の死を告げた時の光景を思い出してしまつ……

『マジかよ……あのボスが死んじまつたって言つのかよー?』
カーツによつてS E E D ウイルスに感染してしまつっていたレオン
がM A W 社のメンテナンスルームで驚愕の声をあげ

「そんな……嘘だ……そんなの嘘だ!! あたしは信じないよ!!」

当時ある事情で謹慎中だつたミサキが報告しに来た私を掴み上げ

!

「クソツ……クソツ!! クソツ!! チックショオオオオオ

!..

「飛鳥!! 落ち着けつて!!」

アスカが叫びながら壁を殴りつけ、それをカールが泣きそうな顔
で押さえつけ

そして

「…………僕は認めないよ…………あの人を殺しておきながら被害者面しているガーディアンズを、あの人を殺したイルミナスを絶対に認めない！！」

彼をミサキと同じかそれ以上に慕っていたゾディアは端正な顔を憎悪に歪め、ガーディアンズとイルミナスに対して滅ぼすと叫ぶ

「あの日を境に、私たちは袂を分かつた……」

S E E D に汚染されたキャストと言つ事で白い目で見られながらもガーディアンズに残る事を選択したレオン

パートナーと共にイルミナスを追う選択をしたミサキ

私と共に M A W 社に留まり『三騎士』として救助活動を行う事になつたカールにアスカ

突如私達の前から姿を消したゾディア

「そしてウオザーブルグ動乱でカールとアスカは些細だが致命的な考え方の違いが切欠で殺し合い、そして行方不明になつた……」

あの七人の内、今や一族に残つているのは私のみ。そう考えると私は深く溜息を吐く。

「……とは言え……」

死んだ者は冥界に行くとか、河を渡るとかなんだかんだと言っていたが、結局は何も見えずただただ真っ暗だつただけだ。

「大体、あの人に会えなかつたからな……」

まあ、彼と会つとしたらミサキかゾティアぐらいだひつ。そう考えた時、私の意識は暗闇の中へと沈む。やはりそこには何も無かつた。

そして翌朝、居住区のロビーフロアにて……

「おはようギュスター・ヴ……大丈夫?」

「……大丈夫だ……これ以上、わがままを言える立場でもないしな……」

朝見た時の表情は正に最悪といつてもいいほど状態だった。昨日よりかはマシだとは言え、快調には程遠い。

「ま、まあギュスター・ヴがいひつて言つならマイシップの説明に

入るわね。昨日のうちに認証登録されたつておっさんか言つてたしさつと行こ」

そう言つて彼女が転送装置を操作すると、私達は瞬く間に何処かの船の操縦室へと移動した。

「……ほつ……」

我がMAW社が持つ社用マイシップは殆どが系列会社が製造した船だが、我が社のエリート（一般的な）が持つものよりも高そうな代物だつた。

何せ立体映像まで流れるモニターにエンジンや燃料装置が現同盟軍でも使つている代物。我が社でもココまでの出力を持ったエンジンは開発しきれていないのが現状なのだ。

「どしたのギュスター、ヴ？」

「いや……社用の船にしてはずいぶんと立派だなと思つただけだ」

私の言葉に対しても彼女も顎に手を当てるが、直ぐに答えを出した。

「……ま、あたしも今まで仕事とかに興味なかつたしね……ココの中央端末で依頼を受けて、現場へ向かう時はコレを使えばいいってこと」

彼女の説明を聞く私だが、その様子に対して彼女が怪訝そうな声を上げた。

「……何かあつたの？　あたしが昨日あんたの部屋で寝てから様子変だつたじやん」

「……いや、海底レリクスでの件について考えていただけだ」

海底レリクスでの出来事について考えていたのは嘘ではないが、それを聞くとHミコアはすぐ嫌そうな表情をした。

「あれ夢じゃん……こつまでも夢の中の出来事を考えてたつてしようがないでしょ？」

「では聞くが私の存在は夢ではないのか？　お前の言葉が真実なら私も夢の中の登場人物だとこいつとになるぞ」

私がそう言つとHミコアは答へに詰まつたのか、顔を俯かせて声を上げた。

「んー……まああたしとあんたつておっさん達に助けられたわけでしょう？　それがあんたも現実の人間だつて言つ証拠じゃん」

「……そうきたか」

「それにデュエルモンスターのモンスターと融合したり、多くの武器がいきなり現れて発射されたり、死なないヒトなんていふわけないし！　そんなヘンテコ出来事は全部夢よコ・メ！！」

一応筋は通つてゐる。これ以上話を進めていつたとしても水掛け論になつてしまふな。

「まあ、これからあたし達つて仕事仲間になるわけじゃん？　でもあたしの方が先輩なんだから敬うよつに……」

Hミリアは私を見据えるが、直ぐに溜息をついて首を横に振つた。ビツビツしたのかと聞く前に彼女がいきなり声を上げた。

「でもま普通に接した方がいいか、うん」

彼女の声に納得はいかないが私も頷く。そして一通りこのリトルウイングの施設の説明を受けたところで、彼女がいきなり疲れたような声を上げた。

「それにしても疲れたわ～～～昨日は初めての仕事だったし、地震に巻き込まれて取り残されるわ、ヘンテコな夢は見るし……」

「まあ、な……」

私は淡々と言葉を紡ぐ。私にしてみたら全て現実だったのだが、寝た子を起こすほど暇ではない。

「それこそ、あたしあんたには感謝してるんだよ……あんたがいなかつたらおっさんが来るまで生きていなかつたと思つ」

「そこは過大評価しそぎだな」

「それに、なにより、あたしの言つ事信じてくれたし……ま、殆ど夢だけじゃほん当の「こと」でいいよね……？」

否定する理由は何処にも無い。私は素直に頷く事にした。

「ま、これからは一緒に仕事をする事になるんだろうし、あなたの話も聞かせてよね！」

「うう言って彼女はウインクをして、私に指を突き刺して笑いながら言った。

「なんたつて、あたし達は『パートナー』なんだからねーーー！」

その言葉を聞き呆気に取られる。

そう言つてくれたのは一体いつ振りだつただろうか？
ウォザーブルグ動乱以来仲間は殆どいなくなり、対等な関係で話
が出来るのはガーディアンズにいたレオンや兄を含めてMAW社で
も両手で数えられる程だった。

そんな私に新しいパートナーだと宣言する人間が出来た。

対等な関係で接し、私に対して碎けた口調で物を言つ。そんなヒ
トなど殆どいなくなつたのだ。

「そ、うか……」

そして私は彼女に向かつて近づき、頭を叩きながら言つた。

「だったら仕事が嫌だんだとか言わずに精進しろ」

そう言いながらマイシップから中央ロビーへ向かう……と言つよ
りそこしか行き先を設定されてなかつたから操作は楽だつた。後ろ
の方でエリシアが子ども扱いするなと叫んでいたが聞き流した。

クラウチに自分のパートナーマシナリーがあると言い、MAW社
にいた部下に送つてもらうよう通達する。その途中でバスケットバー
トナーカードを交換し、カフェに行つて3人の男女と会話する。
その道中、クラッド6内のショッピングエリアを散策する内にカ
ードショップを見つけてそこにに入る。やはりそこは私にとつて落ち
着く空間だつた。

「ふむ……」

グラスケースに収められたカードを見据え、私は掌からあのカー
ドを取り出すと小さく笑つた。

「たとえケースの中に入つたカード全てと、このカードをトレー
ドしてくれと言つても交換しないがな……」

グラスケースの中に入ったカードの内、『F・G・D』や『E・
HERO アブソリュートZero』と言つた何枚かは絶版物の高
級品扱いされているカードだ。私にとってこのカードはそれら以上

の価値を持っているのだ。

「やあやあ、この店は初めてですか？」

そう言つて姿を現したのはエプロンを身に着けた1人のヒューマンだった。短い黒髪に黒目、美形と言わないがそれでも平均以上の顔立ちは持つている。

「ああ、貴方はこの店の？」

「ええ、この店の店員ですよ。まあ、店員としても新入さんですがよろしくお願ひしますね」

手を差し出す店員に私も手を差し出して握手を行つ。そして私は再び店の散策に入った。

真実と新しいパートナー（後書き）

さて、漸く第1章を終える事が出来ましたか……次回は幕間で彼の
PM初登場です。

PMは他の人々と違つてギャグにしかなりませんが……一応海底レ
リクスのその後も踏まえてやっていきたいと思います。

後日談と観光と邪氣眼と（前書き）

すまん、完全なギャグは無理だったorz

本日は

フレッシュフレッシュ、邪氣眼王

転生者1のその後

ギュスター・ヴさん家の「近所観光（表編）」
の三本です。

そのうち完全なギャグを……腹筋崩壊するかのようなギャグを！！

後日談と観光と邪氣眼と

あたし、あの日から本当にギュスター・ヴの事が身近に感じられる存在になつたんだよね。

リトルウイング所属傭兵（古参だが見習い） ハミリア＝パーシヴァル

まあ、人それぞれと言うし誰もが同じような趣味を持つているわけではないからな……

リトルウイング所属傭兵（新入りだがベテラン） バスク＝ウギン

すまん、本当にこれ以上言わないでくれ。

リトルウイング所属傭兵（新入りだがMAW社私設特務部隊長兼任） ギュスター・ヴ＝ウインストン

私がリトルウイング所属になつてから早数日。既にレッド・デーモンズ・ドラゴンのデータと、そのついでに破損したイグニス及び改良案はMAW社本社に送りつけ……それと引き換えに私の手元にPMが届いてしまつた。

「……」

そして今日はMAW社の依頼で再びあの海底レリクスの調査に赴いていた。メンバーは私にエミリア、仕事が無かつたと言つていたバスクと先日届いた私のPMの4人。私とバスクとPMが前衛、エミリアが後衛を勤めていた。

本当はPMを連れて行くときは我单独で仕事を行つのですが、エミリアたちも連れて行く羽目になつてしまつたのが運の尽きだつた。

『……』

バスクは無言のうちに私の方を見据えるが即座に目線を逸らした。とは言え、コレはまだSEED事変前から使用しているPMなのだ。SEED事変以前は単独行動を主としていたのでPMとのアシストを行つていたし、異能を隠す意味でのパートナーでもあつたのだ。

有能なのは認める。だが私はそのPMをあまり多用したくなかったのだ。

『！』

『奈落の火花が俺に呼応する……破壊神の鉄槌に身を焼かれよ！』

そのPMの言葉を合図にその腕から炎系のテクニック・フォイエが放たれる。何やら奇妙な台詞が発せられたが発せられたがそこまではいい。そこまでならニーズなり個性なりで気にする必要は無い。

「…………ふつ」

エミリアも何だか我慢していた様だったが、遂に限界が訪れたのか左手で指を私に指しながら大声で笑い出した。

「アハハハハ！！ 何それ、もう限界！！」

それを切欠にバスクも右手で顔を隠しながら小さく笑い声を上げる。私はあまりの羞恥心に顔を壁に向けて背けるしかなかった。

「ふむ……このレリクスも地上のレリクスと柱が同じだな……とは言えグラールで発見されたレリクスの建築パターんはほぼ同一……恐らく絶対君主制による治世だつたかと推測されるな……」

私はミ力に会う前から専門書で読み漁った知識を述べながら前へ進む。眼前から襲い掛かってくる原生生物も心臓を突き刺して絶命させ、タヴァラスと発表された高機動型のスタリティアはクラツド6で買ったランクC・のG R M製ハンドガンの『ハンドガン』で射抜く。

「……やはり威力は弱いか……リトルウイングでの私が持つランクは低いからな、レンタル品として支給されるものが弱くても仕方ないな」

元が炎魔竜との交戦で破壊された以上、文句を言うわけにも行かずハンドガンの感想を述べる。バスクも格闘術や実剣でエビルシャークと言う新種の変異生物を倒していく、エミリアもテクニックでアシストしていった。

「それでもリュクロスから手に入つたデータにも載つてゐる生物が何故海底レリクスに出没しているんだ……？ ふむ、気に入るな……」

私がエビルシャークの死骸を見据える。そんな中、再びP Mの機械音声が響き渡つた。

『闇夜の風に耳を傾けよ……届け、疾風の魔弾！！』

銃声が響き渡りしばらくしてから再び訪れる沈黙。そして間を置いてから盛大に響くのはエミリアの笑い声。

「アハハハハハハハハ！！ やつぱ面白い！！ ギュスター・ヴ^フてこんな趣味してたんだ！！」

『うむ、ヒトは見かけによらなこと言つがまさか口で見られるとはな……』

「私の趣味ではない！！ 断じて私の趣味ではない！！」

バスクも顔を俯かせ押し殺していた笑いを隠し切れずに漏らし、一瞬だけ異能を解放しようつかとも考えたが直ぐに自制を聞かせる事に成功した。

「えー、結構かつこいいと思つけどなー『奈落の火花が俺に呼応する……破壊神の鉄槌に身を焼かれよー！』とかさ」

私が反論するより先にエミリアが格好をつけながら右掌を開いて左から右へ移動させ、更に続けてナノトランサーから取り出したハンドガンの銃口を別の方向に突きつけながら続けた。

「『闇夜の風に耳を傾けよ……届け、疾風の魔弾！！』とか言つたり！！」

それを見たバスクが突然先程通つた通路の方へ走り出すと、しばらくしてから何やら笑い声が響いてきた。

「……エミリアが止めを刺したな」

私は小さく今までの意趣返しに反撃をするが、一方のエミリアは含み笑いを浮かべながら私に向かつて言い放つた。

「えー？ 確かに止めはあたしが刺したけど、大部分ギュスター
さんのせいですよー」

「なぜそつなる！！ そもそもあれを選んだのは私ではなく……
『くつ……どうやらもう一人の俺が……暴れたがっているようだ
……』

反論する私を他所に再び機械音声が響くとエミリアが盛大に爆笑
し、私は頭を抱えＰＭを睨みつけた。

『ふつ……そこのおちびさんと黒き機械兵には力が足りなかつた
みたいだな……俺の言靈の意味を理解せず、ただただ笑い続けるし
かないとは……』

本音を言えば私も彼ら同様こいつの言う『力が足りなかつた存在』
になりたかった。他の面々はある意味ではマトモなＰＭだった（ア
スカだけ何故か外見が全くの別物、人型ですらなかつたが俗に言う
アタリだつた）のに、私だけこの様な大ハズレを引いたのだ。

『氣にするなマイマスター、貴方は我が言靈を聞いても笑わなか
つた。つまり貴方にはそれだけの力があると言う事、むしろ誇るべ
きだ』

盛大に溜息をつく。全く分かつていらないＰＭに呆れてしまつたの
だ。と言つより……

「……まずはその縊まりの無い風体をどうにかしろラドル」

G H 4 9 4型パートナーマシナリー・固体名ラドルで本人曰く精靈に与えられた真名を『ラドクリフ＝シユヴァイサー』と言つ。青い『リュックサック』と言つ背負い鞄を模した骨董品を背負つた黒いぬいぐるみのような外見を持つPM。

特徴は思春期に患う病気からくる独特の語彙力。

極めつけに言語機能を切れば即座に全機能に異常をきたす致命的なバグと、PMデバイスの上書き防止機能と言つありがたくない特典付だ。

閑話休題。

エミリアとバスクが爆笑し続けても仕事にはならないので、彼女達を黙らせ仕事を再開させる事にした。そしてその道中、私とエミリアがレリクスの仕様について話し合い、あの男と戦った広間でスヴァルティアと言う斧を持つた巨大な人型スタリティア……炎魔竜を封じていたモノと同型の敵が襲い掛かつて来るのに対して戦闘を開始する。

「くつー！」

私は手にしたシールドでタイミングよく防御してスヴァルティアが行つた攻撃の余波を跳ね返し、すかさず懐に入つて胴体部に傷を作らせる。

『はあつー！』

『ここを超えて待つのは……未知なる強さの世界ーー！　コスマック・ソウル・レボリューションツツーー！』

バスクがドリルの突いたナックルで傷口を抉り、ラドルが手にしたソードで真上から両断する。

「とどめえーー！」

エミリアが最後の一発と言わんばかりにフォイエをロッドから放つ。傷口から炎が進入し、スヴァルティアが斧を取りこぼして甲高

い音を発すると、膝を屈して地面に倒れこんだ。

「よしH//リア、お前はM A W社の調査チームを呼んでくれ。
後護衛にラドルをつけておく」

「うん。わかつた」

『フツ……光を消さぬのも俺の役目か……承知したぞマイマスター』

一』

笑いをこらえたエミリアとラドルは来た道を戻つていき、彼女らが見えなくなつたところで私はスタリティアの残骸を見据えて考える。

「やはり……手緩いな……」

そう思つてしまつのは、やはりあの時の炎魔竜との細剣を放つた男との戦いのせいなのだろう。確かにスヴァルティアも普通の傭兵が戦うにしては強敵だったが、どうしても見劣りしてしまうのだ。

『……ギュスター、やはりお前もそう思つたか』

バスクも私の言葉の真意に感づいたのか顔をこちらに向けて話しこむ。

「攻撃は斧を振り下ろす、斧を掲げて飛び掛る、突進する、斧を突き刺して地震を起こし雷光を放つ……コレぐらいしか思い浮かばんな……」

それでもエミリアにとつては脅威だ。先日聞いた話だが、1日で逃げ出したとは言え彼女はクノーによる鍛錬を行つており基礎は出来ていると聞いた。

「とは言え、だ……」

私は一枚のカードの事を思い出して考える。それは言つまでも無く炎魔竜ことレッド・デーモンズ・ドラゴンの事だ。

あのカードはこの海底レリクスで私が入手したカードであり、デュエルモンスターズの製造や販売を担っている一社でもあるM A W社のデータベースにもそのカードの名は載つていなかつた。まさかと思い蔑称であろうと思いたい『250円竜』と言つ名称で調べても当たりもしなかつた事に胸をなでおろしたのはココだけの話だ。

だと言つのに、あの男は炎魔竜の事を知つていた。それだけではない、エミリアですら自覚していなかつたミカの事まで知つていただ。

情報通にしては異常な情報の質、……一体何者なのだろうか？

『あの男の事で何か考えていたのか』

バスクがそう言つと私は頷く。私は手にしたカードの事やエミリアの事を話すと、バスクもそうかと言つて私に情報を話した。

『ああ……お前と同じく面識こそ無いが、奴は俺やクラウチの事まで知つていたからな……クラウチはともかく俺は傭兵としては無名だが、お前は『三騎士』として有名だつたはずだろ？』

一応そうなつていいようだ。私もその事を知つたのはS E E D事変の後でありレオンがその件でからかっていた事は覚えている。

……一度と二騎士時代の衣装を身に纏うと言つ意思は無いがな。

『気にならないか？ リトルウイングを取り仕切つているクラウ

チはもちろん、無名の傭兵である俺にエミリアの事は知っていたが……都市伝説にもなつていた『三騎士』であるお前は知られていないかつた事に』

その言葉に私は息を飲んだ。確かにあの男が情報通なら私や『三騎士』の事を知っていてもおかしくは無い筈だが何も答えなかつた。

「……言われてみれば気になるが……」

いくら伝説とは言え、英雄・イーサン＝ウェーバーに比べたら私たちの名は露んでしまう。

何しろ最初にH.I.V.E.に突入してそれを殲滅、続けて前総裁暗殺未遂に極め付けが幻視の巫女との恋愛劇だ。比較対象を間違つている。

「別に私を知らないでもおかしくは無いだろ？　言つてはなんだが、やつてきた事はM.A.W社付近のS.E.E.Dを浄化していつたり、犯罪者の取締りぐらいだ」

『……確かにそうだがな……』

バスクも腑に落ちない表情を浮かべ、暇つぶしと言わんばかりに私たちは広間を散策する。その途中で異臭がしたので発生源を調べてみると、見覚えのある赤いコートと紫色の髪をした男がうつ伏せになつて倒れていた。

「む……」

「コイツに実質致命傷を負わされたのは記憶に新しいので細剣で足の裏あたりを突いてみても反応が見られない。思わず“それ”に近づいてみたが、私は思わず口元を手で覆い表情を顰めてしまった。

何故なら男の身体は何故か腐つており、目のあつた所は既に穴だけになつており、鼻もつぶれていた。よく見れば所々が何らかの原生生物に喰われた痕があり、腕に至つては骨までも見える始末。

最早生死を疑うまでもない。心臓を貫いても死ななかつた男が、何故この様な形で死んでいるのか……後でミ力に聞く必要が出来てしまつたな。

「……」

よく見てみれば周囲には蠅らしきものが飛び交い、蛆も右目の下から湧いており傭兵業をやつしていくもきついものはきつい。吐き気もしたから口も押さえておく。

『……大丈夫か?』

バスクも氣分が悪いのが声色が普段と違つてゐる。エミリアに見せるわけにもいかないが、タイミング悪く彼女が調査団を引き連れて戻つてしまつた。

「ただいま……あれ? どうかしたの?」

エミリアの怪訝そうな顔に対し、バスクが私に向かつてエミリアの方へ行けと首を動かす。仕方がないと言わんばかりに私は彼女らに近づいた。

「エミリアか……奥の方へ進むぞ」

「え? ロコで調査とかしないの?」

「一応ロコの安全は確保されている。私としてはロコから奥の方が気になつてるんだ」

炎魔竜のあつた広間と逆方向にあつた階段があつた場所……そこを下りるのは遭難の可能性を踏まえ断念したが次に進むのはそちらしかない。

横目で確認するとバスケットと運悪く見つけてしまった調査団のメンバーが死体の処理をし、調査団の何名かが死体を運び去つていったのが見えた。

ラドルは私の様子を見て「やれやれ」と言わんばかりのポーズを決める。正直言つてそれが腹立たしい。

「ふーん……まあいいわ」

エミリアがそんな事を言うと私たちは奥へ進む事になった。そして彼女が離れた隙にラドルがポツリと私にしか聞こえないように呟いた。

『いたいけな少女に死人の香りは相応しくない、とでも?』

「やかましい」

私はそんな事を言つていたが、調査団のリーダー格の青年がこちらへ向かつて声を上げた。

「あ……ギュスター・ヴ殿、奥へ向かうのですか？　あそこには途中で落盤が発生したのか、通路がふさがつていましたよ？」

「……何だと？」

私が彼……調査団のリーダー兼M A W社私設特務部隊の副隊長に向かつて声を上げた。今回の調査団は殆どが以前私が所属していた部隊の隊員であり、私の部下だった連中だ。

「ええ。貴方が所有していたデータを元に散策していましたが……

…途中の分岐路で何らかの戦闘行為があつたのか戦闘行為による落盤で道がふさがっていました」

それを聞き私といつの間にかここにいたバスクもあきれ返った表情をした。レリクスで破壊行為に及ぶ阿呆がいたとは驚きだつただ。

「現在左の通路を中心に発掘作業を再開していますが……どちらにせよコレで貴方方の依頼は終了となります」

これ以上無理強いしても反感を買うだけ、か。今私はM A W社の私設特務部隊長ではなくリトルウイングの……それも新人傭兵なのだからな。

「了解した。では終了手続きを取りたい」

「それは地上に出てからお願ひします。今回は弊社のグラディウスの好意でホテルを用意しておりますので、そこでお休みになられてください」

部下であった男がそう言うと我々はホテルへと向かつ事になつた。エミリアはホテルに泊まれることを喜んでいたが、その道中で彼は私に向かつてエミリアには聞こえないよう謝罪した。

「申し訳ありません隊長……」

「……気にするな。今私は一介の傭兵であり、お前達への指揮権は無い……今はお前が部隊長なんだぞ?」

「いえ……時が来れば直ぐにお返ししますよ」

そんな会話を交わしながら私たちは転送装置で地上へと向かつた。

そして地上……M A W社のお膝元でもある『フィランディア・シティ』の高級ホテルの一室にて私はエミリア……正確に言えば私の部屋に遊びに来た彼女が眠りこけ、代わりに姿を現したミ力に対して問い合わせた。

「あの男が死んだ原因について何かわかるか？」

『貴方の話では彼は不死身だと言いましたね……もしかしたらですが、それは肉体に限つてはと言つ場合かもしません』

彼女が言つには精神の不死と肉体の不死……そして不老は全くの別物であると言つ考えだ。現にミ力の肉体は滅んだが精神はこうして今も現存しているため納得がいく仮説だ。

ふと頭によぎったパルムに伝わる昔話の一つに神に対して死なない身体を要求した男の話を彼女に教える。

それは遙か遠いところのお話

美しい女神を罠に嵌めて捕まえた王様は『一度だけ願いが叶えてやるから私を汚すな』と言う彼女の話を聞き、「傷を負つても病を持つても死ぬ事のない体にしろ」と願つて神はそれを躊躇いも無く承諾する。

男は歓喜し欲望の限りを尽くしたが、ふと手を見据えると皺だらけになつている自分の手を見てしまう。慌てた男は女神を呼び出し、

自分の身体が老いていく事を問いただしたが彼女はこう言った。

『お前が願つたのは「死ぬ事のない身体」であり、「老いる事のない身体」とは聞いてない』と。

その証拠にと女神は鏡を差し出して皺だらけになつた男の顔を見せ付け、男は醜くなつた自分の顔に絶望してしまう。命を絶とうとするが死なない身体のため死ぬ事ができない……『壊れる事の無い心』を渴望していなかつたためか心が壊れ考える事を止めて肉体はそのまま残り見世物にされ続けたが、徐々に腐つていき不快に思つた人々に燃やされたと言う。

『肉体の不老不死と精神の不死ですか……それらもかつては旧文明では研究されていたものです。恐らく貴方が知つてはいる死なない王様の話も私達の研究の内容が漏れてしまい、その研究を良しとなかつた方々が戒めのための話としたのでしょうかね』

「ふむ……」

『それと実はあの子が願つたプログラムは、敵対者に対する緊急迎撃用のプログラムでもあるので敵意を持つた存在を1人残さず消滅させる事が出来るのです。ですが不死の肉体を持っていたのであれば、肉体は滅びず精神だけが滅んでしまったのではないか……そして精神が滅び不死の契約が途切れたのではないかと私は考えているのです』

精神が滅んだだけで肉体が腐敗していくのはあるのか、と言う疑問もあつたが彼女が言うように不死の契約も精神が壊れた事によつて契約とやらが破棄されたのかどうかはわからない。だが1つだけ解る事がある。

「あの男は“死んだ”……一度と復活する事は無い……」

その単純なまでの事実……それだけだ。まあ、かつて死んだ私が

言つのもおかしな話だが……あれで復活したら今度こそ我々異能者の手で処分するしか道は無く、今の私には彼らを指揮する事など出来ないから上に任せておくしかない。

「まあ、その話はもういいだろう。それでもう一つ聞きたいことがある……お前はあいつの事を知っているのか?」

『…………いえ、今の彼らと接点を持つた事はありません。その者肉体を乗つ取つてしているのではないかと考えた事もあったのですが、感じられた気配は一つだけ……それにグラールに残った旧文明人の大半は私と同じ考え方を持つているのです……』

SEEDや敵対していた側に恨みを持つてゐる者を除いて、ですが……彼女はそう締めぐぐる。

「となると……ますますわからん」

バスクやクラウチの事を知つており、ミカや彼女がエミリアに憑いている事をあの男が知つていたのは何故だらうか?

そう考へてゐるついでにミカの身体が消滅し、入れ替わりにエミリアが目を覚ました。

「ん~……ベッドがふかふかで気持ちよかつたな……」

「…………第一声がそれかエミリア」

私は呆ながら彼女に向かつてそう言つてやつた。

その翌日……私たちはフィラントシア・シティの一角にあるショッピングモールを中心に散策していた。

理由は観光……フィラントシア・シティはM A W社の本社がある都市でありダグオラ・シティと比べると小規模だが、店は並んでいる方だ。

身も蓋もない話だが、本来私達の依頼はある海底レリクスの奥深くまで調査する事だったのだが先の通行止めの影響もあってキャンセルになってしまった。

その結果、埋め合わせの為にフィラントシア・シティの高級ホテルに泊り込み、今日は観光するためにここに来ているのだ。

とは言え、フィランティア・ショッピングモールは現在資源枯渇の影響もあって閉じている店が多く、残った店も何とか常連のおかげで営業できているという有様だ。

「まあ、最大の原因は資源枯渇なんかじゃないんだけどなあ……」

本日の副隊長は非番であり、服も私設特務部隊の制服ではなくジャケットにジーンズと言つ完全な休日スタイルだ。言葉遣いも素の口調となっている。

『最大の原因？　それは一体なんだ？』

「……君たちに文句言つてもしようがないがな……フィラントシア・ステーションに俗に言つ駅ビルが建つちまつたんだ……それで客足が遠のいてしまつたんだよ……」

「本当にあたし達に文句言つてもしようがないじゃない……」

各地を移動し、今はミュージックストアで買い物しているエミコ

アが言うが、その代わりと言わんばかりに私が言葉を進めた。

「最大の原因の駅ビル……そのオーナーがスカイクラッド社なんだがな……」

「スカイクラッド社って……うちの親会社じゃん！？」

『それは文句の一つや二つも言いたくなるな……』

私の暴露にエミリアは唖然とし、バスクも顔を抑える。まあ品揃えも豊富であり、値段も手が届く値段……どちらに流れるかは自然の理だ。

『まあこう言つた寂れた商店街に掘り出し物があるのはよくある事だし悪い事だけではないぞ？俺の手に量産品と言つ言葉は似合わないし、それなりの“格”は欲しいからな……』

「はーいラドルくん、痛い事言わないでねー。ぶっちゃけフランディア・ショッピングモールが寂れて大変な事になるのってM AW社だからねー」

本当に色々な意味で困るからな……とは言え、先程さらりと重要な秘密を言つてしまつたなコイツ……

「？ 確かフランディア・シティにはデパートとかあるんでしょ？ そこは潰れても大丈夫なの？」

早速食いついてきた。まあ、こういった事態の為に表向きの理由は既に用意してあるから問題ないが……

「大丈夫なわけが無いだろ。デパートで使えるポイントはショッピングモールで手に入るんだ」

『ふむ……とは言え我々が止めてくれと言つたところでな……』

エミリアの疑問に私が答え、バスクが今の現状を考える。とは言え止めると言つたところで関係が悪化するだけだ。

「流石にそこまでしてもらつ事は無いわ。大体MAW社はスカイクラッシュと喧嘩売るビービージャ無いんだしな……」

まだトラブルが解決していないからな……先代め、身内のゴタゴタで隠居したくなつたのはわかるが、後始末だけでもやつてくれ……

…

「まあ、後は俺らで解決しますしね……けど、そろそろ時間が……」

そう言つて副隊長が私に腕時計を見せる。一応会社の依頼と言つ事にしてあるし、既に外泊すると言つ報告はしてあるが、限度と言うものもある。

「そうか……そろそろ戻るぞ、エミリア」

「待つて……今メセタ払つてるから……」

確かに今エミリアは会計を行つてゐる最中だ。私も流れている曲を聴き、聞き覚えのある声を聴く。

激しい曲調に歌詞、ドラムやギターの奏でるロック。私が好んで聞く人々を静めるクラシックとは対極となる人々を熱狂させる曲だ。

「ふむ……」

しばらく聞き入つていたが、エミリアがこちらへ戻つてくると私も店を出る事にした。

『 やはつ俺にほーじこつた曲は合わなーいな……やはつこつ、何か
を呼び出さんとする曲の方が……』

ラドル、いい加減お前は黙つてろ。

後日談と観光と邪氣眼と（後書き）

瞬様を見習つて今回からキャラや作品に関する質問及び“敵側の”転生者を受け付けます。

実は敵側の転生者もネタが尽きたうので自分が「こ れ は ひ
ど い」と言いたくなるような奴をお願いします（遊戯王をクロ
スさせた時点である意味トーンでもキャラになつたりやつたのが1名…
…）。

敵以外と指定した場合は、問答無用でモブキャラもしくは外伝キャラ
ラ（どっちかって言つと口常変）にまわしますのでご容赦を。

また採用不採用は作品で発表しますのでご容赦を。
ではまた次回。

デジフォンに用語が更新されました。
ネタバレになりますのでストーリーをお読みになつてからこの項目をお読みください。

また、原作で出てきた人物や用語については割愛しますのでご了承ください。

【人物】

ギュスター・ヴ＝ウインストン

この物語の主人公。20歳。

パルムに本社を置くアミューズメントを中心とした総合会社であるM A W社の社員でもあり私設特務部隊の隊長を勤めている。

SEED事変では仲間と共に自警団『三騎士』を結成し、3人しかいない戦闘メンバーの一員を担っていた。

旧文明の研究が趣味で、SEED事変前までは旧文明テクノロジーの研究を主にしてきた。

服装はエスプレンドスカラー（黒地）を用いていたが海底レリクスでの戦いでズタズタにされて以来、リトルウイングにてCUBI C STAR製の新製品・パーティシュージャケットを譲つてもらいそれを着ている。

グラディウス＝ウインストン

ギュスター・ヴの実兄でMAW社代表取締役。37歳。

決闘中の問題になっていたデュエルディスクから投影された鮮明すぎる実体化の対策に身を乗り出し、ディスクから情報を擬似的なVR空間でのみ実体化させそれを視認するための装置『VRゲイザー』を開発に成功した。

服装はエスプレンドスカラーをより豪奢にしたもの。

M A W社

パルムに本社を置くアニメーションを中心とした総合企業。元々は軍事企業だったがカードゲーム「デュエルモンスターZ」をプレイするための装置である「デュエルディスク」を開発して以来、アニメーション事業に転向していった。

またデュエルモンスターZ販促アニメである「遊戯皇」シリーズを製作しているアニメ製作会社等多くの子会社を持っている。

『三騎士』

SEED事変の際、M A W社に組織された自警団。

本来『三騎士』とは戦闘を行っていた3人の総称だったが、それがそのまま組織名として浸透していった。

SEED事変が終結してからは活動も縮小化し、ウォザーブルグ動乱にて2人が行方不明になつたのを切欠に自然消滅した。

【技術】

デュエルモンスターZ

グラール規模でブームとなつてゐるカードゲーム。

かつては知る人ぞ知るカードゲームだつたが、MAW社がVRを用いた投影システム搭載型の装置『デュエルディスク』を開発させて以来ブームとなつた。

一説によると旧文明で行われた儀式がこれに似ていると言う記述はあるが、SEED事変の影響もあり資料が少ないため学会から重視されていない。

【旧文明】

“旧王”

かつてグラールを支配していた旧文明の王の一人。

独裁を強いていたがそれを憂いた“新王”が革命を起こし王位を追われた。

だが“新王”が王位についた途端、自分以上の独裁を行つたため自分を中心とする反抗勢力が生まれた。

SEED事変時に“新王”と相打つ形で死亡している。

“新王”

かつてグラールを支配していた旧文明の王の一人。

独裁をしていた“旧王”を廢立させたものの、今度は自分が旧王

以上の独裁を行つた。

故に“旧王”を立てた反抗勢力と戦い、SEED事変が起きた中でもそれは続いた。

彼もまた敵であった“旧王”と相打つ形で死亡している。

【異能者】

異能者

かつて旧文明で悪しき神々を封じたり祭りを盛り上げたりしたヒト達。

今では『デュエルモンスター』に描かれた魔物や魔術に罠を駆使して戦いを行う存在もあるがその数は極僅か。

500年戦争の際はパルムを陰で操ると言われていており、ウォザーブルグを本拠として活動していたが数の差で真っ先に敗れた勢力となってしまい、『異能者狩り』と言う事態を招いてしまう。

今では知るヒトも殆どおらず、異能者たちもそれを隠して生活しているため表舞台に出る事は殆ど無い。

【武器】

リゾネーター
シャドウーグ

クバラ製・5・B

M A W社製のものであり、『デュエルモンスターズのモンスター』
ダーク・リゾネーター』を模したシャドウーグ。
極稀に「リゾ～」と鳴いている光景が見られる。

『細剣』（正式名称不明）

セイバー

クバラ製？・13・S

海底レリクスでギュスター・ヴを襲つた男が弾丸の様に放つた武器
の一つ。

ギュスター・ヴの腕を射抜いたが、彼が召喚したダーク・リゾネー
ターの尽力により引き抜かれた際、武器を失っていた彼によつて利
用される。

クラウチによつて救助された際、彼によつてこじつけに等しい理
論で所有権を押し付けられた。

それ以来異能を使わぬ状態のギュスター・ヴの主武装になりつ
ある。

形は騎士達が使うようなエストックの様な形をしており、貴族の
ような風貌を持つたギュスター・ヴに似合つた武器となつてゐる。

また彼を襲つた男はこの武器の事を『宝具』と呼んでいたが……？

【ヒネミー】

レッド・テーモンズ・ドラゴン

海底レリクスに封印されていた竜。

その腕はあらゆる守りも打ち砕き、冷たき氷をも溶かす。

紫髪の男

クラウチの過去を知っていたヒューマン。

不死身の肉体を持ち、武器を弾丸の様に撃つ力を利用してギュスターヴを殺そうとした。

用語集その1（後書き）

これからは章の終わり「」と「」の様な用語集を追加していく予定。
入れない方がいいと言つ方はぜひ掲示板の方へ来てください。

借金取り（前書き）

漸くメインで活躍するｅ・９９０ー作品のキャラクタを出せぬ
コレで、ギュスター・ヴの出身も分かるかも！？

借錢取り

夢を見ている

それはまだＳＥＥＤ事変の時、まだ『三騎士』を結成する前のこと……

その日、私は他の異能者達と酒場でＳＥＥＤを退けた祝賀会に参加し、皆が酔いつぶれるなり疲れるなりして寝静まつた時の事だつた。

沈黙が支配する闇の中に悲しげな旋律が響く。その音に目を覚ます羽目になつた私は発生源となつている外へ出向きしばらく歩くと壁に寄りかかつていて白髪の男性ヒューマン……仲間の一人であつたアスカを見つける。

彼の近くにあるのは今宵の戦いで死に浄化された人間達の……異能者も傭兵も巻き込まれただけの人間が眠る簡素な墓場でもあつた。さしづめ今流れている曲はアスカが死した者達へ捧げる鎮魂歌といつたところか。

曲が終わり、アスカがハーモニカから口を離すと漸く私の存在に気付いたのか驚いたような表情をした。

「ギュスター・ヴ……」

「意外だな……お前にこの様な特技があつたとはな……」

私が覚えている限り、ＳＥＥＤ事変が起きる前のアスカは我が一族の女性に懼る呪いを解くための研究を中心に自分の身体を鍛えるための鍛錬、カール達と共に行動していたか彼らにせがまれてデュエルに付き合つていたかのいずれかしかなかつた。

そんな彼がハーモニカを吹けるという意外な特技があつた事に私

は驚いた。とは言え彼は私の方を見ずに淡々と言葉を紡ぐ。

「別に……ただガキの頃よく吹いてただけだ……」この曲だつて姉さんがよくフルートで吹いてたから覚えてただけだ。俺の作った曲じゃねえ」

「それでもな……私から見ればお前は無愛想な人間だからな……」

「テメエから見た俺の事情なんぞどうでもいいじゃねえか」

そう言つとアスカは私と墓場から遠ざかる。私が彼を呼びとめようとしたが、彼を手を振つただけだ。

「……興が冷めた、俺は寝させてもらうぜ。ホントは研究に費やしたいが明日も明後日もＳＥＥＤと戦うんじゃ出来ねえしょ……」

そう言つて彼が去ると、私は墓場を見る。その場には玩具やぬいぐるみ、酒の瓶に花束など統一されてない供え物が何故か置かれてあつた。

我々が作つたときには何も置かれてなかつたし、アスカは宴会にも参加しなかつた。よく見れば近くにはカールが眠りこけている姿もあつた。

「……」

「ココで寝ていたら風邪を引くぞ。そう思いながら私はカールを担いでアスカの後を追つた……」

田を覚ますとそこはリトルウイニングから』『えられたマイルームであり、ラドルはビジフォンで何やら調べ物をしていた。本人曰く電子子の海を漂いながら人魚と戯れているとのことらしい。

『眠りの神からの呪縛から解放されたかマイマスター。俺が電子の海に住まう人魚から聞いた情報を知りたいか?』

「……」

普段なら（その言葉遣いが原因で）一蹴するが、今日は夢の影響もあつたのか仲間の情報が得られるかもしれない。そう思つて私はラドルに続けると促す。

『……一番興味深かつたのは妙な石を集める少女の話だな』

現実は非情だった……行方不明の仲間とは関係ない話だったからだ。しかもその話題はこいつが一番好みそうなレベルの話だったのもあって頭を抱え込む羽目になつた。

『その石を見た者の話だと何か闇の力を手に入れられそうだとか、集めている少女は見えない何かと会話していたとか、俺の魂を揺さぶる何かを感じ取った……』

期待した私が馬鹿だったということか。既に興味を失つた私はベッドから立ち上がりつてリトルウイニングの管轄区へと赴いた。

『待て待て待て!! マイマスターも男だろ? その女掲示板で

話題になつてたぞ！－ 頭写真希望とか着やせしてるとか胸がでかいとか』

『

私は近づいてきたラドルを掴み上げるとベッドに向けて投げつける。そして私は振り向きもせずに部屋から出て行つた。

期待はずれのラドルの発言に私は頭を抑えながら管轄区へ行く。前回海底レリクスの再調査に赴いたり、その後でディ・ラガンの討伐も行いエミリアに経験を積ませる事に成功した。

それでも『三騎士』や『三騎士』以前の所属部隊であつた『虹レーベンボルグ』に比べたらまだだと言つレベルだが、自分たちとは戦い方が違うのだからしようがないと言つたところだ。

「……ん？」

落ち込んだエミリアが私の横を横切る。私が声をかけると彼女は再び溜息を吐いた。

「あー、ギュスター・ヴ……？ どうかしたの？」

「ラドルが変なネタを掴んできただけだ……お前にそぞつかしたのか？」

「ん……」

Hミリアの話を聞くとこうだ。朝起きたら通信ログが入つてて、開いてみるとその相手はクラウチ行きつけの飲み屋だったのだ。どうやらツケで払っていたらしく、いい加減今月分のツケを払えとの事。

「家からの転送通信はツケの催促とかココ最近多くなつてきた変質者からの電話ばかりだし……あたしに働けとか言うけどおっさんだつて昼間から酒飲んでばかりだし……バリバリ働けとか言わないからせめて人並みの常識とか身に着けてほしいよ。……」

エミリアの口からはクラウチへの怒りのみ。バスクが『ここにいる以上ただの酔っ払いではない』と擁護していたが、どうも怪しくなってきた。この前の海底レリクスで戦った男が死体で発見されたと報告したら、終業後バスクと共に宴会までやる始末だ。

「で、あんたが不機嫌だった理由は？」
「ラドルが変な情報を拾ってきた」

そう言つとエミリアも納得したのか、ちらりと向けて同情するよつてな目で見据えてきた。

「…………まあいい。わざわざクラウチの所へ向かつた
「そだね…………」「

お互い足取り重くリトルウイングの事務所までたどり着くと、チ
エルシーがニュース番組を見ていたところだった。

『着工より一年。先月、ついに完成した亜空間発生装置の完成式典がパルムの同盟軍本部で行われました』

亜空間発生装置が漸く完成したのか……あの研究には兄上も出資していたな。本来遊戯皇の映画に回されるはずだった予算をほぼ全額そちらに回した程優先していた。

その映画も元となつたアニメが監督と脚本が好き勝手やつてくれた結果、これはひどいと言わんばかりに滑つたから予算がだいぶ余つたと聞いた。

それにしても……

『式には、亜空間理論を確立した総合科学企業インヘルト社のナツメ・シュウ代表取締役をはじめ、開発に加わつた軍関係者や多くの企業が参加しました。今回披露されたこの装置により亜空間発生実験が成功すれば、有人での亜空間航行計画へと大きく前進することになります。現在グラークが抱える資源枯渇問題に光明をもたらすこの研究、絶対に成功してもらいたいのですね』

インヘルト社か……懐かしい名前を聞いたな。昔はよく社交界と一緒に行つていて、ナツメ代表と先代が話しているところを私たちは遠目で見ていただけだつたな。そう言えば、ここ最近アイツとは疎遠になつてきていた……

『ノー！　ニユースそれで終わりナノ？　納得いかないヨー！』

！』

チエルシーの叫び声に私はハツとなり、エミリアも驚いた表情で彼女を見つめた。テレビの方はスポーツやデュエルモンスターズの話題になり、亜空間研究の話題は終わつた様だ。

「なんでいきなり怒つてるの、チエルシー？」

『エミリアー、今のニユーススカイクラッド社の名前が出てない

ネ！！ 亜空間航行の計画にイッパイ出資してんのだヨ！！ ウチのいい宣伝にナルと思ってたのニー！！』

「スカイクラウド社はウチの本社じゃん。リトルウイングの宣伝にはならないって」

どちらにしてもMAW社も多額の出費をしているのだが名前すら出てなかつたんだがな、と思つたがそれをここで言つのは憚られた。大体GRM社も出でていなんだから我慢してくれ。

今や亜空間研究のための出費はある種のステータスとなつており、どれぐらい出したかで権利を得られるのか躍起になつてゐる事業が多いのだ。

『次のニュースです。近年デュエルモンスターZ界存続の危機の元凶だつたデュエルディスクから投影される鮮明すぎた実体化映像、それを解決させるための装置が開発されました。デュエルディスクを開発したアミューズメント事業の最大手MAW社のグラディウス『ウインストン代表取締役との会見です』

「よかつた……何とか開発に成功したみたいだな」

亜空間研究も重要だが、やはりMAW社の人間として近年の技術の進歩による投影映像の鮮明化は問題視されていた。突然現れたモンスターによつて運転を誤つて事故を起こした人間もあり、中には死傷者まで出る始末。

SEED事変のお陰で矢面に出される事は無かつたが、それでもデュエルディスクを開発した身としては起こした事の重大さと責任に押しつぶされた。故に一時期予算の大部分をその解決策に割いたのだ。

その甲斐もあつて遂に開発に成功したと言つ事はMAW社を離れている身としても嬉しい限りだ。自然と私の表情も明るくなる。異能者の問題だけでなくこういった事業もまた我々の役目でも在るのである。

だから。

会見場に舞台が移つたのか、グラディウス＝ウインストン……兄上が右目付近にバイザーのようなものを身に着けて笑みを浮かべながら会見に応じている。

『ええ、今回弊社が開発したのはデュエルディスクから得た映像データを擬似的なVR空間に映し出し、造られたVR空間を視認するための装置です。私はそれを『VRゲイザー』と名づけました』

映し出されるのは指で突付けかれている片目を覆うデザイン性を重視したバイザーの様な装置だった。様々なデザインが映し出され、単純な擬似VR空間の説明に入っている。

『後蛇足ですが、くれぐれも運転中のVRゲイザーの使用はお止めください。何しろ今度はこれが原因で事故が起きた、などと言わっても責任は問いかねますのであらかじめご了承を』

兄の苦笑じみた声を会見場に記者達の笑い声が支配する。更に兄が何やら言葉を続けようとしたところで

『ク・ヤ・シイ~~~~~!!』

チエルシーが声を張り上げながらリモコンを操作してテレビの電源を切つた。極めつけにハンカチーフを口に含んで噛みながら引つ張る芸当まで見せた。

『M A W社はデュエルモンスターZやら『デュエルディスクやら今のがVRゲイサーやらで、利益も話題もインヘルト社を除いて独り占めだよ!? しかも今やデュエルモンスターZどころかアミコーズメント界はあいつ等の天下だつて話ネ!!!』

「それでも、亜空間研究の件は表に出されていないわけだから条件はイーブンだと思うが……」

『ギュスウ！－！アナタはどっちの味方ナノヨー！－！それでもリトルウイングの社員ナノー！－？』

一応私はM A W社の人間なんだが……と言つよりチエルシー、お前もその件については知つてゐるはずだが！？

「ともかくチエルシー！－！おっさんいるー！－？」

Hミリアが声を張り上げたのを機に私は渡りに船とばかりに声を上げる。

「そうだったな。チエルシー、Hミリアがクラウチに用があるとの事だつたが……」

流石にチエルシーも私情を挟むわけには行かなかつたのか、泣きながら私たちに声を上げた。

『オウ……そう言えればシャツチヨサンが2人に用があるつて言つてたネ……ショッキングなニュースのせいですつかり忘れてた円……』

「あんまりショッキングでも無かつたけど……まあ、いいわ。おっさんは奥にいるんだつたよね」

Hミリアと共に奥に行こうとした私達。するとそこへ

『お二人さん、シャツチヨサンのといひへ行くならつこでにコレもお願ひね』

チルシーに渡されたのは電子媒体の……領収書？

「……『フランジエリースポット、リッチベルベルト、ダグオラ・シティ店』……？」

私が読み上げるとヒコアが露骨に嫌そうな表情をした。気持ちは分かるので私も表情を変えよつとはしない。

「……ねえチルシー……」のびのび見てもいかがわしいお店の領収書って……なに？」

『経費じや落ちないカラ白腹ダコヒテ伝えてネ！』

その言葉に対してもヒコアの表情が強張った。私の手元に領収書が無ければ彼女が握りつぶしていたかも知れない。

「あのヒロオヤジ……ツケの払い忘れだけじゃ飽き足らぬ経費の無駄遣いまでするか……」

遂にヒコアが吼えた。私もチルシーも気持ちは分かるので反論しないが口で呴えても仕方がないだらう。

「とにかく行くぞヒコア」

私の声に渋々と彼女はついて行く事になった。とは言えあれほどクラウチの悪口を言ったのならば反応の一つや二つを返してもおかしくないはずだが……

「うわっー！ 酒臭つー！」

……なるほど。理由はコレか。要するに酔いつぶれていた、と。

「……起きる。私は酔っ払いに敬語を使ひ『気は無いからな』

怒りを込めて声を上げる。口で辞表を叩きつけても文句は言わせないが、同時にエミコアを鍛え上げる依頼も放棄する事になるからな……

「……よお、来たか」

右手には酒瓶、足元には缶ビール。どう見ても酔っ払いスタイルに私は怒りを覚えた。バスケめ、コレでただの酔っ払いじゃないとどの口がほぞくか……！

「来たか、じゃないっての！――いつもの飲み屋からまた電話が来たんだよ！――いい加減ツケを払えって！」

「後はコレだ。経費じゃ落せないから自腹を切れ、との事だ」

私の言葉に対しても理解する力はあったのか、私に向かつて反論した。

「なんだ、コレは資料とか根回しどの経費じゃねえか」「どう見ても乱行の見本市じゃない！――落ちない理由も常識的に考えろっての……」

「全くだ……」

よくコレで倒産しないな……口で勤めて不安になってきたぞ。

「ま、んなこたどうでもいい、後で俺の貯金から払つてやるよ……つと、本題行くぜ」

その言葉に對して私の表情も真剣になる。クラウチも真剣な表情で私達に向けて声を上げた。

「コイツは緊急かつ重要な依頼だ。急ぎ探して欲しいヤツがいる真剣な表情から先程の酔っ払いの顔は見えない。エミリアも真剣な表情で彼に向けて声を上げる。

「人の搜索……？ 重要参考人とか、要人とか？」

「あるいは指名手配の犯罪者か、何らかの密売人か……」

エミリアと私が各自仮説を組むが、当のクラウチが笑みを浮かべながら声を上げた。

「ギュスの方が近いな。何しろそいつは俺が前に金を貸したヤツでな、借金踏み倒そうとしている極悪人だからよ」

その答えに対しても私もエミリアも脱力してしまった。先程までの空気が空気だつただけにあまりのギャップに耐えられなくなってしまったのだ。

「ようするに依頼主おっさんじやん！！ そんなの自分で探しに行け！！」

「やかましい！！ あの海底レリクスでの「ゴタゴタ以来、ウチにろくな仕事が回つてこねえんだよ！！」

「ぐ……」

まあ、借金の取立てならエミリアでも何とかなるかと言つた所か

……

「で、その極悪人の情報はなんなんだ？」

皮肉を込めて私が言うとクラウチも忘れてたと言わんばかりに映し出していた水着姿の女性写真を最小化していき、厳ついビーストの男の写真を映し出させる。

「検索対象者は『フレリー』ココフ 51歳、種族はビーストだ。ヤツの船はモトウブのクロウドッグ地方に在ると場所が特定されている」

「場所分かつてんなら自分で行けばいいじゃない……」

Hミリアがポツリと言つたがクラウチは彼女を睨み付けて情報を話し続けた。

「シティでもカジノでもねえ、ヤツには用事が無さそうなヘンピな場所だ。まあ、居場所が分かればこっちのもんだ、さっさと取り立てに行つて来い！！」

「……了解しましたー！！ こんな酒臭い場所にいたら飲んでないのにこっちまで酔つ払つてきちゃうー！ さっさと行こギュスター、ヴー！」

Hミリアが怒り心頭な様子で事務所を出て行く。私もそれについて行こうとした時、クラウチが私を呼び止めた。

「なんのようだ……！」

クラウチが無言で紙の書類を投げてきた。それを受け取り、私の目に映るのは紙を束ねていた帯を止めていた刻印に刻まれた伝説上の獣である天馬と一角獣の合成獣。

それは忘れるはずも無い『異能者』としての我が一族の紋章、そ

してそれを意味するのは『異能者』としての一族の長からの命令書

……！

「テメエの兄貴から情報屋経由で依頼だそうだ。俺も情報屋も奴から『お前以外の奴に読ませるな』の一点張りだから封すら開けてねえよ。まあ奴が言うには依頼の場所はクロウドッグ地方だって事ぐらいだ」

私は今度こそ無言で事務所を出る。途中でエミリアが愚痴りながら私の後について行つたが、私は途中で部屋に用があると言つて戻つて行つた。

私の部屋にて、鍵を閉めた後に書類の封を開ける。封を解かれ広がった書類にはこう書かれてあつた。

『モトウブのクロウドッグ地方にて妙な力を持つた連中が屯している。あそこは文化保護地区でもあり、我々外部の人間が好き勝手に荒していく場所ではない。また異能者の可能性も高く事が露見したら五百年戦争の悲劇の一の舞を招くため“違法者”の仕業だと判断したら説得する必要は無い、優先的に処分するように』

書類をレンタルしたロツドを用いたフォイエで燃やすと私は溜息

を吐いた。クラウチは今回の借金取りを好都合と見たのか、私の任務と抱き合させで行わせようと言つのだ。

「……こう合理的な点は評価できるんだがな……」

いかんせん悪代勧誘やのんだくれ、経費や依頼の私的利用などで評価をマイナス面にまで下げてしまう。大体エミリアが巻き込まれるとは考えていなかつたのか？

『マイマスター、依頼か？』

「兄上……いや、当主からな」

気になる点はいくつかある。まずは『妙な力を持った連中』と言う言い回し。最初から『異能者』だと言い切ればいいのだが、何故この様な言い回しを……

『ふむ……俺と同じ力を持つた精霊の祝福を得た連中と言つ事かな？』

「……お前のような奴が何体もいてたまるか」

私は一瞬ラドルと同系統のPMが何体も暴れまわる姿を想像して頭を痛めた。ああ、本当に頭が痛くなる。

「……まさかな」

頭が痛くなつたついでにふと思い至るのはあの海底レリクスで戦つたあの男だ。あの男の力は我々異能者とはまた別の異質な力だつた。

しかしあの男は海底レリクスで死亡が確認され、既にこの世の人間ではない。

それを「ありえない」と言つて切り捨てる事は簡単だが、どうしてあの男の姿が頭によぎつてしまつ。

「……最悪、また異能を使わねばならないか……」

かつて炎魔竜と戦うために異能を発動させHミリアも叩撃している。しかし彼女はあの事を夢だと断言してしまつているのだ。

大体現実だと自覚すると言う事は私が一度死んだと言つ事実も自覚する事だ。とは言え、私自身の実力は異能を使つた戦いを除くとそこらの傭兵達と対して変わらない。

そうなると答えは一つしかあるまい。

「……今日はデッキを持つていひ」

そう言つて私は机の上に置いていた鍵をつけた箱に手を伸ばして指紋照合を行い、鍵を開けてデッキを取り出した。

Hミリアと合流し、マイシップを運転させる。更に彼女がこの前のミニアジックストアで買つてきた音楽を鳴らしながら運転する。この曲は近年流行している音楽グループ『Van guard』の曲なのだ。特にリーダー格の女性ボーカリストが一番人気だそうだ。曲も聞いてみたが、それは先の店で聴いたあの曲だった事を思い

出した。

閑話休題。

グラール太陽系第三惑星モトウブに到着し、目的地であるクロウドッグ地方へと船を運ぶ。そこで私たちが目にしたのは……

「な、何なのよこれーー！？」

見渡す限りの船、船、船……どこの観光プラントも顔を青くさせんばかりに屯している乗り捨てられた船の行列だった。中には迷惑にしかならないような止め方をしているものおり、酷いものだと激突しているものもある。

「船、だな……」

「おっさんへンピな場所だつて言つてたじやないーー！ 話違うわよーー！」

「ひして動くのにも一苦労だ。マイシップと言つものは思つた以上に団体がでかく、その上に乗りながら移動するのはまず不可能なのだ。大体リモート操作で動かせるので動いた時点で最悪の事態を招く……こうしている今でも最悪の事態は招く事が出来るのだが。だからこうして狭い間と間を動きながら移動するのだが……こうも乱立されたとたまつた物ではない。

「ほんな連中の中からワレリーって人を探さなきゃいけないわけえ！？ 大体おっさんの借りてたものを何であたしたちが取り立てなきゃいけないのよお！！」

「……そこは、ノーロメントで頼む……」

本当に狭いし返す言葉も見つからない。と音つよつ動くにも一

苦労だ。何度かぶつかりながら船の迷宮を抜けたと息を大きく吐く。

「あー……経費だけじゃなくて依頼まで私物化し始めてるよあの
おっさん……いい加減誰かガツンと言つてくれないかな……」

「お前から言つたらどうだ?」

かつて私が入社する際、クラウチに対して言つた皮肉を教えてや
るがエミリアは首を横に振つた。

「無駄無駄。あたしも言つたことあるけど何一つ聞いてくれなか
つたもん。それにおっさんにしてみたら、あたしつてお荷物に過ぎ
ないしれ……どうしたら言つ事聞いてくれるんだろ?」

盛大な溜息をエミリアは吐いた。とは言え、エミリアの実績は無
いに等しいからな……

「実績を作ればいい。少なくとも今回の依頼を成功させれば『タ
ダ飯喰らい』から見直す筈だが?」

「えー? そんな事でおっさんが急に態度を変えたりすると思つ
!?」

「今のまま過ごすよりはマシだと思うぞ? ナツメ代表だってや
亜空間理論と言つ実績もあってインヘルト社を有名にしたんだ」

まあ、インヘルト社は亜空間研究のみならず海底都市開発と言つ
実績もあつたんだがな……大体それを確立したのはナツメ代表の息
子であるアッシュが……

「うーん……戦うのは苦手だし、調査とかも……」

そう言つた瞬間、エミリアの空気が凍る。だが直ぐに彼女はポツ

りと言になおした。

「……調査とか堅苦しい事も嫌いだしや……」

その様子はまるで思いだしたくも無いものを思い出そうとしている雰囲気だった。とは言え、この付近に人は私達以外誰もおらず、どうしたものか……

「おい、お前達……こんなところで何してるんだ？」

子供のような声が響き、私は声がした方向に首を向ける。そして視線を下のほうに向けると、そこには浅黒い肌を持ったジュニアスクールに通うような背丈を持つた男性のビーストがいた。だが雰囲気が子供のそれとは全く違う。話で聞いた小ビーストか。

「何をしていると言われてもな……」

「人を探しに来たんだけどね……いくらなんでも船の量が異常だよ……」

Hミリアが途方にくれた様な表情をする。まあ、あれほどの船の量だから絶望しきつてしまつてしているのだ。クラウチに船の特徴は聞いたが、残念なことにありふれたデザインだったらしく特徴が見当たらないのだ。

「ああ……確かに……ココ最近船の量が多くなってきてやがるな……まあ俺達もココに来たばかりだけどよ、いくらなんでも異常だろ……」

確かに彼の言つとおりだ。いくらなんでも船の量が異常すぎる。ココで祭りでもやつてて居るのかと言つ質問にも彼は首を横に振った。

「祭りもイベントも何もなし。リイナの話だとカーシュ族つて言う連中しかいないはずだぜ？まあ、この辺りには誰もいないみたいだがな……」

「リイナ、だと？」

その名には聞き覚えがあつた。私は咄嗟に質問の声を上げた。

「一つ聞くが、そのリイナは銀髪の女性ヒューマンか？」

「いいや、俺と同じ小ビーストの女だぜ？ それに髪の色だって黒だしよ」

「ギュスター、そのリイナって人と知り合い？」

エミリアの質問に対して私は首を小さく縦に振る。まあ同名の知り合いがいたって話だし、私の知り合いと彼の連れとは別人だと言う事が分かつた。

「……お、噂をすれば来たぜ」

彼がそう言うのと同時に奥の方から女性の声、……彼の言つリイナと言う人物の声だろう、それが響いてきた。

「あ、トニオ？ そっちも2人見つけたんだ？」

姿を現したのはトニオと呼ばれた小ビーストと同じぐらいの背丈を持った女性ビーストだった。だが彼女の背後にいた少女たちを見た瞬間、私は思わず目を見開いた。

「生憎だが来たばかりの人探ししてる奴らだとよ。で、『そっちも』って事はお前も2人見つけたって事でいいのかリイナ？」

「まあ、ね……実はあたいの名前でちょっと困つてんだけだ……」

…

そう言つて頬をかく小ビーストのリイナ。彼女の言葉を合図にして彼女の後ろにいた2人組みの女性の内片方が声を上げた。

「あはは……まさか同じ名前の人人がいたなんてね……」

活発そうな雰囲気を持った金髪の少女も頬をかく。すると彼女と手を繋いでいた瓜二つの顔を持つた黒いコートを身に包んだ銀髪の少女が首を傾げながら言つた。

「リイナのなまえはリイナだよ？　でもおねえさんのはなまえもりイナだし……」

「銀髪のリイナか……そつちも尊してたら来ちまつたよ……」

彼が呆れたような溜息を吐けば、私も盛大に溜息を吐く。当然だ、本当に尊をしていたら来たのだから。

「あー、自己紹介を始めるぞ。俺はトニオ＝リマ、フリーの傭兵だ」

トニオが頭を搔きながら言つと小ビーストのリイナが声を上げた。

「一応あたいも言つておくよ。あたいはリイナ＝リマ、さつきのトニオとは夫婦で傭兵をしているんだ」

彼女に続いて私が声を上げる。残つた2人の……特に私に警戒心を持つている片方の目を気にしながら声を上げた。

「始めてまして4人とも。私はギュスター・ヴ＝ワインストンだ、しばらくの間よろしく頼む」

「あ、あたしはエミリア＝パーシヴァル。ギュスター・ヴと同じリトルウイングの傭兵です、一応……」

エミリアが言葉を濁しながら言つと最後に双子姉妹の内、金髪の方が声を上げた。

「……ま、いいわ。あたしはレイナ＝ワインバーグよ。で、この子が……」

「レイナ＝ワインバーグでーす！！！ おねえちゃんといつしょに“ ょうへい ” のじょとをしてるので、よろしくおねがいしまーす！」

レイナが言い終わらないうちに銀髪の方のレイナが手を上げて声を上げた。だが私は彼女たちの自己紹介に違和感を覚えた。

(どうこうことだ……ー?)

レイナとリイナと言う双子姉妹は私の知り合い……私と同じ異能者であり、同じ一族の人間だ。恐らくレイナも私の素性に気付いているのだろう、凄い目つきで睨んできている。

そしてそれ以上に私が困惑している理由がある。それは

(なぜ先代当主の娘達がココにいるー? いや、そこまではいい。だが……)

そう、彼女たちは先代当主の娘だ。ウォザーブルグ動乱以後一族を出奔したのは聞いているが、それ以上に私が驚愕したのは

(何故リイナがあそこまでおかしくなっているんだ！？)

そう、彼女たちも……特に銀髪のリイナの方はウォザーブルグ動乱の関係者……否、ある意味では“元凶”とも言える存在だ。

そして私は動乱以後の……カールとアスカが行方不明になつてから彼女達の事も知つていて、父親にすら牙を向ける荒れ様とコートを抱きかかえたまま動こうとしない落ち込み様は見ていられなかつた。しかも本家筋の人間しか名乗る事が許されなかつた姓を棄てワインバーグ……カールの苗字を名乗るようになつてからしばらくして、先代当主が大枚叩いて手に入れたレアカードを破り捨ててから出奔したのだ。

だが手にしたぬいぐるみで遊んで喜んでいる彼女はまるで……

(まるで何も知らない、普通の子供ではないか……！…)

私の驚愕の視線に気付きもせず、彼女はただただ人形遊びに興じていた。

同時刻

「くそつー！ くそおつー！ テメエ誰だ」

その言葉を最後に自分と同じ存在が斬り捨てられる。斬り捨てた存在はただただ何事も無かつたかのように手にした武器をこちらに向けた。

「じうなつてんだよ……遊戯王のモンスターは出でくるし、『原作』通りに炎を潜り抜けたら爆弾が爆発するし、プリン塞児は妙に強くなつてやがるしどうなつてんだよー！ ましてやテメエのようなデューマンがカーシュ族にいるなんて聞いてねえー！」

そして田の前の『異物』はこっちに向かつて襲い掛かつてくる。その手に握られているのは日本刀そのもの。無数のシャドウーグがこっちへ銃口を向け撃ち続けるわ、『原作』には無い攻撃方法の足蹴りまで繰り出してくるわ、拳句の果てには遊戯王のモンスターまで召喚するわで何が何だか分からぬ状況になりやがったー！

「ちぎりよー……チキシヨウー……」ひきこ来るなあー！

話が違つじゃねえかあのクソ神ー！ チートを好きなだけ手に入れたし二コボもナデボも常備したー！ 海底レリクスで死ぬのが嫌だつたからミカも見れるようにしたー！ なのになんてリトルワイングには入れなかつた上にココで死ななきやいけないんだよー！ 超電磁砲を当ても何一つ動じてねえー！ こんな人間いるわけねえだろー！ ぐるな、ぐるなぐるなぐるなー！

「ぐるなあああああー！」

思わず叫ぶ。だがそいつは何も動じずここにここまで来て赤黒い何かを腕に纏わせる。

そのとき初めてそいつの顔を見た。そして体が震えた。

「あ、ああ……」

白く伸ばされた髪

その前髪の隙間と千切れた包帯から見え隠れする黒一色に赤い光
が燈る眼に、生氣を感じさせない白い肌

そしてそれ以上に 黒一色に光が燈る右眼以上に禍々しく、白
い肌以上に生氣を宿していない、普通の白目と血の様に紅い左眼

それは正に『死神』その者の姿

何かが漏れた感覚がしたが、そんな事よりも赤黒い手が自分の顔
を掴み上げ、頭が痛くなつて

墮落しそう 無限獄へ……

地獄の底から響くような声がして、最後に何かが潰れるような音
が

借金取り（後書き）

……実は今回出した銀髪の方のリイナちゃんは原作とは性格が違います。

と言つより、性格を変えざるを得なかつたと言つのが正しいですね。原作の彼女は（人間不信とは言え）生真面目な性格の妹キャラでした（メインルートになればお兄ちゃんっ子に戻りますが）が……

生真面目な妹キャラと言えど、この作品では「ご愁傷様です」の対象で有名なあの子です。心を鬼にして言いますがそちらの方が知名度が高い上、登場させないと言つ事も出来ません。更にリマ夫妻も削るには惜しい上にヘイトする気もありません、最初は削る気でしたがインフィニティのタイラー登場で却下しました。

故に銀髪リイナが性格改変な上、まさかのダブリイナ登場となつてしまひました。

実はコレが一人称視点での執筆をした最大の理由……ギュスター・ヴ視点ならコイツの性格上、リイナ＝リマをリマ夫人、銀髪リイナを呼び捨てで呼ぶことが可能になるからです。

まあ、もちろんトニオやタイラーは逆にリイナ＝リマを呼び捨て、銀髪リイナをトニオは「嬢ちゃん」、タイラーは「お嬢さん」と呼ばせますが。

ではではまた次回

ところで遊戯王もクロスさせていはる以上、デュエルは入れたほうがいいのでしょうか？

- A・おい、デュエルしろよ
- B・まるで意味が分からんぞ！！

でアンケートに「ご協力ください。」では。

自然の守人（前書き）

今回は中ボス戦なのでデュエルは無し。デュエルはボス戦になる予定です。

今回はあの少年が本格登場です！！

自然の守人

驚いたな……まさかあの2人がココにいたとは……私の正体に気が付いているレイナは妹を庇いながらこちらを睨んでいるため、ろくな話も出来ない。

「ねえ……あの2人、知り合い？ 少なくともお姉さんの方は凄い顔で睨んでるけど……」

当然の事ながらエミリアが聞いてくる。まあ、これ以上隠し立てるのも気が引けるからコレぐらいはいいだろ。

「……親戚だ。彼女が凄い顔で睨んできたから思わず『始めてまして』と返したがな」

嘘は言つていない。確かに彼女も私も一族の本家筋であり、父親同士がかつて当主の座を争つた事のある相手だと言つのも事実。結果は彼女らの父親の軍配が上がり当主の座に座ることが出来た。尤も彼も自分の不始末が元凶で失脚したのだが、MAW社を発展させた功績はあるため一応悪く言つつもりは無い。

「……まあ、アンタに嘘をつく理由もメリットも無いか」

Hミリアも納得してくれたようだ。一方でレイナも彼女の妹でもあるリイナと共に、トニオとリイナ……紛らわしいからトニオの妻であるリイナは『リマ夫人』と呼ばせてもらおう、彼女らは情報交換をしていた。その会話はこんな風だ。

「あー……レイナとその妹の嬢ちゃん、あんたらは何しに来たん

だ？」

「今日は依頼抜きで観光よ。ちょっとリイナに色々なところを見せてあげたかったしね。この子、体が弱くて外で歩けるようになつたのつてつい最近なのよ」

観光……か。その動機には彼らにしてみれば嘘は無さそうだが、私から見たら不自然すぎる。

「ふーん……ま、俺達は文化保護地区の見回りを頼まれてココに来たんだよ」

「ぶんかほーじちく？」

リイナが首をかしげると同時にエミリアもどうこう事かと聞いてきた。尤もエミリアの方はそんな事聞いてないと言つ風だが、リイナの方は言葉の意味すらわかつてないと言つ風だ。

「ああ、クラウチの所から出たところで情報屋から連絡があつて、最近文化保護地区を大勢の人間が訪れていると聞いたんだ」

「へえ……」

「ああ、そいつが私以外の人間に情報を提示するなど無理を言つていたからな。クラウチも知らなかつたようだぞ？」

彼女からしてみれば『そっちを正式な依頼にすればよかつたじゃないか』と言いたいのだろうが一応フォローしておくか。

「でもさ、どっち道ちょっと変じじゃない？」
「何がだ？」

私は彼女の疑問に耳を貸す。彼女は海底レリクスでレリクスについて述べたように顎を手に乗せて自分の意見を言った。

「文化保護地区とかがある観光地にしては、その2人以外の観光客がいないつて事がや。船はいやと言つほどあるけど……」

彼女の意見に対し、女性同士の会話になつたのか輪から外れたトニオがこちらの会話に口を挟んだ。

「……なるほど、そつちの嬢ちゃんは勘は良いみたいだな」

「ああ、一応私でも驚くような事を言い出すからな……」

そんな中、会話に一区切りを終えたのかリマ夫人が声を上げた。

「やつきの子達にも言つたんだけど、これからどうするんだい？一応依頼書では『『最近気配も異様だし原生生物もやけに凶暴だつて話だよ』』

「奥で何か起つてゐつて事は間違いない、か……」

私がそつとレインも溜息をつく。一方でトニオが場を仕切るように声を上げた。

「なんにせよ、奥に進まねえと人探しも見回りも観光も出来ねえ……『』は一つ、俺たち6人でチームを組むつて言つのははどうだ？」

その言葉に対し私は考える……尤も、直ぐに回答が出てしまつたがな。Hミリアの方を見ると彼女も私と同じ意見だったのか頷きを返す。

「……いいだろ。我々リトルウイングはその提案を受け入れる」「よつしゃ決まりだな！！ レインの話じやこの奥に『カーシュ族』つて連中が住む村があるからな、まずはそこまで行くぞ」

トニオとリマ夫人、そしてレイナは喜ぶがレイナの方は表情が曇る。これから行動すると言つてその表情は印象を悪くするだけだが……

「少し待つてくれ、レイナと話がしたい」

そもそも彼女の様子と一族側に“前科”がある以上、彼女が私に対して後ろから攻撃してもおかしくない。まずは彼女の“勘違い”を解いておかないといけないな……

「良いけど早く済ませてよね」

「分かってる。行くぞレイナ、あの船の陰でいいな？」

「え？ ちょっと待つてよ……」

彼女の有無を言わざず私は適当な船の陰まで移動する。彼女も観念したのか私の後を追うのが気配で分かつた。

「……で？ 話つてなんなの？」

「まづはじめに言つておく。あの男はお前達が家を出奔した直後、兄上に当主の座を譲つた」

「へー、グラディウスさんに『あんた等のお父さんが念願だつた当主になれておめでとさん』って言つた方がいい？」

彼女が笑みを浮かべながら言つ。昔は明るいのが取り得だつたのだが、ウォザーブルグ以来よくもまあ口口までやさぐれたな……

「私が伝えておく。それと兄上は“協会”と手を切った、お前の妹にはもう興味ないから何処で暮らそうが“異能”で好き勝手しかさない限りお前の勝手だ。お前達程度の戦闘者ならば代わりはいくらいでもいるからな、いなくて困るという事は無い」

「……それはどうも。お礼に売り上げに貢献してやつてもいいわよ、一応新製品出したみたいだから帰りに買っておくれわ

「ありがとうございます。兄上も喜ぶでしょうね」

私がそう言うと彼女は声を上げた。彼女はある時以来“協会”を嫌つて……否、憎んですらいる。どちらにせよ、“協会”と完全に手を切ったのは全員一致の考えだったがな。

「で、話は口で終わり？ まあ、あんたがリイナに妙なちょっかいを出せうとしたら倒す予定だつたけど無駄になつてよかつたわ……アンタは飛鳥とカールの仲間だつたわけだし、両方の意味でね」

そう言つて彼女は右手のナノトランサーからハンドガンを取り出す。危ない危ない、真っ先に誤解を解いておいて正解だつたな。

「それとコレは傭兵としての私の勘だが……異能は直ぐに使える用意はしておけ」

その言葉には彼女も眼を見張ったのか声を張り上げて叫んだ。

「はあ！？ 異能を使える準備をしておけって……あんた本気？ いつもは『異能者狩りを避けるため無駄に使つた』とか言つてたり、勘なんてもの信用してないあんたが！？」

「SEED事変以来そういう物も馬鹿に出来ないと学んだだけで、今回は異能をそれが告げているだけだ。さて、戻るぞ」

そう言つて私は船の間を縫つて移動を三度始める。レイナも再び私の後を追おうとして

「私はレイナがどうしてああなつたのかは興味無い。お前が言いたくないのならばそれでもいい」

私がポツリと言つとレイナから緊張が解れて行くのが分かつた。最大の懸念はそこだつたという事か。

(尤も……お前の本当の目的が何なのか、ゆっくりと推理させてもらひます)

リイナは本当に観光のつもりだろうが、彼女には別の目的があるのは明らかだつた。漸く他の皆と合流できたところでエミリアが声を上げる。

「遅かつたじやないギュスター・ヴ、どうかしたの？」

「少し誤解を解いておいただけだ。私が彼女の妹を狙つていると勘違いしていたみたいだつたからな……」

おおむね事実だ。かつての一派には彼女を狙う理由もあったのは事実だが、今はどうでもいい事だ。だからこそその誤解は解いておかないとけなかつたのだ。

「ふーん……」

「……何か勘違いしてないか？」

あの顔は明らかに勘違いしている顔だつた。大方私がレイナを口説こうしていたと思つてゐるのだろうな……

「そう言えばトニオ、カーシュ族の村へはどう行けばいいか分か
るのか？」

「テメ、話逸らしやがったな……まあ、リイナが言つてはカーシ
ュ族は土地を転々と移動するから逸れた仲間が分かるように目印を
つけておくんだとよ」

「それとカーシュ族の文字についてはあたいは予め学んでいたか
らそれを元に連ればすぐさ

「リマ夫人が自信ありげにそう言つて、レイナも負けじと声を上げ
る。

「リマさん、それだったらあたしも協力するわ。結構学んできた
からね」

そう言つて彼女も立候補する。私は旧文明専攻でそういうた少数
民族の暗号は学んでこなかつたから解読役が複数いても困る事は無
い。

「……では2人とも、解読は頼んだぞ

「わかつたよ」

「りょーかい」と

そう言つて我々は森の奥へと進む事になつた。

「あつたあつた！！ これがカーシュ族の文字だよ

洞窟の壁を見据えていたリマ夫人の呼び声にエミリアとリイナが後ろから顔を覗かせる。私もしゃがんでそれを見るが、楔形文字に似た感じでありどれも一緒にしか見えない。

「わー、おもしろいかたちしてるねーーー！」

リイナは珍しい文字を見て喜んでいるが、私にしてみれば何処が面白い形のかさっぱり分からんのだがな。一方でリマ夫人とレインはそれぞれ解読しているが、メモ帳を見ながら解読しているレインよりもリマ夫人の方が早く解読できたようだ。

「旧文明の文字ならある程度分かるがな……？」

そう言った矢先、私は楔形文字を間近で見据える。この文字は何処かで見たことがある様な……だが旧文明の文字ではない、コレは一体……

「どうひでリイナ……」

エミリアが彼女達の名前を言つたのがまずかった。リマ夫人は苦笑いをしたが、リイナがエミリアの方を見て首をかしげる。

「なんだ？　エミリアおねえちゃん？」
「あー……ゴメン、間違った……」

よくよく考えればエミリアはレイナやトニオと違つて、どちらか一方の『レイナ』と親しくないのだ。それ以前にエミリアは両方とも初対面だが。

……そもそも体格的にレイナとエミリアを並べた場合、後者の方が妹にしか見えないのだが……

「どう呼べばいいんだろ……」

「エミリア、どうしたんだ？」

「」は助け舟を出すか。エミリアから簡単に質問の内容を聞き、私は声を上げる。

「リマ夫人、解読の方は？」

「済んでるよ、『炎は全てを燃やす悪魔、何も無き道は墮落の象徴、鋭い針を越えていけ』ってあるから、針のある道を進んで行けって事じゃないの？」

「とげとげしてていたそ……」

レイナが沈んだ表情をするが気にして始まらない。6人で行動してしばらくすると、三叉の分かれ道に出た。

「炎がある道に平坦な道、それに……」

レイナが指を指した先は針が出たり入ったりする罠がこれ見よがしにあつた。他にも炎が吹き出る道もあつたがそれは罠だと分かつている。

「確か針がある道に行けばいいんだよな？」
「どっちにしても悪趣味よね……」

トニオとエミリアが各自思つたことを口にする。まあ、カーシュ族は「レを越えていくのだろうから嫌がつても仕方がないのだが文句を言つても仕方が無い。

最初に私がシフタライドを飲んだ後でエミリアを連れて針を飛び越え、続けてレイナがタイミングを見計らい針が無くなつた直後にレイナの手を握つて走りぬけ、最後にトニオとリマ夫人が針が出る前に飛び越える。

その先を越えたところはやはり平坦な道筋、どうやら正解の道だつたようだ。

「……一応武器は出した方がいいと思つぞ?」

「もう? 早すぎじゃない?」

私が細剣を手にするとエミリアがそう言つが、私にしてみたらいつ襲われるか分からぬのだ。森の中は原生生物にしろ人にしろ隠れる場所に困らないからだ。

「……ま、それもそうだね」

「しゃあねえなつと」

リマ夫妻も各自得意とする武器を取り出す。トニオがヨウメイ社製のツインクローランミニサキで、リマ夫人がテノラワークス製のツインハンドガンのアルブ・ボアだ。一方でレイナも得意とするヨウメイ社製のナックル・ガレントクルを手に装着させる。

「ねえねえおねえちゃん、レイナはどうすればいいの?」

「レイナはテクニックであたしたちのサポートをよろしく!」

彼女がそう言つとレイナも何處かの玩具メーカーが売り出すようなデザイン性重視のウォンドを手にする。一方でエミリアも仕方が

ないと言わんばかりに普段から使っているクラーリタ・ヴィサスと言つロッドを手にした。

「来たかー！」

私の言葉を合図にヴァンダと言う原生生物の群れが姿を現す。ベッガと言つ同盟軍が使う小型マシナリーの様な大型昆虫の様な原生生物やリーダー格らしきヴァンダ・メラもいたが最悪の事態ではなかつたことに私は安堵の息を漏らした。

「はあっー！」

まず私が一匹のヴァンダの心臓目掛けて踏み込んで細剣で突き刺すと、トニオもランミサキでベッガの複眼を突き刺す。

続けて遠く離れたところからエミリアとリイナが氷系の初級テクニック・バータで離れたところからヴァンダの炎を相殺すると、炎を吐き出したヴァンダの横に回ったレイナが右の拳で殴つて動きを止めるとリマ夫人が撃ち倒す。

リーダー格のヴァンダ・メラについてはトニオがツインクロードで切り裂いて動きが止まつたところをリマ夫人がツインハンドガンで足止めしたところで

「ハツー！」

私が先程のヴァンダと同じように足を踏み込ませ、口の中に細剣を突き刺した。剣先が後頭部を貫いて姿を現しているため、絶命させたのは明らかだった。

「さて……と……」

周囲を見回すと花の下あたりに文字が刻まれているのが見えた。リイナとトニオが倒した原生生物の墓を作っている間、レイナとリマ夫人が解読を行つていてる。

「……」

私とエミリアが一人の後ろから文字を覗く。所々掠れて読めないところがあるがやはり何処かで見たことがある文字だ、何処で見たのやら……

「えーっと……『我ら』……『人を造りし』……『信じ』……」

レイナが所々を読みながら声を上げる。その一方でリマ夫人が頭を搔く。

「『自然』……『汚』……『鉄槌』……レイナ、あんたが解読したのは要するに人の造ったものを信じるとか信じないとか言う事だつたね？ あたいが解読したのは自然を汚すものに鉄槌だから……」「人の造ったものを信用するなど言つ事か？」

トニオとリイナが戻ってきてそう言つことを言つた。さて、次の道は人が造つたものを信用するなど言つ事だな……少し進んだ先に看板らしきものが右矢印を向いている。そちらとは逆方向に進んでみるとするか。

さて、なんだかんだで解読が進んでいく。ある時は黒い炎を避け、またある時は滝がある道を進み、またある時は紫色の花を探して進んでいく。

「なんだかたからさがしへーみたいだね」

リイナが笑いながら言った『宝探し』とは言ひえて妙だ。差し詰めお宝はカーシュ族の村と言いつところか。

「確かにそうだな……おつと、また暗号だ。頼んだぜお一人さん」

トニオがそう言つとレイナとリマ夫人がしゃがみ込み、その後ろからエミリアがまたもや覗き込んだ。最早いつもの光景だったのでトニオも気にしてはいないようだ。

「あ～……こりゃ結構難しいわ……」

「そうみたいね……」

今度のはかなり難しい暗号だったのか2人とも頭を悩ませる。必死になつて解読しようとする中、エミリアが声を上げた。

「あ、それ……」の先の道のりについてだ

『え?』

2人が驚くと、エミリアは額きながら壁の文字を見据えて呟く。

「ああ……うそうん……今までと違つて難しい文法で書いてるん

だね……更に詳しい道のりまで書いてるから、コレが最後の目印つて事かな？」

そう言いながら彼女は解説を進めていく。2人よりも早く、そして文字だけを見据えて頷くと突然立ち上がった。

「よし、」の先を進んで森を抜ければ直ぐだつて……どうしたの？」

Hミリアが呆然となつているリマ夫妻とレイナを見ながら目を瞬かせて答える。一方でリマ夫人が代表して声を上げた。

「あんた……何で読めるんだい？」

「何でつて、さつきから2人が読んでたのを、後ろで見てたし……」

Hミリアがそんな事を言つが、当然信じられるはずが無い。それに彼女は以前レリクスの存在意義についてを海底レリクスで述べた事もあるのだ。

「にしても俺はさつぱりだ。似たようなモンにしか見えねえんだがな……」

トニオの指摘にエミロアも眼を泳がせてしまう。

「そ、そんな事ないって……誰だつて出来るよ」のぐら「……現に奥さんやレイナも読めてるわけだし……」

「いや……実は一ヶ月かかつたんだけどね……」

「あたしは一週間の付け焼き刃よ……」

リマ夫人が苦笑いを、レイナが溜息を吐きながらエミリアに反論する。すると彼女はこちらに顔を向けてきた。

「ギュスター・ヴー！ ギュスター・ヴーはどうなのー？ 興味あるみたいだけど……」

「いや、何処かで見たことがある文字だと言ひ程度だ……それも旧文明の文字ではない……」

いきなり話を振られた私も声を出すが、一方でレイナが声を出す。

「でもむづぼじょわかるんだよね？ はやくこいつたまうがよくな
い？」

「えうんそのとーつー！ ぱりみんな、こいつだよーーー！ 早く
こーーーー！」

リイナの言葉に反応したエミリアが無駄に明るい声を出して彼女を連れて先に進もうとし、私たちがそれに続こうとした時だった。

「おまえたち、とまれつーーー！」

そのような殺意が籠つた声が響いた瞬間、私達は一斉に動いた。

「馬鹿っ！！ 危ねえっ！！」

「リイナツ、危ない！！」

トニオとレイナがそれぞれエミリアとリイナを押し倒した直後フオトンの矢が数本彼らの真上を通り過ぎ、続けて角度を修正して放たれた矢を私とリマ夫人がハンドガンで撃ち落す。

彼らがエミリアとリイナを連れ戻したところで三度迫る矢を私が撃ち落とし、今度はトニオとリマ夫人が矢を放つた張本人に迫る。

「もうらつたぜ！！」

真っ先に飛び掛ったトニオがツインクローラーの片方を突きつけようとした刹那、突如赤い魔法陣が浮かび上がりると炎を象つた何かが姿を現しトニオに向けて拳を振りかぶると、その腕から放たれた炎が彼に襲い掛かる。

「なつ…………！」

トニオが驚愕の表情を浮かべる。彼は上空を飛んでおり、避ける事など最早不可能だ。そこをリマ夫人が真横から飛びつくと炎の塊はトニオに当たることなくそのまま通り過ぎる。

炎は私が翳したシールドで残った2人……エミリアとリイナに当

たることなく霧散したが代償はあった。先程の炎でシールドが溶けてしまつたのである。

「くつ……！」

「コレで私がMAW社から持つてきた武器は全滅。トニオたちが私たちとは別の場所で体勢を整えなおすと、矢と炎を象つた何かを呼び出した存在の正体が姿を現した。

オレンジや黄色を主体とした派手な民族衣装を身に纏つた、羽飾りのついたバンダナをつけた端正な顔立ちをしたニューマンの少年……顔立ちからして下手をしたらエミリア以下の年齢だ。その手には羽飾りがつけられた一文字の槍が握られており、表情は怒りと憎しみに歪んでいた。

「先へは行かせないっ！！ 村は、皆はぼくが護るんだ！！」

叫ぶ少年に対して私は己の武器を確認する。踏み込んでこそ真価を發揮する細剣だと同じ条件の槍では間合いで負けてしまう。先程のシールドは炎によつて溶かされたため除外する。更に残ったハンドガンなどは殆どが自衛目的のレンタル品だ。

となると今回の私の立ち位置はエミリアとリイナの護衛だ。戦闘は情けないがリイナとリマ夫妻に任せるとしかない。

「レイナ、すまないが戦つてもらえるか！？」
「……はいはい、わかつたわよ！！」

彼女が叫ぶとリマ夫妻と共に少年に襲い掛かる。この乱戦では下手に援護しようものなら誤射を招きかねない。現にリマ夫人もダガーに取り替えて接近戦を行つてゐるのだ。

かと言つて私も乱戦に参加しては彼女らに対する流れ弾の処理が

遅れてしまつ。先程の炎が彼女らに襲い掛からないとは限らないし、先程の剣幕ではこちらにも攻撃するだろつ。

尤もこのままだつたら数の差と、SEED事変を潜り抜けたりマ夫妻の経験の差で少年を倒す事は出来る。

「くつ……こいつなつたら……」

少年が距離をとると、一枚のカードを手にする。それを見た瞬間、私は声を周囲の田を忘れて張り上げてしまった。

「まずい！！ 早く奴を倒すんだ！！」

ハンドガンを出して撃といつても口口まで距離を離されたらロングレンジショットでも届かない。リマ夫妻は少年が取つた行動を理解していないが彼らを責める事は出来ない。叫んだ理由を察したレイナが彼に向かうがもう遅い……！！

「ぼくはナチュル・パンプキンを召喚！！ 更に条件を満たした上での召喚に成功したので、ナチュル・ナーブを特殊召喚する！！」

彼の声を合図に顔と手足のついた南瓜の原生生物らしきものが姿を現すと間髪いれずに植物の葉を重ねたような魔物が姿を現す。

「な、何だいあれは！？ ミラージュ・ブラストじゃ無さそうだけど……」

リマ夫人が呆然とする中、エミリアが驚きの声を上げた。

「ちよつ！？ 何！？ 何でデュエルモンスターーズのモンスターが……」

エミリアも驚愕の表情を浮かべたが、直ぐに首を傾げる。恐らくあの顔は海底レリクスでの事を考へているのだろう。更に続けて少年が声を上げた。

「レベル4のナチュル・パンプキンにレベル1のナチュル・ナー

ブをチューニング！！

ナチュル・ナーブが1つの輪になり、それをナチュル・パンプキンがぐぐる。その後、ナチュル・パンプキンが4つの星になり直線状に並ぶ。

「偉大なる自然の四地王が一角が今日覚める！！ その安らぎを持つて魔を打ち払え！！」

その叫びと同時に無数の葉が散らばり、我々の視界を覆う。しばらくしてから葉は全て地面に落ちたが、既に相手の同調は完了してしまった。

緑色の虎に年代の入った樹木で覆われた手足と頭部に生えている角。そして所々で生えている葉がそれが自然界で現存している虎ではないと自覚させる。

「四地王が一角……安らぎの緑虎』ナチュル・ビースト』……」

それと同時に少年の声が響き渡る。それを聞いた瞬間、私はある事を思い出した。

「ナチュル……！？ そうか、『ナチュル族』か……！」

先程見たカーシュ族の文字の正体、それは500年戦争時代に存在していた異能者の部族・ナチュル族が使っていた文字だったのだ。自然を愛し500年戦争の末期になつて暴走した3体の氷竜の猛攻を受けてもなお生存し歴史の影に消えた部族……名前を変えて存在し続けたというのか……！？

「ナチュル族だかなんだか知らねえが、どうなつてんだよありや！？ デュエルモンスターのモンスターがディスクも無しに実体化しやがつたって言うのかよ！？」

トニオが驚くが、目の前のナチュル・ビーストも怒りの表情をこぢらに向けてくる。そして再び少年の声が響き渡った。

「村には行かせない！！　お前達の狙いはぼくの筈だろーー！　ぼくだけを狙え、ばいいじゃないか！！」

「しかも何かと勘違いしてるみたいだね……どうなつてんだい！」

？」

リマ夫人も驚愕の表情を浮かべ、トニオも呆れながら頭をかく。

「俺が知るかよ……」

しかし疑問を他所にナチュル・ビーストが突然襲い掛かってくる。これ以上暴れまわられては異能者の存在自体が露見してしまつ可能性がある……それだけは断じて防がねばならない。

「こうなれば仕方がない、発覚する前に倒させてもいいっ……」

最早スピード勝負になつてきている。私は先頭に出て2枚のカードを取り出す。

「私はバイス・ドラゴンを特殊召喚し、フォース・リゾネーターを召喚するーー！」

そう言つて姿を現したのは紫色の竜と普段から使つてゐるリゾネーターの背中に何らかの球体を乗せた悪魔だった。そして私は腕を交差させて宣言した。

「レベル5のバイス・ドラゴンにレベル2のフォース・リゾネーターをチューニング！！」

バイス・ドラゴンが5つの星になりフォース・リゾネーターから作り出された2つの輪を潜り抜ける。

「王者の叫びがこだまする…！ 勝利の鉄槌よ、大地を砕け…！」

その声を合図に爆音が響き渡りその中から1体の紫竜が姿を現す。

「羽ばたけ爆炎竜！… エクスプロード・ウイング・ドリゴン…！」

その声を合図に竜が咆哮を上げる。そして紫竜が息を吸い込み、私が叫びを上げる。

「吹き飛ばせ、エクスプロード・ストーム…！」

その声を合図に爆炎竜が爆炎を伴った炎の息吹をナチュル・ビーストに掛け吹きかける。しかしナチュル・ビーストはそれを必死になつて避けるが、それでも炎の息吹が着弾した余波での爆発によって大きく吹き飛ばされた。

「うわあああ…！」

少年がナチュル・ビーストから弾き出され、地面に叩きつけられる。ナチュル・ビーストも傷は浅くなく、即座に消滅し私も爆炎竜に対して礼を言つて消し去る。

「……ぼくは……まけられない……むらは……ぼくがまもるん、だ…」

そう言つたのを最後に少年は氣絶する。所々に私が着けてしまつ

た火傷がある為、手にしたウォンドでのレスタをかけて治療を開始した。

「すまねえな、手間をかけちまつてよ……」

トニオがそう言つたが、今回は相手が相手だったし、彼自身異能者と戦つたのは初めてだらう。私も気にしないでくれと言つてから彼の容態を見る。

「ねえねえ、このひとが『カーシュ族』？ ふつうのひとだよ？」

リイナがそう言つとリマ夫人も頷きながら彼女の問いに答えた。

「そうさ、カーシュ族つて言つのは『種族』じゃない。あたい達の様な文明を持たず原始的な生活をしていた『部族』なのさ。もちろん、ナチュル族つて言つのは初耳だけどね……」

そう言つて私の方を見据える。トニオもエミリアも怪訝そうな表情でこちらを見据えてくる。最早隠せる段階ではない……正直に話すしかないか……

異能者に関して私が話し終えると、トニオが訳が分からないと言いたげな表情でこちらに向かつて問いかけた。

「異能者、ねえ……となると、そっちの嬢ちゃん達もそうなのかな？」

彼の視線の先にはレイナとリイナがいた。レイナも渋々とだが頷き、エミリアの表情が曇る。まあ当然だ、彼女にとつてはあの出来

事は『夢』なのだから。

「まあ、よくよく考えればミラージュ・ブラストって元々カーシュ族が持つてた技術なんだからこう言つた力を持つても不思議じやないか……」

リマ夫人がそう言つと、レイナが声を上げた。

「でもこの子、あたし達の事を何かと勘違いしてなかつた?」

レイナの言つとおりだ。私たちはここには始めて来たのだし、カーシュ族に至つては初めて知つたのだ。大体村を襲つ動機も無いしこの少年を狙うなど論外だ。

「……ねえギュスター、聞きたいことがあるんだけど……」

Hミリアが沈んだ表情で私に問いかける。話したいことは果たして異能者のことか……?

「それは後回しにするけど、さつきのカーシュ族の事……どう思つ?」

「どうも何も、何かが起きているんだろう? カーシュ族の村で何かが起きたのは間違いないだろうな……」

どうやら彼女も気にしていたらしく通路らしきものを見据えている。まさか兄の書類にあつた異能者とはカーシュ族のことか? それにもしても今まで隠しあおせていたものが突然露見してしまつなど、一体何が……

「しゃあねえ、一手に分かれるぞ」

私が考えている中でトニオが声を上げた。

「俺達は一旦こいつを連れて手当てに戻る。お前達は先に進んで様子を探ってくれ」

トニオの提案に対してもミリアが異を唱えた。

「え……!? あたし達が先に進むの!? 足手まといなのが確実なあたしやあの子の方がよくな!?!?」

「あんたたちの船に医療用のポッドとか、この子を手当てできるよつの設備つてあるかい? それにあんた達だけで来た道を戻れる自信は?」

ミリアの異議に対してリマ夫人が逆に問いかける。残念だが社用の船にはそのよつの設備は無い。

「両方ともない……」

「あたしたちの船も広いけどね……たとえ設備があつてもあたし達は今回ばかりは奥へ進ませてもりつわよ

レイナも「」から帰れと話を振られたレイナを宥めながら彼女の言葉を否定する。となるとやはり彼らが戻るしかないか……

「それにコイツのような奴が相手だと俺らじや慣れてねえしよ……異能者だつて言つあんたらの方が奥に進むのに適してるとて訳だ」

トニオが済まなさそつと言つが、直ぐに明るく声を上げた。

「ま、やう心配するなつて。俺らも早く追いつかんよつと急ぐさ」

「それじゃ頼んだよ」

リマ夫妻がそう言つて少年と共に来た道を戻つていく。コレで奥へは私にエミリア、レイナとリイナの4人で進むしかなくなつたと言つわけか……

意氣消沈としている暇は無い。私は考え方をしているH//リアに声をかけると4人で再び奥へ向かつた。

森も奥深くまで進んだ。今度は罠も田印も田立たなかつたが、その代わりに視界などが狭く急いでいても急げない状況が続いた。

「もうそろそろカーシュ族の村に近づくけど……」

H//リアの声に対しても私は頷くとレイナとリイナの方を見据えた。

「……そろそろいいだろ。レイナ、一つだけ聞きたいことがある

その声に対してもレイナの表情が強張る。それでもなお私は聞かなければならなかつた。

「何を……？」

それは私が彼女らと会つてから感じていた疑問がある。ここで聞くしかない。

「私が言いたいのは一つだけだ」

そう言って先程の少年と戦ったような広い場所に出ると、私はレイナに向を直つて目つきを鋭くさせて問いかけた。

「今一度聞かせてもらひつ……お前の本当の目的は何だ……？」

自然の守人（後書き）

さて、今回も難産だつたな……何しろ今回はテュエル無しだつたので何を召喚させようか悩みに悩んだから……

ユート君にはナチュルを与えようと最初から決めていたのですが、今回は何を召喚しようかと言う事は考えていました。ギュスの方は決めていたのですが、そうなつたら効果がかみ合わないのではと思い変更に次ぐ変更……漸く決めた時には6時間の死闘になっていたという……

異能者としての矜持と決闘者としての誇り（前書き）

皆さんお待たせしましたーー！

今回でとうとう遊戯王恒例のあのシーンが出ますーー。

単純な流れ作業デュエルですがそこは『容赦を……

後このサイトでは常識になつてゐる全カード所持者に対するアンチもしくはアンチ管理局信者がよくやる管理局に対する悪意を持った解釈と似たような内容になつてしまつていますがそこには『容赦を……

それでは皆さんと一緒に……

ヽ(・`・)ゞ デュエル！

異能者としての矜持と決闘者としての誇り

私が発した言葉を合図にレイナの雰囲気が一変した。皿つきを鋭くさせ、リイナを護りながら私を睨みつける。

「……どういう意味？ 本当も何も観光以外にココに来る理由ってあるのかしらね？」

その問いかけに対しても私は憶測だが答えを得ている。そして彼女の矛盾点も2つ存在したのでそこから突かせてもらつた。

「まず最初にリイナだ。体が弱つていて漸く外に出られるようになつたと言つたな？」

「そうよ？ だから観光。それの何が悪いって言つのよ？」

別に悪くは無い。むしろアスカやカールの事を考えれば嬉しいらしいだが、だからこそおかしいのだ。

「だつたら絶景で有名なニューデイズ……いや、それこそ我々の故郷であるパルムでもよかつたのではないか？ 彼女にしてみたら何處でも新鮮なものだ、懃々寒暖の気候が激しいモトウブを選ぶ理由など無い」

その言葉に納得するエミリア。一方でレイナは苦虫を潰したような表情になるが続けて2本目を立てさせてもらつ。

「仮にパルム及びニューデイズを既に訪れていたとしてもだ……

2つ目の疑問点だが何故カーシュ族の文字を学んだんだ？」

「適当に選んだ森が実は罠とかがあつたって話よ。それで学んで

もおかしくない？」

「ああ、おかしいな。ならば何故一週間の付け焼き刃でカーシュ族のテリトリーに入りしつとした？ しかも解読に四苦八苦していた状態で、だ」

その言葉に対する口の「もるレイナ。さて口からが私の憶測だ。

「もしかしたらだが……口最近異能者がこの森で多く見られるようなんだ。私はその調査ないし違法者の駆除に赴いている」

「……それがどうかしたの？」

「口からは私の憶測なのだが……お前の本当の目的も人探しではないか？ そしてお前がそつまでして探そつとしたその対象は……」

「……！」

言い切ろうとした瞬間、強大な殺意と強き風が吹き荒れる。この気配は紛れも無い……あの時海底レリクスで感じ取ったものだ！！

「……！」

私は細剣を手にし、周囲に気を配る。周りは木々と草で覆われており、隠れるにじろ奇襲にじろ都合がいい場所だ……

「……なんなの！？」

次の瞬間、一機の戦闘機が上空を舞う。重厚なシルエットは戦闘機と言うより爆撃機に相応しい存在感、その橙もしくは茶の色彩を持つた爆撃機は突如人の形を成していき、我々の眼前に立ちはだかつた。

「……！」

その姿を見て私は息を飲んだ。その重厚なシルエットは忘れるはずが無い……あの機体は、否、あの“モンスター”はかつてデュエルモンスターズ界を荒らしたため造られてから僅か一ヶ月で使用が禁止され生産が止まつたデュエルモンスターズ界の問題カードが一枚……!!

「ダーク・ダイブ・ボンバー、だと!?

仮に買おうとしたら1枚20億メセタは軽く超える言つなれば資産にも等しいカードだ。あれをモチーフにした兵器と言う可能性もあつたが、二手二足の直立歩行型マシンナーはいかなる用途でも製造が禁じられており、キャストが大多数の同盟軍が製造しそれを投入するなどありえない。

だが続けて再び上空から今度は何らかの吐息が放たれた。炎・津波・突風・土石流・そして黒い波動だ。

「な、何なのよ!?

そして姿を現したのは五つの首を持つ竜……それを見た瞬間、私は頭を抱えたくなつた。

「今度はF・G・Dだと!?

F・G・Dもまた限定生産されたカードであり、高レートで取引される物だ。その値段は禁止指定を受けたダーク・ダイブ・ボンバーよりも高いと聞く。

「ちよ、何処の金持ちよ、そんなカードをぽんぽん手に入れることが出来るなんて!?

エミリアが叫び声を上げるが、今もなお上空にはダーク・ダイブ・ボンバーが、背後にはF・G・Dが控えているため、進むことも逃げる事も出来ない。

『ハツハツハツハツハツハ！－ どうだい僕に主人公を譲る気にはなつたかな？』

ダーク・ダイブ・ボンバーの中から声が響く。声質からして男だろ？

「お前は……何者だ！！」

「……」

敵意を込めて声を発する私に対しレイナは言葉を出さずに雰囲気を豹変させる。それは先程私に向けた物以上の怒り……否、憎悪だった。

『何者か、だつて？ 僕は言つなればこの物語の主人公様だよピンチヒッター君？』

「主人公……？ ピンチヒッター……？」

主人公だのピンチヒッターだのどういう事だ？ 海底レリクスでの出来事は私の記憶にも新しいが、ますます意味が分からなくなつて来ている……

『そ、う、さ。カーシュ族のガキはゲームをプレイしてた時からウザつたかつたからね、さつそくで悪いけど退場してもらおうかと思つてたんだ。よくあるだろ、淫獣とかＫＹとか薬味とか鈍感野郎を殺して退場させて自分でハーレム作るつて言つ話だよ』

『ゲームをプレイ』？ ビデオのことだ！？ まるでこの世界がゲームであるかのような言い方ではないか！？

「ふうん……」

困惑する私を他所にレイナが憎悪を隠さずの一歩前に出る。すると再び声が響いてきた。

『んん？ 君は『PSP 02』に出てない人間だよねえ？ まあいいや、僕のものにならないかい？』

そう言つてコクピットらしき部分から出てきたのは左腕に何らかの装置を身に着けた細身の優男で、容姿は絵に描いた様な美形の男だった。その男は緑色の髪をしており、黒のロングコートを羽織っている。

「そんな怖い顔しないでリラックスしなよ、ね？」

場違いなほどに明るい笑顔で言い放つ彼だが、即座にレイナが慣れない腕でハンドガンを乱射する。私たちはレイナの奇行に眼を見張るしかなかった。

「うわっ！－ な、何を……－！」

「やかましいわよ！－ 言っちゃ何だけど、F・G・Dならともかくよくもあたしの前でそんなもの出したわね！－ 大体そうやって女を食い物にしようつて根性が見え隠れするような奴なんか誰が信用するか！－！」

憎しみに支配されて攻撃するレイナ。気持ちは分からなくないが、いへりなんでもやりますぎではないか！？ 男も男で避け続けている

が、限界に来たのか遂に大声を張り上げる。

「五月蠅い…… いつなつたらコレで決着をつけるぞ…… 行くぞ篤志い……」

その言葉を合図に奴の様子が一変し…… 何と F・G・D の影から瓜二つの人間が姿を現した。違う点は髪の色が橙色の点のみ…… 恐らく彼が『アッシュ』なる人物だろう。

「え！？ ど、何処に隠れてたのよー？」

Hミリアの驚愕を合図にしたかのように彼らは一斉に左腕を構える。すると突如プレートが動き出し、起動状態に入る…… つて少し待て！！

「デュエルディスクだとー？」

私の驚愕を無視して彼らは自慢話を始めた。

「僕と忠志兄さんは他の野蛮人どもと違つて謙虚でね……」

「武器を手にしてチャンバラじつこなんて必要無いんだよ……」

『僕たちが手にしたのはコイツであーー』

奴らから紫色の光が放たれると同時に伸びた光が私とレイナを貫き、光の腕が私の心臓を掴み上げてくる……

「なつー？」

「えー？」

驚くのもつかの間、私から伸びた光は F・G・D の影に隠れてい

た男・アツシと……レイナの方はダーク・ダーブ・ボンバーから出てきた男・タダシの腕と繋がつてしまつた！！

「ギュスター・ヴ！？」

「おねえちゃん！？」

エミリアとリイナが狼狽し、男達は声を上げる。

「はつはつはーー！」の世界は何故か遊戯王の設定も入っているみたいだしねーー。」

「一回こういつた何でもありのテュエルをしてみたかってんだ、使わない手はないよなあー！」

流石に彼らを野放しにしていたら最悪の事態……五百年戦争の一
の舞だ！！

「お前達、異能をこれ見よがしに使って露見したらどうするつもりだ！？ 五百年戦争で引き起された異能者狩りを再び招きたいのかー？」

異能者たちにとつて最悪の事態を私たちは心の奥底から恐れてい
る。しかし彼らはそれがどうしたと言わんばかりの表情をして我々
を馬鹿にしきつた表情で言い放つた。

「『異能者』あ？ なんだいそれ？」僕たちは主人公側の立ち位置だからそういうのは関係ないね！！ 僕たちが気に入ったキャラは生かすし気に入らないのは殺すさ、今までと同じようになー！！

殺されないだけでもありがたく思つんだね！

その言葉を聞いた瞬間、私は彼らを生かしておく必要性を無くした。何故あのような凶行に走ったのかどうでもいい。今は最悪の事態を起しきれないため、ココで始末しておくれー！

「……もういい。それ以上口を開くな」

「……あんたの切り札はそいつ、野良試合だから使いたい放題つて説ね……上等よー！」

私とレイナは左腕を高く掲げ、異能者としてのデュエルを開始する宣言を同時に発するーー

『デュエルトランサー、起動ーー』

その言葉を合図に左腕に装着されたナノトランサーが起動し、体

の外側部分にフレートが出現する。更にナノトランサーの基盤が変形しその中に「デッキ」が収められた。

コレこそが異能者専用の「デュエルディスク」「デュエルトランサー」であり、普段はナノトランサーに擬態させている。

更に「デュエルトランサー」には異能者が技術の粋を集めて作った認識阻害の機能が備わっており、使用者の半径50メートルは外部の人間には認識されない為、処刑などにはうってつけの道具だ。

「違法者とみなす……お前たちを駆除させてもらひや！」

「はっ！－！　君は所詮どこの傲慢な管理局と同じ考え方かい！？」

「あたしの前でそのカードを使つた事、後悔しなさい！－！」

「上等だ！－！　妹共々可愛がつてやる！－！」

一触即発の気配が漂う中、誰もが次に叫ぶ言葉を決めていた。そして、それは現実のものになる！－！

『デュエル！－！』

ギュスター・ヴ

L P : 8 0 0 0

篤志

L P : 8 0 0 0

このデュエルはタッグデュエルではなく私とアッシ、レイナとタダシで行われるシングルマッチ……互いの助けは期待できそうに無いか。

「先攻は僕だあ！－ドロー－！」

そう言つてアッシがカードをドローすると即座にカードを叩きつける。

「僕は『未来融合 フュー・チャー・フュー・ジヨン』を発動！！
僕が選択するのは1体目の『F・G・D』、『伝説の白石』3枚に
『エクリプス・ワイバーン』2枚を墓地へ送る！！」

未来融合 フューチャー・フュージョン

永続魔法

自分のエクストラデッキに存在する融合モンスター1体をお互いに確認し、決められた融合素材モンスターを自分のデッキから墓地へ送る。

発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時に、確認した融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

伝説の白石

チューナー（効果モンスター）

星1／光属性／ドラゴン族／攻 300／守 250

このカードが墓地へ送られた時、デッキから「青眼の白龍」1体を手札に加える。

エクリプス・ワイバーン

効果モンスター

星4／光属性／ドラゴン族／攻1600／守1000

このカードが墓地へ送られた場合、デッキから光属性または闇属性の

ドラゴン族・レベル7以上のモンスター1体をゲームから除外する。

その後、墓地のこのカードがゲームから除外された場合、このカードの効果で除外したモンスターを手札に加える事ができる。

「この時、墓地へ送られた伝説の白石とエクリプス・ワイバーンの効果発動！！ 前者はテッキから『青眼の白龍』を手札に加えることができるし、後者はテッキから光属性または闇属性のドラゴン族かつレベル7以上のモンスター1体をゲームから除外する！！ 僕は『レッドアイズ・ダークネスマタルドラゴン』2枚を除外する！！」

そう言つてアツシが手札に加えたのは3枚の青眼の白龍……デュエルモンスターズの黎明期に作られた今もなお造られているモンスターであり、入手していてもおかしくは無い。だがエクリプス・ワイバーンはまだデータしか存在していないカードではないか。

（流出したデータを利用して偽造したのか……？　いやカードデータのセキュリティは厳重だから漏洩は無いと思いたいが……しかし、偽造カードはディスクが反応してテッキごと切り裂く仕組みなのだが……）

とは言えデュエルは待つてくれやしない。それにレッドアイズ・ダークネスマタルドラゴンもまた高額カードだ。ダーク・ダイブ・ボンバーにF・G・Dといいどうなつている！？ 普通に買おうとしたら家が傾ぐどころでは無いぞ！！

（何が、どうなつているんだ……！？）

青眼の白龍

通常モンスター

星8／光属性／ドラゴン族／攻3000／守2500

高い攻撃力を誇る伝説のドラゴン。

どんな相手でも粉砕する、その破壊力は計り知れない。

レッドアイズ・ダークネスマタルドラゴン

効果モンスター

星10／闇属性／ドラゴン族／攻2800／守2400

このカードは自分フィールド上に表側表示で存在するドラゴン族モンスター1体を

ゲームから除外し、手札から特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に手札または自分の墓地から

「レッドアイズ・ダークネスマタルドラゴン」以外のドラゴン族モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「そして『龍の鏡』と『融合』を発動！！『龍の鏡』の効果によつて墓地へ送られた5体のドラゴン族モンスターを除外して2枚目のF・G・Dを、融合によつて手札に加わった青眼を3体使って『青眼の究極竜』を特殊召喚する！！」

それを合図にしたかのように1枚の巨大な鏡が姿を現し5つの首を持つた邪竜を、何らかの渦が広がりそれが収束していくと三つ首を持った神の様な威圧感を持つ白竜が姿を現した。

龍の鏡

通常魔法

自分のフィールド上または墓地から、

融合モンスターカードによつて決められたモンスターをゲームから除外し、

ドラゴン族の融合モンスター1体を融合『テッキ』から特殊召喚する。

(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)

融合

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによつて決められた

融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

F・G・D

融合・効果モンスター

星1-2 / 閻属性 / ドラゴン族 / 攻5000 / 守5000

ドラゴン族モンスター × 5

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードは闇・地・水・炎・風属性モンスターとの戦闘では破壊されない。

青眼の究極竜

融合モンスター

星1-2 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻4500 / 守3800

「青眼の白龍」 + 「青眼の白龍」 + 「青眼の白龍」

たつた3枚のカードでココまでの布陣を整えるとは……カードの引きも質も伊達ではないといふことか。しかもそれだけではない……

「さらに効果で除外されていた2枚を手札に加えさせてもう一つ
! ! !

エクリプス・ワイヤーバーンの効果で除外されていた2枚のカードを手札に加える事に成功したか!! コレで奴の手札は5枚……実質ノーコストで強力なモンスターを2体召喚する事に成功した……!!

「おつと、まだまだいくよ!! 僕はポケ・ドラを通常召喚!!

更にポケ・ドラを手札に加える事が出来る！！ 続けてそいつを除外して手札に加えたレッドアイズ・ダークネスマタルドラゴンを特殊召喚！！

姿を現したのは硬質の身体を持つた真紅眼の闇竜……！！ しかもあるのモンスターの効果は……！！

「ロイツの効果で手札の真紅眼の黒竜を特殊召喚！！」

僅か1ターンで4体の高攻撃力を有するモンスターを召喚したと
いうのか……！！

ポケ・ドラ

効果モンスター 星3／炎属性／ドラゴン族／攻 200／守 100

このカードが召喚に成功した時、

自分のデッキから「ポケ・ドラ」1体を手札に加える事ができる。

真紅眼の黒竜

通常モンスター

星7／闇属性／ドラゴン族／攻2400／守2000

真紅の眼を持つ黒竜。怒りの黒き炎はその眼に映る者全てを焼き尽くす。

「やうに手札から『黒炎弾』を発動！！」

黒炎弾……真紅眼の黒竜専用の魔法力カード！！ 元々の攻撃力分のダメージを与えるが真紅眼の黒竜は使用したターン中、攻撃出来ないと言つテメリットが存在するが……！！

「その顔を見ると分かつてゐようだね？ そう、最初の1ターン
田はバトル出来ないからどうでもいいよねえ！！」

そう言つ事だ。私は何も出来ない歯がゆさを感じながらも黒竜が
放つ炎の弾丸を避けるしかなかつた。

「くつーー！」

それでも余波となつた熱を感じ取つてしまつた。熱い、もし当た
つたら一度目の死を迎えるところだつたかもしれない。

ギュスター・ヴ

LP : 8000 5600

黒炎弾

通常魔法

自分フィールド上の「真紅眼の黒竜」1体を選択して発動する。
選択した「真紅眼の黒竜」の元々の攻撃力分のダメージを相手ラ
イフに与える。

このカードを発動するターン、「真紅眼の黒竜」は攻撃できない。

「コレでターン終了つと」

まさか先攻1ターン田で「」まで削られるとは……相手の場のモ
ンスターはF・G・Dを筆頭に青眼の究極竜、レッドアイズ・ダー
クネスマタルドラゴンに真紅眼の黒竜……最低でも2400ライン、
更に2ターン後には2体田のF・G・Dが呼び出されてしまう……！

「終わりじゃん……普通の戦いならまだしも、こんな状況覆せる
わけ無いじゃん……」

ヒミリアはそんな諦めたような表情を浮かべ、男はニタニタと笑う。言葉にしなくとも分かる。

「どうだ、僕の力は」

そう、奴はそう言つてゐる。異能を自分の好き勝手に使い、自分が絶対的な上位者だと言わんとしているあの表情……

『フエツフエツフエ……！… 小僧どもが、好き勝手吼えるでないわ！… この力さえあればワシがグラールの支配者になるのだ！』

あの時、ウォザーブルグ動乱で取り押さえようとした当時の“協会”副代表を思い出す！！

「ふざけるな……」
「は？」

そう……私利私欲で人体実験を行つたあの男がいたからこそ、本來絶たれる筈の無い絆が切れてしまい、彼女の心に闇が出来てそこを漬け込まれ、最後の最後での無意味な戦いが引き起こされた……

「ふざけるなと言つたのだ！！ 私は貴様たちのような違法者など断じて認めん！！ お前たちの通りになど誰がさせるか！！ 私のターン、ドロー！！！」

1ターンキルが出来れば理想だが、この手札ではそこまで出来ない。故にまずやるべきことは……！！

「まずはそのフィールドを一掃させて貰おう…… アウエイク・ザ・マジックカード、アースクエイク！！」

アースクエイク

通常魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て守備表示にする。

その直後に強い地震が起き、眼前の竜たちがそろって攻撃態勢を解除してしまった。

「更に私はバイス・ドラゴンを攻撃力と守備力を半分にして特殊召喚する！！」

そう叫ぶと同時に私の場からバイス・ドラゴンが姿を現し咆哮を上げる。

バイス・ドラゴン

効果モンスター

星5／闇属性／ドラゴン族／攻2000／守2400
相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚したこのカードの元々の攻撃力・守備力は半分になる。

「ちよ、ちよっと待て！！ この展開つてまさか…！」

どうやら奴も理解できたようだな、だがまだ甘い…！

「アウェイクン・ザ・マジックカード、スタンピング・クラッシュ
ユー！ その未来融合を破壊させてもらひう！！」

断固として未来融合を破壊して2体目のF・G・Dの召喚を阻止せてもらひう。バイス・ドラゴンが飛翔し、即座に急降下して未来融合のカードを踏み砕き破壊する！！

スタンピング・クラッシュ

通常魔法

自分フィールド上にドラゴン族モンスターが表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。
フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して破壊し、そのコントローラーに500ポイントダメージを与える。

「くうつー！」

篤志 L.P. : 80000 7500

「続けてフレア・リゾネーターを召喚ー！」

そう叫ぶと同時に炎を背に纏つたリゾネーターが姿を現す。

フレア・リゾネーター

チューナー（効果モンスター）

星3／炎属性／悪魔族／攻 300／守 1300

このカードをシンクロ素材とした

シンクロモンスターの攻撃力は300ポイントアップする。

「行くぞ……」

その声を合図に心臓が激しく脈打つ。やはりかつて私の命を喰ら
いし炎魔竜を従えるには「」までの代償が必要だというのか……！
だが、自然と私の口元に笑みが宿る。あのカードを手にすると自
分が自分で無くなっていく様なあの鼓動……ああ、漸くあのカード
を出せるのか……『ユエルと言つ神聖な戦場で！！

「私はレベル5のバイス・ドラゴンにレベル3のフレア・リゾネ
ーターをチューニング！！」

バイス・ドラゴンが5つの炎の玉となり、フレア・リゾネーター
は3つの火の輪となる。炎の玉が私に吸い込まれ火の輪が私の周囲
に纏わりつく。さあ、「」からが本番だ……！！

『「王者ノ鼓動、今ココ一列ヲナス！！ 天地鳴動ノ力ヲ見ルガ
イイ！！ シンクロ召喚！！』

あの時と同じように私以外の存在……否、最早疑つまでも無い。
炎魔竜の声が私の声と重なり響き合い、我が体が炎に包まれる。身
体が燃える、心臓が脈打つほど熱い、コレこそが炎魔竜の熱さと鼓
動……！！

『我ガ半身……』
「我が誇り……」

『「炎魔竜、レッド・テーモンズ・ドラゴン——」』

レッド・デーモンズ・ドラゴン

シンクロ・効果モンスター

星8／闇属性／ドラゴン族／攻3000／守2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを攻撃した場合、

ダメージ計算後相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する。

このカードが自分のエンドフェイズ時に表側表示で存在する場合、

このターン攻撃宣言をしていない自分フィールド上の

このカード以外のモンスターを全て破壊する。

次の瞬間には炎が吹き荒れ、あの時と同じように私の身体は炎魔竜と化していた。

「や、やっぱりレモンか…！ よりによつてこんな時にい…！」

『「フレア・リゾネーター」効果発動…！ ノーカードガシンク

口素材ニナツタ時、シンクロモンスターノ攻撃力ヲ300ポイント
アップスル！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK：3000 3300

「この男も炎魔竜を知っている……どういうことだ？」『250円竜』と違つて今回の略称はレッド・デーモンズを略した記号だから分かるのだが……どちらにせよ不快だという事には違ひないが。

『「……行カセテ貰ウ！！ 我自身デ真紅眼ノ黒竜ヲ攻撃スル！
！ アブソリュート・パワー・フォース！！』

炎を腕に纏わせ、紅き眼を持った黒竜に襲い掛かる！！ 炎の腕は黒竜の鱗をも焼き尽くし、その肉体を焼き尽くした。

『「ソシテ、守備表示ノモンスターヲ攻撃シタ時、ダメージ計算後相手フィールド上ニ存在スル全テノ守備表示モンスターヲ破壊スル！！ デモンメテオ！！』

その直後翼を広げ、炎の隕石を呼び出す。炎の隕石を破壊する手段を持たない竜たちは隕石に飲まれていき、悉く燃え尽きていく。

「そんな……僕のモンスターが……だ、だが次の前のターンを凌いで僕が勝つ！！」

『「ヤレルモノナラヤツテミルガイイ……我ハ2枚伏セ、コノターンヲ終了サセテ貰ウ……』

何とかこの場は凌いだか……だが次のターン次第では逆転される可能性だって存在する。2枚のカードが正しく発動できなければ……私は負ける。だがあえて言わせてもらつ。

「……見ていろエミリア。私が伏せた2枚のカードで逆転してみせる。出来なかつたらそのときは私の負けだ」

炎魔竜に頼み込み、この時ばかりは私自身の声で話させてもらひ。だがアッシュはそれが氣に入らなかつたのか大声を張り上げて叫んだ。

「なめるなよカマセ犬！！ 僕のターン、ドロー！！」

そう言つて彼が引いたとき、私はそれをまず制した。

『「オープントラップカードー！ バトルマニアー！」』

バトルマニア

通常罠

相手ターンのスタンバイフェイズ時に発動する事ができる。

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターは全て攻撃表示になり、

このターン表示形式を変更する事はできない。

また、このターン攻撃可能な相手モンスターは攻撃しなければならない。

バトルマニア……今日はデッキを調整していたが為あえて入つて
いたカードだが、もう一枚伏せられたカードを組み込む事によつて
調和されるカードだ……問題は奴がそれに乗るかどうかだ！！

「それがどうした！！ 僕はポケ・ドラを召喚！！ 手札にポケ・
ドラを加え直して召喚したこいつを除外！！ いでよ、レッドアイ
ズ・ダークネスマタルドラゴン！！」

「2枚目のレッドアイズ・ダークネスマタルドラゴン……そつ言えば持っていたな。

「コイツの効果で僕は青眼の究極竜を特殊召喚する！！！蘇えれ、究極竜！！更に手札に入った死者蘇生の効果でもう一体のレダメを特殊召喚！！効果で真紅眼の黒竜を蘇生！！」

死者蘇生

通常魔法（制限カード）

自分または相手の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

紅き眼をした黒銀竜と青き六眼を持った三つ首の白竜が再臨したか……

「コレで貴様も終わりだ！！青眼の究極竜でレッド・テーマモンズ・ドラゴンを攻撃！！アルティメットバーストおー！」

奴が吼え、究極竜に備わった三つ首から光の波動がこちらへ向かってくる。

……そう、この瞬間を待っていた！！

『「オープン・ザ・トラップカードー！　プライドノ咆哮ー！」』

プライドの咆哮

通常罠

戦闘ダメージ計算時、自分のモンスターの攻撃力が相手モンスターより低い場合、

その攻撃力の差分のライフポイントを払って発動する。
ダメージ計算時のみ、自分のモンスターの攻撃力は
相手モンスターとの攻撃力の差の数値 + 300 ポイントアップす
る。

「コレは自分自身の誇りの象徴……我が誇りの叫びだ。貴様たち違
法者を裁くため、私の異能者の誇りを乗せた、魂のカード！－！」

『「オオオオオオオオオオオオオオ…！」』

ギュスターヴ

LP : 5600 4400

そして光の波動を我が身で受け、その力を吸収する……少しばか
り苦痛を感じたが、な……

レッド・チームンズ・ドラゴン ATK : 3300 4500
4800

『「クリムゾン・ロア・フレアバーストオー！」』

紅き咆哮の灼熱波が三つ首竜を飲み込む。炎に焼かれ、光に溶かされ、究極の名を閲した白竜は今度こそ我が手で倒す事に成功した。

「あ、ああ……」

篤志

LP : 7500 7200

レッド・テーモンズ・ドラゴン ATK : 4800 3300

『「サテ、バトルマニアノ効果ダ。他ノ者ドモモ我ラト戦ツテモラウゾ』

その言葉を聞き、アツシの顔が青くなり、残つた3体の紅き眼をした黒竜が一斉に襲い掛かる。だが

『「一体田ー。』

右腕を振るい1体田のレッドアイズ・ダークネスマタルドラゴンを葬り……

『「一体田ー。』

続けて左腕を振るい2体目を破壊し……

『「二体目は……」』

我が咆哮とともに炎の濁流で最後の黒竜を焼き払つ……

篤志

L P : 7200 6700 6200 5300

「うや……本当にあの状況をそつくりそのままひっくり返しちゃつた……」

ライフ差こそ狭まつただけだが、最早ボードアドバンテージは決定的。既に手札を消耗しつくした彼に何も出来るはずが無く、ターン終了を宣言した。

『「行クゾ……ファイナルターン、ドロー……」』

そして手にしたカード……それは奇しくも先程のアッシュと同じカード……死者蘇生だつた。

『「……」』

このカードで青眼の究極竜を召喚する事も考えたが、私はあの力一ドたちの出所を疑つてゐる。本当に彼ら自身の手で手に入れた力一ドなのか……それすらも危うい。

データしかないエクリプス・ワイバーんに高級レアカードのF・G・Dにレッドアイズ・ダークネスマタルドラゴン……しかもレッドアイズは少なくとも2枚あるのだ、疑わない方が無理だ。

「……一つだけ聞かせろ、そのカードはお前たち自身で手に入れ
たものか……？」

炎魔竜に頼み、しばらくは黙つてもらつ。どうしてもそれだけは
聞きたかったのだ。だが彼はそれを無視し、癪癩を出して喚きだし
た。

「なんだよ……お前何なんだよ！？ 兄さんと違つて僕は他の転
生者と同じようにGXでシンクロやエクシーズつかつてデュエルバ
力や水色におじや万丈目を見下したかつただけなのに、何でこんな
世界に放り込まれたんだ！！ しかもあのクソジジイにカードを作
らせて、さあ行くぞと言つところでのバカ世界を間違えてこんな
所に放り込んで！！ 折角主人公になれたのに、こんな仕打ちあん
まりだ！！！」

……今なんと言つた！？ カードを……『作らせた』だと！？

「……どういふことだ！？」

「五月蠅いな、転生者特権を使つただけだよ！！ 全カードを所
持して遊戯王の世界に入り込んで、要らないカードを売りまくつて
ガチデッキ組んで無双しまくつてやりたい放題ハーレムマンヤー、
気に入らない奴は徹底的に叩き潰す！！ それが転生者つてやつだ
ろうが！！ 何だよお前、僕のささやかな理想を踏み躡りやがつて
！！ 僕を誰だと思つてるんだよお！！！」

……喚きたててているようだが、もう関係ない。最早私の心は決ま
つた。ちゅうビリーフも削りきれるし問題ない。

『モウイイ、ダメレ。アウェイクン・ザ・マジックカード、死
者蘇生！』

さて、私のカードを蘇生させてもらおうか。頭上に煌びやかな剣を模した十字架が聳え立つ。

「な、なんだよ……僕の究極竜を召喚しようって言うのか……？」

とうとう奴は私の逆鱗に触れた。

私はアンティも同意の上ならば何も言つつもりは無い。強奪同然ならば即座に制裁して奪還するのみ。

私自身がM A W社代表の弟であるからこそ、家の財産でカードを買うという事を否定するつもりも資格も無い。子供がなけなしの金銭で、富豪が湯水のように金銭を使ってカードを買うのも、私にしてみたら大差ない。同じ金銭を使っての戦力増強に貧富の差など存在しない。

だが偽造カードで好き勝手行つ事や密売を奨励したつもりは一度も、否、一瞬たりとも無い。

それで私服を肥やし、決闘を踏み躡り汚すというのだけは……私の誇りが許さん！！

コイツは異能者としての矜持も決闘者としての誇りも踏み躡つた……これ以上顔を見るだけで不快だ！！

『「イツマデ私ヲ愚弄スルカ……フザケルナ凡愚メ、誰ガソノヨウナ紙屑ヲ使ウカ！！ 私ハ死者蘇生ノ効果デ、バイス・ドラゴンヲ特殊召喚スル！！ 蘇エレ、バイス・ドラゴン！！』』

バイス・ドラゴン ATK：2000

私の怒りを表したかのようにバイス・ドラゴンも再び飛翔する。その力は先程のような制限されたものではない！！

「ま、待ってくれ!! サレンダーだ!! サレンダーするうううう!! よくある話だろ!? 自分の敗北を認めてそれをバネにして……」

「言つに事欠いてサレンダーだと!? この男は、いつまで自分中心で世界が回つていると思つているのだ!!」

『「焼キ払工、バイス・ドラゴン!!』

最早存在させる義理もあるまい。私の殺意を知つたのか逃げ出そうとした奴にまずはバイス・ドラゴンの火炎の息で足を焼き払い……

『「消エウセロ阿呆!! 今コソ裁キノ時ダ、アブソリュート・パワーフォース!!』

炎を灯した右腕で転がり込んだあの阿呆を焼きつくしてくれる!!

「あ、ああ……つわああああああああ!!」

右腕がそいつを飲み込んだ時、その場には焼き焦げた跡しか残さなかつた。例えライフが残されていようと、奴はもうこれ以上デュエルは出来ないだろう……

篤志

L P : 5 3 0 0 3 3 0 0 0

炎魔竜との融合が解除され、エミリアが恐れながら私を見据える……当然だ、あのような激昂振りを見せた上、人を一人焼き払つたのだ。

「……私が怖いか？」

「……怖いに決まってるじゃない」

それが自然な反応だ。私はテュエル中に人を殺したのだ。いくら決闘を汚したとは言え、最後の最後で異能を使い相手を焼き払つたのだ……どちらにせよ最悪の行為だ。

「……この依頼が終わつたらパートナーを解消してもいいんだぞ？」

「……考え方で……自分で考えて決着つけたいから……一回パートナーだつて宣言した以上は、ね……」

意外な反応だつたがまあ、いい……コレで後はレイナのテュエルが終わるのを待つだけか……

異能者としての矜持と決闘者としての誇り（後書き）

以前現実主義だつたといつギュスター・V……偽造カードの存在を決して許さない、所詮彼も遊戯王側の人間だつたといつ事だ……

転生者つてオベリスクブルーの成金に対してもは平然と見下すくせに自分は神様からカード貰つてるんですよ？ その成金くんと何処が違うのか私が納得できるよう説明していくください。

自分もお金をやりくりしてカードを買ってますし、パックで買ってアーカードが当たつた時は嬉しいです。

特にトリシューラのターミナルを15回やつてトリシューラのシークレットが出た時は喜んだものですよ。交換持ちかけられたけど当然却下で、代替案を出して双方満足な結果に終えました。

その人として当然の喜びを奴らは平然と踏み躡る。湯水のように出でくるカードの海、それを使って平然と複数のデッキを使って気分次第で口口口口変える……それでデッキとの絆と平然と抜かし、GXのキャラを水色だのなんだの見下し放題……そんな奴らこそ世界の歪みだと私はあえて言わせてもらいます。

後勘違いされても困るのですが、GXでも主人公の特権ではないシンクロとか5D、Sキャラが使うのならいいんですよ。

現に自分も「お話上手になりたいよ！」をお気に入り登録しますから。

姉との戦い（前書き）

難産とりティックを描き続けて漸く完成です。

この作品初オリカが出ます。

また、レイアウトが見づらいなどの意見がありましたら、いつしたほうがいいと発言してください。後感想もプリーズテス……

姉としての戦い

あたしはあの時何も分かつてなかつた。

リイナが十年間どんな思いで過ごしてきたのか、人の醜さつて奴とか、アイツの過去とかも……

だけどそんな事悔いても時間の針を巻き戻す事なんて出来ない。

「レイナ、少しばかり話を……」

ウォザーブルグでの戦いが終わり休学届けを出して実家に戻った時、あたしは塞ぎこんだリイナを抱きかかえながら怒りを隠しきれずに叫んだ。

「つるさこつるといつるわいーー！ もうあたし達に構うなーー！」

子供の頃に異能の暴発を防ぐため施設つて言つ機関に預けられたリイナとそこで再開した。でも再開したあの子は人を信じなくなつて、タチの悪いクソ野郎に騙されて、リイナの処罰を巡つて飛鳥とカールが殺しあつて、結果的に2人とも行方不明になつた。

そこまでなら、まだ呼びかけている父だった男と分かり合おうと努力できた。

自分が頑なに機関に預けるのを断り続けたせいで異能が暴走して妻を……つまりあたし達の母さんを喪い、今度はリイナが異能に呪われた。今度は過程がどうであれ助けようと努力した。そこまでなら百歩譲つて苦渋の判断だつたと感じられる。

あたし達は何度か預けられたと聞いたリイナに手紙を送つた事がある。その手紙も届けられたと聞いた。

でも、あの男は手紙を届けていなかつた……それどころかリイナの見舞いにも行きやしなかつた。拳銃の果てにリイナがあそこでど

んな目にあつたのか知つていた。

『――一度とあのよつな事を犯しはしない、今度こそ親の義務を果たす』

封を切られていない手紙を出しながら言い訳じみた言葉まで放つ。しかも聞いた話だと信じられない事に、リイナを差し出したときにこの屋敷が買えるつて言つ金額を誇るレアカードと潤沢な資金を貰つたつて聞いた。

そこであたしはキレた。あたしからしてみたらアイツにとつてリイナはそれ位の価値しかつたつて事？ それなのに親としての義務を果たすつて今更何のつもり？

「……」

あの時から生きているだけのリイナを抱いて考えた。ココにいてリイナの心の傷が癒えるのを待つのも一つの手だ。もしかしたら一族の情報網にあの2人が引っかかる可能性だつてある。

だけどそれじゃあたしは与えられたものを享受していただけの子供だった頃と何一つ変わらない。それにもう一族なんざ信用する事が出来ないし、肝心な情報を隠されたりする事もあるかもしけれない。もう何も知らないのはゴメンだ。ならば自分の目で見て、自分の耳で聞いて、自分の足で歩く。

「そう決まつたら準備ね……」

替えの下着やあたし達の全財産、後は換金用のカードや武器の数々。靴とかは現地で買えばいいから今は動きやすい靴でいいか。後はリイナを連れて行くための移動手段ね……まあ フィランディア・シティに着くまでの足だから後は何とでもなるか……

そうなつてから日々用意を整えてリイナを連れて屋敷を移動する。後は今では使われていない車に乗れば……

「何をしているんだ、レイナ！！」

その声はあたしが聞き慣れた男の声……十年間あたし達を騙し続けた、あのクソ野郎や副代表以上にあたしが憎んでいた男の声だ……

「……あんた、ココでなにしてんのよ？」

「……最近妙な動きをしていると聞いた。馬鹿な真似はよして大人しくしているんだ、あの2人を探すのならば協力しよう」

「馬鹿な真似、ねえ……」

本当に馬鹿げた話。あんたの言うようにして『お利口さん』にした結果が、あの状況じゃない。あの時以上の『馬鹿な真似』があるんなら、あたしの方から教えてもらいたいわね。それに協力するも何も、最初に裏切ったのはアンタの方じゃない。

「ホントはこうしてる時間も惜しいけどね……ココはデュエルで決着つけましょう？　あんたが実の娘以上に大好きな大好きなあのカード、あれも入れていいいわよ？」

コレは賭けだ。自分が一族の助けなど不要だという賭け。ココで負けていたらあの2人の代わりにリイナを守る事なんて出来やしない。

「……何を考えているんだ！？」

「別に。あんたに……あのカードに負ける程度しかないならあたしの力は外じゃ通用しない。そう考えただけよ？　それにあんたが勝てたらいいだけじゃない」

そう言つてあたし達は「テュエル・トランサー」を起動する。「コレに備わった認識阻害の装置で当分の間は誰もココには来れない。後はこの男を倒すだけ！！

「いい加減にしろレイナ！！」

「あたしはあんたを倒す！！」「の……クソ親父ー！」

『決闘！！』

あの時と同じ言葉を紡いだ瞬間、あたしの視界はかつていた屋敷からモトウブの原生林に場所を変え、あの男のそばにいたダーク・ダイブ・ボンバーは消滅した。

レイナ

L.P.・80000

忠志

L.P.・80000

「ああ、一応言い忘れてたわ。それ、エクストラテックに入れてもいいわよ？」

「いいのかい？ 後悔するよ？」

ま、いつも言わないと禁止カードだからテックには入れられない。あのカードを倒した上であたしが勝つ……それがあたしのこの決闘における完全勝利条件……と言えばかつていいんだけど私怨に等しいわね。

でもリイナはリイナでのんびりあたしの応援をしながら決闘の様子を見ている。それでも今の様子でもあたしは満足だ。あの時あたしとあの男の決闘ではあの子は応援どころか塞ぎこんでいたからだ。

「ま、代わりに先攻はあたしが貰うけどね。あたしのターン、ドローー！」

もう言つてあたしはカードを一枚手にする。まあまあの手ね……

「あたしはモンスターとカードを一枚ずつセレクトしてターンエンディング！」

まずは様子見……といつよりキーカードが来なかつたのよね……

「僕のタアアアアン……ドロー……僕は魔法カード『調律

を発動する……」

調律

通常魔法

自分の「デッキから「シンクロロン」と名のついたチューナー1体を手札に加えてデッキをシャッフルする。

その後、自分の「デッキの上からカードを1枚墓地へ送る。

調律……カールと同じようなデッキね。あのカードはシンクロロンなら何でも手札に加えられるカード……何を加える気?

「僕は調律の効果でクイック・シンクロロンを手札に加え、デッキの上から一枚墓地へ送る……」

クイック・シンクロロン

チューナー（効果モンスター）

星5／風属性／機械族／攻 7000／守1400

このカードは手札のモンスター1体を墓地へ送り、手札から特殊召喚することができる。

このカードは「シンクロロン」と名のついたチューナーの代わりにシンクロ素材とすることができる。

このカードをシンクロ素材とする場合、「シンクロロン」と名のついた

チューナーをシンクロ素材とするモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

クイック・シンクロロン……か。カールはジャンク・シンクロロン主体だったけどこのカードも使っていましたから、コレはまずいかな?

「更に手札から黄泉ガエルを墓地へ送つてクイック・シンクロロン

を特殊召喚だあ！！」

黄泉ガエル

効果モンスター

星1／水属性／水族／攻 100／守 100
自分のスタンバイフェイズ時にこのカードが墓地に存在し、
自分フィールド上に魔法・罠カードが存在しない場合、
このカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。
この効果は自分フィールド上に「黄泉ガエル」が
表側表示で存在する場合は発動できない。

「あ、カールおにいちゃんのカード…！」

アイツが召喚したのは頭にウエスタンハットを被つた二丁拳銃を
持つた機械人形だった。リイナは可愛いと喜んでいたが、こっちは
それどころじゃないっての…！

「そして僕は通常召喚でこのカードをリリースして氷帝メビウス
をアドバンス召喚…！」

氷帝メビウス

効果モンスター

星6／水属性／水族／攻2400／守1000
このカードがアドバンス召喚に成功した時、
フィールド上に存在する魔法・罠カードを2枚まで選択して破壊
する事ができる。

その言葉を宣言してから吹雪があたしの視界を遮つて1体の巨人
が姿を現す……って狙いはそっち!? それに確かメビウスって…

…

「メビウスの効果発動！！ アドバンス召喚に成功した時、フィールドに存在する魔法・罠を2枚まで破壊する！！！ 君のカードを破壊させてもらうよ、フリーズ・バースト！！！」

その声を合図にあたしのカードが凍り付いていく。こうなつたら「ココで使うしかないか……！」

「リバースカードオープン！！ 罠カード『輝石融合』……」

輝石融合

通常罠

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによつて決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、

「ジェムナイト」と名のついたその融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。

このカードはあたしがモトウブで手に入れたカーテゴリーカード……平穏を望み自分の核を傷つけてまで仲間の輝きを護る宝玉騎士『ジェムナイト』のためのカード……

「あたしは手札のジェムナイト・オブシディアとジェムナイト・サファイアを墓地へ送つて、エクストラデッキからジェムナイト・ジルコニアを特殊召喚するわ！！！」

地面を突き破り指の無い巨大な両手に翻されたマントを羽織った白い宝玉騎士・ジルコニアが雄叫びを上げながら姿を現した。

ジェムナイト・オブシディア

効果モンスター

星3／地属性／岩石族／攻1500／守1200
このカードが手札から墓地へ送られた場合、
自分の墓地に存在するレベル4以下の通常モンスター1体を
選択して特殊召喚する事ができる。

ジェムナイト・サファイア

通常モンスター

星4／地属性／水族／攻 0／守2100
サファイアのパワーで水を自在に操り、
敵からの攻撃をやさしく包み込んでしまう。
その静かなる守りは仲間から信頼されているらしい。

ジェムナイト・ジルコニア

融合モンスター

星8／地属性／岩石族／攻2900／守2500

「ジェムナイト」と名のついたモンスター + 岩石族モンスター

「ジェムナイト・オブシディアの効果を発動！！」このカードが手札から墓地へ送られた時、自分の墓地に存在するレベル4以下のモンスターを特殊召喚することが出来る！！ 蘇えれ、ジェムナイト・サファイア！！」

あたしが叫ぶと同時にサファイアが姿を現す。その腕に宿った水であたしを護ってくれるのはいいんだけど……

「コイツも守備表示よ……頼んだわよ皆……」

あたしが激励すると、2体のジェムナイトはあたしの方を振り向き、そして頷いた。

『我……姫タチ……護ル』

『僕とジルコニアがいる限り、貴女には傷一つ触れさせませんよ』

……』

ジルコニアが片言口調で淡々と頷いて、サファイアが気障つたらしく言い放つ。このデッキは彼らの魂も含まれたデッキで精霊として宿っているみたいで、移動している時とかはリイナの話し相手にもなつてもらつている。その一方でアイツは小さく笑いだした。

「なるほどね……ジェムナイトか……」

……え？ 今なんて言つたの！？

「……あんた、ジェムナイトの事知ってるの？」

「知ってるよ。それがどうかしたのかい？ それにこいつらってカードの精霊だろ？」

それを聞きあたし達は驚いた。カードの精霊はあたしだけの特権じやないからいいとしても、ジェムナイトはあたしがモトウブの秘境で手に入れたカードであり、M A W社のカードデータに存在しなかつたカードなのよ！？ あたしだってジェムナイトはココに来て始めて知つたつて言つのに……！

『ドゥイウ……事ダ？』

『僕に聞かれたつて分からぬよ！… 姫様は分かりますか！？』

あたしに聞いても分からぬわよ。でもただじゃすまなさそうね

「うーん……となるとサファイアを狙うつて言つのも怖いなあ……

手札にマーチャントがいたら悲惨だしね、かと言つてあのモンスターがメタモルポッジやないつて言つ可性も無い。メビウスじゅジルコニアを倒せそくなーいしミスつたなあ……

暢氣にそんな事を言つてゐる。でもそいつは自分の手札を見据えると意を決したのか攻撃を宣言した。

「ま、いいか。んじゃそのリバースモンスターに攻撃ね、アイス・ランス!!」

そう言つて氷の槍を手にして襲い掛かつてくるメビウス。あたしのリバースモンスターはなす術もなく貫かれたけど……

「あれ？ ジェム・タートル？」

そう、あたしが伏せていたのはジェム・タートル……壁兼キーカードでもあるジェムナイト・フュージョンを手札に加えるカードなんだけれどね……!!

ジェム・タートル

効果モンスター

星4／地属性／岩石族／攻 0／守2000

リバース：自分のデッキから

「ジェムナイト・フュージョン」1枚を手札に加える事ができる。

「効果を発動させてもらうわ。あたしはデッキからジェムナイト・フュージョンを手札に加えるわよ」

「まあいいよ。どうせ勝つのは僕なんだから。僕のターンは終了、つと

そりやまあ、あれを加えてもいいといった以上はね……でもあれはどうしても倒しておかないとあたしの気が済まないのよー！」

「あたしのターン、ドローーーー！」

手札に加わったのは……まあまあの引きね。新しいジェムナイトを融合召喚しようかとも考えたけど、アクアマリナを素材にしてもメビウスが手札に戻るだけ……黄泉ガエルがある以上、戻すのは馬鹿げてる……

「あたしはジェムナイト・アレキサンドを召喚ーーー！」

ジェムナイト・アレキサンド

効果モンスター

星4／地属性／岩石族／攻1800／守1200
このカードをリリースして発動する。
自分のデッキから「ジェムナイト」と名のついた
通常モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

そう言つてあたしが呼び出したのは赤・緑・青に輝くアレキサンライト……そこから打ち破つて姿を現すのは白い鎧を身に纏つた騎士・アレキサンドだった。

『姫、私の効果を使つてくださいーーー！』

「もちろんーーー！ あたしはこのカードをリリースして……
呼び出すのは彼らのまとめ役……このデッキのヒースーーー！」

「出なさい、ジェムナイト・クリスターーー！」

ジェムナイト・クリスタ

通常モンスター

星7／地属性／岩石族／攻2450／守1950
クリスタルパワーを最適化し、戦闘力に変えて戦うジェムナイトの上級戦士。

その高い攻撃力で敵を圧倒するぞ。

しかし、その最適化には限界を感じる事も多く、仲間たちとの結束を大切にしている。

姿を現したのは扇形のクリスタル、それを打ち破つてあたしのデッキのエースが姿を現した。

『レイナ……奴のカードは我々の知るカードとは違うかも知れない……』

あたしに対して呼び捨てで接するクリスタが警戒しながらそう言う。彼は他の面々と違つてあたしと対等の関係を築いているからコイツはレイナのデッキの人と同じ、あたしたちにとつていい相談役でもあるのよ。

「どうこう意味……？」

『カードの中には概念や意思に歴史といった重みがあり、君達はその概念を実体化させている……だが奴らのカードからは概念も意思も何も感じられないのだ……もしかしたら、あのカードたちはグラールに存在しないものかもしれないな』

「グラールに、存在しないですって……じゃあ何でそんなものがあるって言うのよ?』

『……すまない、私にも分からんのだ……』

クリスタが謝罪する中、アイツが声を上げて挑発する。今はこの決闘に集中しないとね。

「……サファイア、悪いけどいい？」

『当然です。仲間と共に戦うのが我らの定め。その為に墓地へ行く事に何のためらいがありましょうか』

サファイアの意思を受け取つてあたしはカードを一枚手にする……。それは先程手にしたこの『テッキのキー』カード……！

「あたしはジェムナイト・フュージョンを発動するわ……！」フィールド上の『ジェムナイト・サファイア』と手札のジェムナイトとのついたモンスター『ジェムナイト・アンバー』を素材にして……

サファイアの宝玉とアンバー……琥珀が混じり合い、1つの巨大な宝玉になる。そしてその中から水操の騎士が姿を現した……！

「出なさい、『ジェムナイト・アンバー』！」

ジェムナイト・アクアマリナ

融合・効果モンスター

星6／地属性／水族／攻1400／守2600

「ジェムナイト・サファイア」+「ジェムナイト」と名のついたモンスター

このカードは上記のカードを融合素材にした融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して持ち主の手札に戻す。

マリナが突き破つて姿を現した。だけどそれを見たタダシが怪訝そ
うな声を上げた。

「アクアマリナ……プリズムオーラじゃなくて？」

怪訝そうな声に対してもたしは思わずクリスタに顔を向ける。プリ
ズムオーラって、以前あたし達が倒した……

『我らだけではなく、我らが戦つたヴァイロンまで知つてると
！？』

「どう言つ事……？」

聞いた話だとあたし達がウォザーブルグで戦つたインヴェルズ…
…その本隊がモトウブで行動して、ヴァイロン達と同盟を結んで
戦つた事があつたみたい。その時クリスタが手にした力こそがプリ
ズムオーラなのよ。

でもあたし達が来た頃には既にヴァイロン達と戦い始めて、その
力も無くしたみたい。そしてあたし達はヴァイロン・プリズムオー
ラと戦い、それに打ち勝つた。

それにヴァイロンも大元が何者かに倒されたため、既に滅び去つ
た存在に成り果てている。どうしてモトウブの異能者たちの間でし
か知らないものが……？

「おねえちゃん、どうかしたの？」

そうだ。今はリイナを護るために戦つんだ。考えるのは終わつて
からでも問題ない！！

「……アレキサンドを除外して手札にジェムナイト・フュージョ
ンを加えなおすわ」

アレキサンドが姿を消し、あたしの手にはジエムナイト・フュージョンのカードが握られる。コレで全ての準備は整った！！

「バトルよ！！　まずはクリスタでメビウスに攻撃！！　ラス・

オブ・クリスタ！！」

『ハアアアツ！！』

クリスターの持つ宝玉が輝きを増し、その手刀がビウスの腹部を貫く……

「続けてアクアマリナでダイレクトアタック！！　アクアストリーム！！」

アクアマリナから放たれた水流があいつを飲み込まんと追い詰め

……

「最後にジルニアでダイレクトアタック！！　ジルニア・プレッシャー！！」

その巨大な腕をタダシの真上から拳で殴るよつに叩きつける！！

「ぐあっ…………！」

忠志

L P : 8 0 0 0 0 7 9 5 0 6 5 5 0 3 6 5 0

「コレであたしのターンは終了……攻撃した時、アクアマリナは守備表示に変更させてもううわ。」

水流を呼び出した腕でそのまま守備体制を整えるアクアマリナ…
コレでアイツがあのモンスターを呼び出しても戦闘破壊できはない……！ 仮にクリスタを狙つたところで返しのターンでジルニアを使ってぶつ潰す……！！

「ボクのタアアアン！！ ドロー！！」

そう言って奴が乱暴にカードを引き抜き、ニタリと笑つてカードを宣言した。

「スタンバイフェイズ時に黄泉ガエルの効果を発動！！ このカードが墓地に存在し、魔法・罠カードが僕のフィールドに存在しない場合僕はこのカードを特殊召喚する！！ 蘇えれ、黄泉ガエル！」

！」

そう言って天使が舞い降りるかのようにガエルが姿を現す……次はどういった手を使うのやら……

「更に僕は『死者転生』の効果を発動！！ ダンディライオンを墓地へ落してクイック・シンクロンを手札に加え直す！！」

死者転生
通常魔法

手札を1枚捨て、自分の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。
選択したモンスターを手札に加える。

ダンディライオン

効果モンスター（制限カード）

星3／地属性／植物族／攻 300／守 300

このカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上に「綿毛トークン」

（植物族・風・星1・攻／守0）2体を守備表示で特殊召喚する。このトークンは特殊召喚されたターン、アドバンス召喚のためにはリリースできない。

アイツがダンティライオンを墓地に落した瞬間、綿毛のようなモンスターが姿を現す……となると、口からが本番ね……！」

「そして僕は手札からもう1体の黄泉ガエルを墓地へ送つてクイック・シンクロロンを特殊召喚！！」

再び姿を見せるクイック・シンクロロン……今度はシンクロ召喚が狙いね！！

「レベル1の黄泉ガエルと綿毛トークン2体にレベル5のクイック・シンクロロンをチューニング！！」

そう叫んであいつのモンスターが3つの星と5つの輪になつて回りだし、あいつは声を上げて叫んだ。

「集いし闘志が怒号の魔神を呼び覚ます……光さず道となれ！！シンクロ召喚！！ 粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！！」

ジャンク・デストロイヤー……カールが愛用していたジャンクシンクロモンスターの1体！！ シンクロ口上もカールと同じだなんて癪に障るわ……！！

ジャンク・デストロイヤー
シンクロ・効果モンスター

星8／地属性／戦士族／攻2600／守2500

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、

このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数まで

フィールド上に存在するカードを選択して破壊する事ができる。

「ジャンク・デストロイヤーの効果発動！！ このカードがシンクロ召喚に成功した時、素材にしたチューナー・モンスター以外のモンスターの数までフィールド上のカードを破壊する！！ 嘘らえ、タイダル・エナジー！！」

その声を合図に胸部の球体からエネルギー波が放たれてジルコニアとアクアマリナにクリスタが破壊される……！！

『すまない、レイナ……！』

気にしないでクリスタ、アイツは明らかに判断を誤った！！

「アクアマリナがフィールドから墓地へ送られた時、効果を発動！！ 相手フィールド上のカードを1枚手札に……この場合はエクストラデッキに戻つてもうわよ、デストロイヤー！！ アクアリターン！！」

アクアマリナ最後の秘術が発動し、泡に包まれたジャンク・デストロイヤーがそのままアイツのエクストラデッキに戻っていく。コレでフィールドは事実上リセットつて訳ね……

「……コレで僕はターンエンド、さあチャンスだよお……かかつてぐるんだね！！」

「フィールドががら空き状態でターン終了……ですか！？　まだ通常召喚も出来たのに、どうして………！」

「何を考えてるの……あたしのターン、ドロー……」

「そう言つて手札に来たのは……助かつたわ。

「あたしは手札から魔法カード貪欲な壺を発動するわ！！」　貪欲な壺

通常魔法（制限カード）
自分の墓地に存在するモンスター5体を選択し、デッキに加えてシャッフルする。

その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「サファイア、ジルコニア、クリスタ、オブシディア、アクアマリナをデッキに戻して2枚ドローするわ！！」

現れた変な壺が仲間達を飲み込んでいつて2枚のカードを吐き出した。この場合、ドローって言つのかしら……

「……よし……」

「この手札なら一気に総攻撃を仕掛けられる！！　あからさまな罠もあるみたいだしね……」「はい、いつで行かせて貰つわ！！」

「ジェムナイト・フュージョンを発動！！　手札のジェムナイト・ガネットとジェムナイト・ルマリンを墓地へ送つてジェムナイト・マディラを融合召喚！！」　ジェムナイト・ガネット

通常モンスター

通常モンスター

星4／地属性／炎族／攻1900／守 0
ガーネットの力を宿すジェムナイトの戦士。
炎の鉄拳はあらゆる敵を粉碎するぞ

ジェムナイト・ルマリン

通常モンスター

星4／地属性／雷族／攻1600／守1800
イエロートルマリンの力で不思議なエナジーを創りだし、
戦力に変えて戦うぞ。

彼の刺激的な生き方に共感するジェムは多い。

ジェムナイト・マディラ

融合・効果モンスター

星7／地属性／炎族／攻2200／守1950

「ジェムナイト」と名のついたモンスター + 炎族モンスター
このカードは融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚する
事ができる。

このカードが戦闘を行う場合、相手はダメージステップ終了時まで
魔法・罠・効果モンスターの効果を発動する事はできない。

ガーネットとトルマリンの宝玉が交じり合い、赤熱している腕と
剣が特徴的な赤みが強いマディラシトリーンの宝玉騎士が姿を現す。

『姫様よお、戦いの時間があ！？』

彼はジェムナイトの中では珍しく好戦的な性格をしている。今まで戦ってきた溶岩の戦闘民族の影響だつてクリスタが言ってたけど

……

「続けてジェムナイト・エメラルを召喚…！」

ジェムナイト・エメラル

効果モンスター

星4／地属性／岩石族／攻1800／守 800
自分フィールド上に表側表示で存在する通常モンスター1体と
このカードをゲームから除外し、自分の墓地に存在する
「ジェムナイト」と名のついた融合モンスター1体を選択して発
動する。

選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。

そう言つて姿を現したのは翠色のジェムナイト……エメラルだつ
た。両腕に円盤状の武器を装備した彼が弱々しく言ひ。

『姫え……どう見ても罠ですよ～～』

「だからマディラも召喚したのよ…！ マディラ、エメラルの順
で総攻撃…！ 言つとくけど、マディラにはダメージ終了時まで魔
法・罠・効果モンスターの効果を発動する事出来ないのであしから
ず…！」

あたしの命令に對してマディラが待つてましたといわんばかりに
剣と拳を振りかざして攻撃を仕掛ける。『行つくぜえ…！ マデ
イラヒートニクス…！』

「ぐああああ…！」

忠志

L P : 3 6 5 0 1 4 5 0

「出番よエメラル…！ エメラルソーサー…！」

『一応撃ちますね……』

エメラルの円盤がアイツを捉えた瞬間、あいつが一タリと笑つたのが見えた。やっぱり攻撃を防ぐ手段を手札に忍ばせていたわね……

「速攻のかかしの効果発動！！ 相手が直接攻撃を宣言した時、こいつを手札から捨てることでバトルフェイズを終了する……」

そう叫んだ時、あいつの手札からかかしの様なモンスターが姿を現しエメラルの攻撃を防ぐ。カールの調整用デッキケースに入つてたモンスター……それがあつたからこそ、がら空き覚悟ジャンク・デストロイヤーを召喚したつて訳ね……

速攻のかかし

効果モンスター

星1／地属性／機械族／攻 0／守 0

相手モンスターの直接攻撃宣言時、このカードを手札から捨てて発動する。

その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

「……まあいいわ。ルマリンを除外してジエムナイト・フュージョンを手札に加え直してターンエンド……」

そしてあいつがカードを引くと、黄泉ガエルが再び召喚されてまたリース要員にされた。

「黄泉ガエルをリリースして光帝クライスを召喚する……」

光帝クライス

効果モンスター

星6／光属性／戦士族／攻2400／守1000

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、フィールド上に存在するカードを2枚まで破壊する事ができる。破壊されたカードのコントローラーは、破壊された数だけデッキからカードをドローする事ができる。このカードは召喚・特殊召喚したターンには攻撃する事ができない。

姿を現したのは金色の帝……他の帝と違つて特殊召喚でも効果を使える代わりにそのターンの攻撃を封じる闇帝ディルグの対を成す『双帝』と謳われるモンスター……！

「光帝クライスが召喚された時、2枚カードを破壊する……マデイラとエメラルを破壊！！ クライシスフラッシュユー！」

クライスから放たれた眩い光があたしの仲間を弾き飛ぶ……！ そしてあいつは強く言い放つた。

「後破壊された分だけカードをドローできる効果がある……喜べよお、2枚ドローできるんだからさあ！！ それに今回僕は戦闘できないしねえ！！ ターンエンドだあ！！」

そう言つてあたしは手札に加える……まずい、今手札にモンスターが無い……！！ そこでクライスが来るなんて思わなかつたし

「あたしのターン、ドロー！！」

そう言つてドローしたのは壺の中の魔術書……「レに賭けるしかないわね……

「魔法カード、壺の中の魔術書を発動！！」

壺の中の魔術書（漫画版GX登場カード）

通常魔法（制限カード）

互いのプレイヤーは3枚ドローする。

このカードを使用したターン、自分は特殊召喚する事ができな。い。

「んん？ このカードって漫画版に出てきた……」

「お互いに3枚ドロー……！」

何か言つてる様だけど無視！！ あたしの手札には……よし、モンスターカードが来た！！

「あたしはジェムナイト・サニクスを召喚……！」

ジェムナイト・サニクス

デュアルモンスター

星4／地属性／炎族／攻1800／守 900

このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、

このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

このカードが戦闘によつて相手モンスターを破壊し墓地へ送つた時、

自分のデッキから「ジェムナイト」と名のついたカード一枚を手札に加える事ができる。

今度は鉄球のようなものを持った赤と白の縞瑪瑙の宝玉騎士が姿を現した。

『……』

あたしがジェムナイトと共に戦うよになつてからも何一つ喋らない寡黙な戦士、だけど明らかにあたし達と共に進むことを決意した眼でクライスを見据える。……攻撃しろつてこと？

「いいわよ、サニクスでクライスを攻撃！！ サードニクスフレイル！！」

フレイルでクライスに襲い掛かる、でもクライスはそれを光で受け止める。そしてアイツはたかが下級モンスターに何が出来ると笑つている。

でもね……その油断が命取りよ！！ 絶対的な上位者だろうがなんだろうが、あいつらはSEED事変でもウォザーブルグ動乱でも圧倒的な存在を打ち破ってきた！！

この程度の壁なんて、あたしだけでも……あたし達だけでも超えられる！！

「ダメージステップ時に手札のジェム・マーチャントの効果発動！」

ジェム・マーチャント

効果モンスター

星3／地属性／魔法使い族／攻1000／守1000

自分フィールド上に表側表示で存在する

地属性の通常モンスターが戦闘を行うダメージステップ時に

このカードを手札から墓地へ送る事で、

そのモンスターの攻撃力・守備力は

「」のターンのハンドフェイズ時まで1000ポイントアップする。

あたしがサニクスと一緒に手札に加えたモンスターの効果を発動させる！！

1体の帽子を被つた両手だけがついたモンスターが纏っていた宝玉が、サニクスの鉄球に纏わりつく。そして輝きを増した鉄球が遂に光の壁を碎き、それを操っていた光帝クライスをも打ち碎いた！！

忠志

L P : 1450 1050

「更に1枚セットしてターンハンドよ。帝なんて前座出していないでさっさとあのカードを出しなさいよ！！」

「おねえちゃんがまつてたカードってあれのこと？ リイナこなぐてもいいとももつけど……」

リイナが尤もな台詞を言つ。まあ、あればかりはあたしのわがままだからねえ……

「で、お話は終わり？ 僕のターンだよ？」

そしてアッシュのターン……ドローしたカードを見据えた瞬間、奴は仕方がないといわんばかりに声を上げた。

「まずは黄泉ガエルを特殊召喚！！」

またカエルが蘇ってきた時、あたしは表情を強張らせた。その顔にはある種の確信……自分の勝利を疑っていない、見下したような顔が張り付いていた！！

「そいつをリリースして風帝ライザーを召喚！！」

カエルを巨大な竜巻が覆い、その中から1体の緑色の魔物が姿を現す……！！

風帝ライザー

効果モンスター

星6／風属性／鳥獣族／攻2400／守1000

このカードがアドバンス召喚に成功した時、
フィールド上に存在するカード1枚を持ち主のデッキの一番上に戻す。

姿を現したとき、サニクスの体が浮かび上がる。ジルニアアほどうまくしても重量級のジェムナイトであるコイツが浮かび上がるほどなんてどんだけよ……！！

「ライザーのアドバンス召喚に成功した時、フィールド上のカードを一枚デッキトップに戻す！－ 吹き飛ベサニクス、ハリケーンバースト！－」

その叫びと同時にサニクスが風であたしの左腕目掛けて吹き飛ばされてきた。するとアイツは嫌な笑みを浮かべて笑つてきた。

「さてと、あいつと戦いたがつてたよな。だつたらお望みどおりアイツを出してやる！－」

その発言を聞き、あたしの表情が強く強張る。当然だ、あのカードはある意味あたし達の運命を狂わせた……この世界で一番あたしが憎いカード……！！

「デッキから1枚墓地へ落す事で墓地からグローアップ・バルブを特殊召喚する!! 出る、グローアップ・バルブ!!」

グローアップ・バルブ

チューナー（効果モンスター）

星1／地属性／植物族／攻 100／守 100

自分のデッキの一番上のカードを墓地へ送り、

墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「グローアップ・バルブ」の効果はデュエル中に一度しか使用できない。

そう言って地面から姿を現す球根の様なモンスター……それを見た瞬間、リイナが疑問を声にした。

「でもそのカード……いつかいもだしてないのに、どうして……？」

「一回だけあるわよリイナ……アイツがそのカードを墓地に落す事が出来た状況が……！」

リイナの疑問にあたしが答える。そう、あのカードは……アイツの最初のターンで使った調律で墓地へ送られたカードだ!!

「そしてバルブの効果でデッキから1枚墓地に落す……」

そう言った矢先、アイツの表情が呆然となる。そしてアイツは何かおかしいのか、狂ったかのような大声で笑い出してきた。

「な、何がおかしいのよ！？」

「ヒヤハハハハハハ！！！ おかしくなるさー！！ まさかさつきドローレしたこのカードが召喚できる条件が整うなんて滅茶苦茶面白いギャグだよー！」

どういう事……「ナックトップのカードが墓地へ送られた事で特殊召喚が可能になるモンスターなんて一体何処に……」

「光属性のクライスと闇属性の魂を削る死靈を除外してカオス・ソルジャー - 開闢の使者 - を特殊召喚！！」

魂を削る死靈

効果モンスター

星3 / 闇属性 / アンデット族 / 攻 300 / 守 200

このカードは戦闘では破壊されない。

このカードが魔法・罠・効果モンスターの効果の対象になつた時、このカードを破壊する。

このカードが直接攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、

相手の手札をランダムに1枚捨てる。

カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -

効果モンスター（制限カード）

星8 / 光属性 / 戦士族 / 攻3000 / 守2500

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の光属性と闇属性モンスターを1体ずつゲームから除外した場合に特殊召喚できる。

1ターンに1度、以下の効果から1つを選択して発動できる。

フィールド上のモンスター1体を選択してゲームから除外する。この効果を発動するターン、このカードは攻撃できない。

このカードの攻撃によつて相手モンスターを破壊した場合、

もう一度だけ続けて攻撃を行う事ができる。

「……え？」

「……ちょっと待つて？ よりによつてそれ！？ 最初期に出てきた混沌帝龍と同じプレミア級の、それこそF・G・Dやダーク・ダイブ・ボンバーなんて目じやない超がいくつ付いてもおかしくないレアカードじゃない！？ しかも闇属性モンスターもあの時墓地へ送る事に成功してたなんて……！」

「一つの魂は光を導き、一つの魂は闇を誘う！！ 光と闇は交じり合い混沌となり、開闢の力は今ココに現れる！！ 現れる開闢の使者、カオス・ソルジャー！！」

そう言つて姿を見せたのは蒼い鎧を身に纏つた、伝説になつた混沌の力を得た最強の剣士だつた……最悪、ダーク・ダイブ・ボンバーだけじゃなくてそいつもいたなんて……！！

「まだだぜえ！！ レベル6の風帝ライザーにレベル1のグロー アップバルブをチュー二ングウウウ！！」

ライザーが6つの星になり、グローアップバルブが1つの輪になる。その瞬間、あたしは奴の口上に重なる形で“あの男”的な声を聞いた……

『我が身に宿る鉄血の翼！！ 黒き暴風となりて、全ての敵を打ち払わん！！ シンクロ召喚！！』

「禁じられた力、今こそ解放しろ！！ 貴様を解放した愚者に裁きを下せ！！ シンクロ召喚！！」

『「いでよ！！ ダーク・ダイブ・ボンバー！！』

ダーク・ダイブ・ボンバー

シンクロ・効果モンスター（禁止カード）

星7／闇属性／機械族／攻2600／守1800

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

自分フィールド上に存在するモンスター1体をリリースして発動する。

リリースしたモンスターのレベル×200ポイントダメージを相手ライフに与える。

あたしはあるモンスターを倒す事を考え行動してきた。戦うことを見ていた。でも、こんな事になるなんて思いもしなかった。

状況はあの時より悪い。恐らくあのカオス・ソルジャーこそがア

イツのデッキの本当のエースモンスター。本来ならあのモンスターだけを相手にしてればよかつたのに、あたしがああ言つたからあのようなモンスターまで出てきてしまった。

「バカな女だね君は！！ ダーク・ダイブ・ボンバーなんかを使わせなかつたら勝てたって言うのにさあ！！」

分かつてる。自分が一番バカな行動を犯したと言つ事は……カオス・ソルジャーは一枚だけと言う制限があるけど値段さえ無視したらまだ使えるカード。

だけどダーク・ダイブ・ボンバーは違う。あのカードはあたし達が生まれる前に禁止を受けたカードであり、本来ならデッキに加える事が出来ないカード。それをあたしが破つたため、訴えてもあたしが負けるのは決定的だ。

「俺はカオス・ソルジャーで攻撃イ！！」

カオス・ソルジャーがあたしに向かつて襲い掛かる。あのカードは伝説にもなつたカード、効果はあたしも知つてはいる。だからセットしたカードの使い道はココじゃない……！！

「開闢双破斬！！」

カオス・ソルジャーの剣があたしの服を切り裂き、吹き飛ばす。

「きやああああつ！！」

レイナ

L P : 8 0 0 0 0 5 0 0 0

「おねえちゃん！――」

リイナが泣きそうになりながら慌てて近づく。結構痛むわ……今でも斬られた傷が深いせいで意識が朦朧としてる……でもあいつらはこんな傷をいつも負つて帰ってきてた……中には死んだ人もいた……

だから……そんな顔しないでよ、リイナ……

「大丈夫よ……そもそも、モンスターを蘇生させてたらそれこそあたしが負けてたんだから……」

そう。あの時ライザーがサニクスを戻さなかつたら、さつきの攻撃がサニクスを破壊して第一刃があたしを切り裂いた。

そしてダーク・ダイブ・ボンバーのダイレクトアタックが決まって、ダーク・ダイブ・ボンバーの効果であたしのライフは0……だつたらカオス・ソルジャーの攻撃は甘んじて受けた方がまだ傷は浅くて済む……

「僕も召喚の手順をミスったよホント……さつさとバルブ使えばよかつたんだけどね……まさかこんなカード来るなんて思わなかつたからさあ――！」

そう言って高笑いを放つ。その表情は既に自分の勝利を確信し、あたし達でどう遊ぼうか企んでいる人でなしの顔……その顔を見てリイナは怯え、あたしも女としての嫌悪感を露にした。

「ダーク・ダイブ・ボンバーでダイレクトアタックだ！！　マックス・ダイブ・ボム！！」

あのモンスターが変形してあたしに向かって襲い掛かる。そう、

あのカードを使うタイミングはココ……

「リバースカードオープン！！ 正統なる血統！！ 墓地の通常モンスター・ガネットを攻撃表示で特殊召喚よ！…」

正統なる血統

永続罠

自分の墓地に存在する通常モンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。

このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターがフィールド上に存在しなくなった時、このカードを破壊する。

姿を現したガネットだったけど、ダーク・ダイブ・ボンバーの攻撃であえなく飲まれ、粉々に砕け散る。ゴメン、ガネット……！！

レイナ

LP : 5000 3900

「……俺はコレでターンarendさせてもらつぜ。流石に直接攻撃は怖いからな……」

ライフは3倍近く上回っていてもボードアドバンテージは圧倒的に不利。たとえサニクスを引いても守備表示にしたそいつをカオス・ソルジャーで除外してダーク・ダイブ・ボンバーで直接攻撃、その後でカオス・ソルジャーをリリースするだけで2600と1600のダメージであたしの負け……！！

「言っておくけどよ、手札には風帝ライザーがいるよ。何もしなくて黄泉ガエルからライザーを召喚してジ・エンドってわけさ

そう言つて見せびらかすように仕向ける。確かに風帝ライザーのカードだ……攻撃できなくても正真正銘敗北の危機つて奴じゃない……！

「あ……」

その時思い出した。あの時、あの男もまたこの状況下で自分の勝利を確信していた。もう勝てるはずが無い、あいつはそもそも言っていた。

でもあの時、あたしは最後の最後で一枚のカードをドローして、その状況を覆した。あの時とはフイールドが違う、手札も違う、デッキすら違う。

それにあの時のアイツは、あたしなんか比べ物にならないような絶対的不利な状況を覆した。まあキーカードは、デッキに入れた覚えの無いカードだって言ってたけど、あの時はお互い様だ。

何だ……怖気づく心配なんて無いじゃない。でも横を見るとリィナが今にも泣きそうな顔でこいつを見てくれる。

「……大丈夫ヨリイナ。あたしは負けないから」

そう言つて彼女を元気付ける。でもあの子はやつぱりどこか怯えた表情でダーク・ダイブ・ボンバーとカオス・ソルジャーを見据えている。

「どっちにしてもあたしは負けない状況なのよ……」

上等……見せてやるわよ！！ ウォザーブルグでの最終決戦に比べたらこの程度の敵なんか怖くないわ！！

デッキトップのカードに指をかけて目を瞑る。そこにいたのはモ

トウブに来てから世話になつてゐる2つのグループに、三騎士の……
特に行方不明になつたあの2人の姿……

あたしは意を決して声を張り上げた。あいつらが、三騎士がここ
ぞとばかりに宣言した勝利のための咆哮を……

「ファイナルターーン……ドロー……」

そう言つてあたしはカードを引き抜く。即座にあたしは引き当て
たサニクスを召喚する。

「あたしはサニクスを召喚して手札から魔法カード『馬の骨の代
価』を発動させるわ……！」

馬の骨の代価

通常魔法

効果モンスター以外の自分フィールド上に表側表示で存在する
モンスター1体を墓地へ送つて発動する。
自分のデッキからカードを2枚ドローする。

サニクスの姿が消えて行き、あたしはデッキに手を伸ばす。恐ら
くコレが最後のチャンス……口を逃せばあたしは負ける。
だけど、それがどうした……ＳＥＥＤ事変を生き抜いた人類舐
めるな……

「ドロー……」

2枚のカードを見据える……1枚はあの時のデュエルを決めた力
一ドだけど召喚条件を満たしていないのでフィールドには出せない。
だけどもう1枚のカード……そして手札に残つた2枚のうち1枚
であたしのデッキ最強のモンスターを召喚する事が出来る……

「……なんだよ？ 何で口一したんだよ！？ 何でそんな顔してんだよーーー！」

狼狽するのも当然よね、あの男はこのターンを凌いだら勝てる状況だから。でも残念でした、あんたの『次のターン』は永遠に訪れない！！

「手札から魔法力ード融合を発動！！」

融合

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによつて決
められた

融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「融合！？ バカな、何で『融合』なんだよ！？ お前の手札にはジエムナイト・フュージョンがあるだろうがああああ！！」

アイツはうろたえる。そつ、既にあたしの手札にはジムナイト・フュージョンのカードは存在する。でもこれから呼び出すのは少しばかり特別なカード……

「おあいにく様、あたしの最強モンスターはそれじゃ呼び出せないのよね。まあ出番よーー！」

あの男に引導を降した“母さんの形見”と、あたしの「テッキのH」
ースを交わらせるーー！

「七色の虹よ、水晶の宝玉騎士よ……今こそ交わり、その輝きを持つて闇を打ち払え！！」

そして2体のあたしの「テッキ」のエースは交じり合ひ、1体の虹の名を有するエースが姿を現す！！

「ジェムナイト・クリスタと……究極宝玉神レインボードラゴンを融合素材にしてレインボー・クリスタを特殊召喚！！」

今ココに虹色の宝玉と白銀の翼を持ったクリスタが姿を現した。

レインボー・クリスタ（オリジナルカード）

融合・効果モンスター

星10／地属性／岩石族／攻4450／守2950

「ジェムナイト・クリスタ」+「究極宝玉神」と名のついたモンスター1体

このモンスターの融合召喚は、上記のカードでしか行えず、融合召喚でしか特殊召喚できない。

手札の「ジェムナイト・フュージョン」を除外する事で1ターンに1度だけ以下の効果から1つを発動できる。

このカードの効果はそれぞれデュエル中1回しか使用できない。

相手フィールド上のモンスターを全て「テッキ」に戻す。

相手フィールド上の魔法・罠カードを全て「テッキ」に戻す。

相手の墓地のカードを全て「テッキ」に戻す。

「レインボー・クリスタだつて！？ そんなカードなんて無いぞ！！ なんだそりや！？」

効果はあるけど使わないで置くわ。何せ今回のデュエルの勝利条件は“アツ”を倒す事。生かしておく理由は無い！――

「行くわよレインボー・クリスター！！ ダーク・ダイブ・ボンバーを攻撃！！」

『了解したぞレイナ！！ ハアアアアアア！！』

クリスターの腕から七色の輝きが増していく。そしてその拳でダーク・ダイブ・ボンバー目掛けて打ち進む！！

どうだ、あたしは絶望的な壁をまた越えてやつたぞ。あの時とは違えど、父親だつた男を倒した時と同じ台詞をあたしは口々で言い放った。

「進む道を塞ぐヤツがいたら、何者だらうと乗り越えて進むまでよー！ オーバー・ザ・レインボー！！」

レインボー・クリスターの拳がダーク・ダイブ・ボンバーを打ち砕き、カオス・ソルジャーを巻き込んで盛大に爆発し、その拳はアイツを見事に捕らえた。

「ぐあああああああー！」

忠志

L P : 1 0 5 0 0

あいつは倒れ、あたしが従えていたモンスターも用が終わつたといわんばかりに姿を消す。そのデュエルディスクから一枚のカードが零れ落ちた。

そのカードはダーク・ダイブ・ボンバー……あたしにとつて最も憎むべきカード……どんなに呪われたカードでも、“これ”以上に怒りも憎しみも湧き上がつてこないだろう事は明らかだった。

そいつのお陰であたし達の絆は滅茶苦茶になつて、あのような結

末を迎えた。

「！」のカードのせい……あたし達は……！」

そう。コレは決定付けられた結末。高値で取引されてるレアカードどうがなんだろうが知った事じゃない。

あたしは何の躊躇いも躊躇も後悔もなく……

「……」

元が何だったのか分からなくなるまでズタズタに引きちぎってやつた。

姉としての戦い（後書き）

少しオリカの効果が強すぎましたか……？

ただ、レインボー・ドラゴンを含めた攻撃 + ダーク・ダイブ・ボンバーを破壊してのファイニッシュをしたかったので調整までしてこの有様……

まだ中二病患者末期が出ない……ネタはあるが、今度は敵対敵の決闘があるんです……まあ、そっちはテキパキと終わらせたいです……

ホントに切実に今年中に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3100x/>

傭兵と決闘者の協奏曲

2011年11月30日09時48分発行